ボートゲームの舟附場／中田満帆小説集

もくじ

ボートゲームの舟附場　4

離郷者たちと（アイリス、リー、そしてマイケル）　62

ディキンス・ハーを読解する　147

泥の王冠　184

あとがき　245

ボートゲームの舟附場

Aの場合

アルコール療養所を抜け脱して21日めのことだった。父がぼくを別邸へ連れだした。もともと叔父が棲んでいた2階屋である。表向きは家族会議。でも、話せることはなにもない。2ヶ月まえに自宅で転倒事故を起こしてからというもの、ぼくの頭はなんだか悲しい。姉とその娘の梨花、2番めの妹が一緒だ。母が料理を、かんたんなものをつくった。ぼくが実家にもどるかどうかが話の争点になった。頭に傷を負っても、それは厭だった。両親との関係はもう冷えていて、なにもつづくものがない。しかし姉妹はどうしても父の世話をぼくに負わせようとしていた。なんどもおなじことをいった、そのたびに遮られた。父には奴隷が必要だった。姉妹には生け贄が必要だった。ぼくは話の途中でポーチへでた。カウチに横たわって銀に光る秋の雲を眺め、それを算えた。冷えたかぜが吹き、口もとを遊んでは去っていく。そのさまが心地よいがいつまでもここにいるわけにはいかない。なんとしてでもアパートに帰らなきゃ。

そんなとき、車の停まる音がした。タイヤの擦れる音、そしてタイヤの焼ける臭気。ワゴンに乗った男たちが斜向かいの家に入っていく。しばらくするとひとびとを乗せて走り去った。車体には中央モスクという文字。すぐそこのモスクだ。ぼくはまたも雲に眼をやった。晩秋にはぴったりの雲だ。午時になってぼくは家屋へもどった。室内から子供の声がする。わざとらしく挨拶をする姪の声だった。ぼくは肯くだけだった。妹がいう――「兄さん、その態度はないんじゃないの?」

なにもいわなかった。母が支度した食卓にぼくは着いただけだ。なんの問題があるだろう。気になるのは姪っ子のにやに

や貌で、しきりにぼくのほうを見て、笑っている。厭な笑いだ。どうやらかの女にはたっぷりぼくの陰口が仕込んであるらしい。まるで小鬼のようだ。

「おじさん、室棲みになるの？」

「ヘヤズミって？」

「だれかの家の居候ってこと」

「ならないよ」

「嘘吐きは泥棒の始まりだってママが」

「ママの話は信じないほうがいい」

「でもおじさんは仕事もしないでどうするつもり？」

ぼくはもう相手にする気力がなかった。早く室に帰ってもういっぽん酒をやりたかった。まだブッシュミルズがいっぽんあるはずだ。妹が話を差し戻す。

「でもねえ、兄さん。いつまでもあんなところに一人暮らししないでも。倒れたときは支援センターのひとがいたけど、そうじゃかったらいまごろ死んでたわ」（ほんとに死んで欲しいくせに）とぼくはおもった。

「あなた、学もないんだからほんとうならいまごろ飢え死によ」と姉がいった。耐えがたいものを見るような眼でぼくを見、侮蔑していた。たしかにぼくはかの女たちとちがい修士どころか学士でもない。でも、それがどうした？ 他人の人生は、どこまでいっても他人の人生である。母はなにもいわない。父が声を荒らげて捲し立てた。

「おまえにはさんざんいったんだ、努力しろと。それもなにもしないから生活保護になるんだよ。頭をさげて、帰って来い」（なにをえらそうに。ぜんぶあんたのせいじゃないか）とおもった。（おれの人生に投資しなかったあんたらのせいじゃないか）とおもった。成績のいい理系の姉妹はさんざん金かけて育ててもらった恩義があるだろうが、定時制出のぼくにはなにもない。もし理解のある家だったら、美術学校にでもいかせてくれたろう。だのにぼくはこんなところで優秀な家族につめられている。ややあって電話が鳴った。妹の旦那らしかった。

「もうじき孝志さん、息子をつれてこっちへ来るって」（どこまでおおごとにするんだよ）とおもった。きょうは肉親そろって折伏パーティーというわけか。やがて旦那と息子も到着した。どうやってもきょうじゅうにおれの実家送りが決まりそうだった。孝志という男はＰＣのエンジニアだった。息子の漣は中学受験をしていまは2年。気怠そうに手をふってわれわれに応えた。

「おじさん次第だよ。このまま野垂れ死ぬか、生きるかは」

14歳には不格好な科白だ。だらしないスウェットを着て、スマホ片手に喋っている。正直、むかっとした。

「早く決めてよ、こっちは選抜試験の準備なんだから」

「義兄さん、あなたの態度はよくない。じぶんだけの生き方とでもいうんですか？　もう41だ、夢だの希望だのの年齢じゃないでしょう。現実が遠すぎる。考え直してさ、アパート引き払ってよ」と孝志も捲し立てた。

「おいおい考えますよ」

ぼくとしては穏やかに済ませたかった。うなだれた集団のなかで貌を明るくして帰りたかった。２０３５年はまったくひ

どい年だ。酒乱に糖尿だ。ぼくは暖房で手を温めた。すると漣が寄って来た。

「どうして酒を呑むのさ」

「理由はなんでもいい、脳の病気だから」

「おれは呑まないよ、これからも」

「そりゃあいい」

「じゃなくて」

理由を訊いているのではないのだ。ぼくは家系の話をした。中尾家に伝わるわるい酒について話した。それでも漣は納得しなかった。ぼくは諦めていった、――「人生のちがいさ」（もちろん、これは究極の逃げだ）とおもう。梨花はとにかくいじわるくおれにふるまった。それを姉は咎めもしない。まだ9歳だというのに場の力関係について熟知していた。

「逃げてもムダよ」

「逃げてないさ」

「きょうあることを忘れても、問題がなくなるわけじゃないってこと」

「大人らしいことをいうじゃないか」（だから余計に憎たらしいのだが）とおもった。

「歳のわりにずいぶん子供らしいのね？」

妹が寄ってきた。ぼくは窘めた。

「ちゃんとした大人だったら子供の言動くらいなんとかできないのか？」

妹は口を尖らせる。面子を潰してしまったようだ。

「なによ、穀潰しのくせに」

ぼくは紳士らしく肩をすくめて見せた。そしてそれが効かないと気づいたとき、ふたりを平手で撲った。悲鳴。ぼくは慌てて父の車に乗って身を伏せた。幸いキーが刺さったままだ。エンジンを吹かして、西を目指した。北のなかの西を。南でない西を。西の西の西を。森のなかにふるいびっくりハウスがあった。ポケットの葉巻を一本吸い終えるまで、じぶんが逮捕されるかどうかを考えた。どうだっていい。アパートへの恋しさもどっかにいってしまった。ぼくは両手で肉親を傷つけた。葉巻がなくなって、びっくりハウスを覗いた。『ゆめと意識の科学館』という看板がかけてある。戸口に立つと灯りが点いて、ブザーが鳴った。なかから若い男がでてきた。

「どうぞ、空いてますよ」

「ええっと……」

長い廊下を歩いた。地下への階段を降りるあいだに一通り聞いたが、ここは夢の意識を他人と共有するための施設ということだ。被験者を眠らせて、より共感性の強い被験者と接続するそうだ。円形のプールにボートが係留されている。ぜんぶで6つあった。男はぼくの身体や脳波のデータをとると、注射をして、ボートに眠らせた。とにかく現実から逃げたかった。眼が醒めると車に乗っていた。隣に若い男も乗っている。

「まだテスト入力です。ここは夢でも現実でもありません」

「……ということは？」

「死にいちばんちかいところです」

「おれ、やめようかな」

「もう無理ですよ、中尾さん」

「でも、このまま死にはしないんですか？」

「どうして？　わたしもいますよね？」（それはそうだがほんものかがわからないのに）とおもった。やがて若い男――古頭盃のかげが薄くなって消えた。そしてわたしはひとりで車を運転している。ブレーキの調子がわるい。３車線の道で渋滞にぶつかった。それでもみな平気な顔をしている。おれは近寄ってきた白人にアイムソーリー、アイムアポロジャイスといった。やがて車をそのまま降りてショッピングモールへ入った。長いエスカレーターがあった。隣には女連れのビートたけしがいて、ぼくの身の上を聞くから、ぼくは長々と喋った。ずっとむかしの子供のころのこと。まだぼくが姉や妹と、仲違いするまえのことやなんか。ビートたけしはなんにやら心配したような顔だった。ぼくは（喋り過ぎた）とおもい、黙った。

「おめえ、まじめが厭だから詩書いてんのか？」といわれ、

「そう見えるかも知れません」と逃げた。

閉店直前の化粧品コーナーをどうしてか歩いていた。鏡台のまえに半裸の女がいた。若くてみずみずしい。ぼくはうしろから抱きしめた。女はいたずらっぽくわらい、ぼくのポルノコレクションを紙吹雪のようにまき散らした。さまざまな姿態の女たちが世界で炸裂する。恥ずかしくてどうにもならない。でも、これは夢だ。夢のなかではいつでもぼくの欲望が問題にされる。女のこと、酒のこと。どれもが曝される。でも、かの女に魅了されたぼくはかの女のバスタオルをまくり上げ、

その肩に唇を寄せた。なにしろ、これは夢だから。女は消え、ぼくは地下の倉庫にいた。パレットに積まれた商品たち、姉や父が追って来る。おれは怒って、ナイフをだした。片手に電針銃（テーザー）を持った。そして姉に襲いかかると、その額の左側へナイフで醜い疵をつけた。血はでなかった。皮膚と骨のあいだに入るナイフの感触だけがリアルだった。やがて投降を促す声がした。

「中尾さん、降参してください」（そんなことはできない）とおもう。

「これ以上は危険です」（いったいなにが起きているのか）とおもう。

「戻れなくなります」（どうやらここまでのようだ）とおもう。

ぼくは武器を棄てた。そして長いながいヘリポートへの階段をあがる。ぼくはThe Smithsの『half a person』の最後のリフレインを懐いだしていた。"That's the story of my life"（これがぼくの人生の物語だよ）という部分だけが壊れたレコードのようにつづく。ポートのうえから身を投げた。（これが夢ならば、まだぼくにも語るべき人生があるってことだ）っておもった。それからさきはよくわからない。

＊

Sの場合

１９８７年、大学生のスティーヴン・ノーランは両親の離婚を経験。父母ともかれの引き取りを拒み、スティーヴンはコロラドの田舎町で叔父夫妻宅に居候するようになった。そのころにはすでにアルコール依存症であり、軽微な性犯罪によって保護観察処分を受けていた。翌年、保護司と叔父に無断でブルックリンへ転居。大学の同級生ヒル・アルモンドを殺害。つづけてヒルの恋人であったジョーン・ギャラガーを強姦のうえ殺害、遺体損壊、その一部を食したとされる。さらに翌年中学時代の歴史教師への殺人未遂で逮捕され、現在も黙秘のまま収監中。

スティーヴンはとても優秀な学生であったが歴史については偏執的な考えを持ち、教師との諍いは絶えなかった。「まちがったことを教えてる」と父に話したのはわずか10歳のときであった。父は息子を納得させるのに骨が折れたと語っている。母といえば息子に対して放任していて、息子の食事の好みすら「記憶にはない」と断言している。

２０３０年に始まった夢ボート療法がめざましい進歩を遂げている。スティーヴンの監察医はかれを被験者に撰んだ。いまだ供述も曖昧で、被害者への感情も口にしないかれにできるのはそれだけのことだった。

「きみはじぶんの年齢がわかるかな？」

「たぶん、16だ」

50を過ぎたかれは答えた。

「きみの記憶は後退している、その治療のためにきみの夢を使い、きみの意識を他者と繋ぐ」
「好きにしなよ」
「ああ、そうするとも。きみのような人間にはぴったりの実験だ」
施設のそとの巨大なテントにプールがあった。ボートが12艇も係留されている。実験は夜に行う。全員同時だ。1ダースの被験者とともにスティーヴンは入って来た。寝間着で検査を受けると、ボートの上で横になった。サイン波が聞える。灯りが落とされ、眠剤が効き始める。
「やあ、スティーヴン」
「あんた、だれだ？」
「クレイ・ヴィンス医師だ。きみの担当だ」
「ここはどこだ？」
「ここは夢でも現実でもない、死のような場所だ」
「おれは死んだのか？」
「いいや、接続を待っているところだ。12人のうち、だれと繋がるかはわからない」
「繋がったところでおれは変わらない」
「みんなそういうよ」
ヴィンス医師が消えた。スティーヴンは起き上がった。ベッドの上だった。それもブルックリンの路上。片方の靴がない。

毛布を剥いで、ベッドを降りる。だれかがおれを呼んでいる。ジョーンだ。かの女が助けを求めている。おれは近づいていった。小さな箱をあけて手を入れると、ジョーンのミニチュアがヒルに襲われている。おれは見ているしかなかった。ヒルがジョーンを殺した。でも、おれはそのままヒルを殺して逃げた。歴史だ。これがおれの正しい認識。折りたたまれた車を回転させながら、あの歴史教師を探す。やつにおれは訊こうとしただけだ。あんたの認識は合っているのかと。だれかが足を触る。触っては過ぎてしまう。おれは掴んだ。

「あんたはだれだ？」

「ぼくはナカオ。きみとおなじ被験者だ……」

おれはナカオとショッピングモールへ入る。長いながいエスカレーターがあった。一段まえにレイモンド・カーヴァーが立っている。おれはおもわず声をかけた。すると岩のような顔をした作家がやわらかな笑みを返した。

「インタビュー、読みましたよ。ダレルとミラーの往復書簡買いました」

「そうかい？　ありがとう」

「あなたは職業としての〝作家〟に撰ばれたとおもいますか？」

「先へ導いてくれるものがあれば、それは撰ばれたということなんだよ」

つまり導くものがないおれは作家じゃないってことだ。「じゃあ、急ぐからね」と作家は消えた。あれはかれの魂しいなのか。そのままおれたちはエスカレータを上った。ナカオは化粧品のコーナーへいった。そしてそこの女を抱きしめていた。ポルノ画像が嵐のように駈け巡る。気づくとおれはバスターミナルに立っていた。The smithsの『half a person』の最後の

リフレインを懐いだしていた。"That's the story of my life"（これがぼくの人生の物語だよ）という部分だけが壊れたレコードのようにつづく。やって来たダブルデッカーバスがおれを轢き殺した（これが夢ならば、まだおれにも語るべき人生があるってことだ）っておもう。やがて眼が醒めたおれは証言を再開したんだよ、やっと。

*

Kの場合

夢ボートの開発を追いだされて、もう10年が過ぎた。まだ若かったわたしはボートの意義というものを肯定できず、ある日の実験中に試作ボートの電源ユニットを破壊してしまった。そのあと1週間してわたしに下った罰はあたらしい被験者になることだった。もちろん報酬ゼロの仕事。恥ずかしいかぎりだ。いまでもぞっとする。両手足を拘束されたままボートに乗せられ、催眠状態に入った。恐怖心で昂ぶったこころが引き裂かれるように痛んだ。

「数見くん、きみには失望したよ」

上司の宇佐美が臨死状態のわたしにいった。

「きみのせいで、ひとりの被験者が夢からでられなくなった」

「おれのせいじゃない！」

「責任をとってあげるから、きみはかの女を助けにいってくれ給え」

わたしは息を呑んだ。宇佐美の姿が消えてゆく。眼のまえが昏くなってやがて知らない町を歩いていた。視界が退色している。まるで古いフィルム映像にそのまま入り込んだかのようだ。ひとの貌がうまく認識できない。でも、声が激しい。キュビズムをスーパーリアリズムへ落とし込んだような歪な2階屋へ入っていった。それがじぶんの意思か、そうでないのかもはっきりしないなかで。風通しのわるい、黴臭い室のなかで女がひとり酒を呑んでいた。かの女が被験者なのか。その貌

を確かめようと覗き込んだ。

「わたしを探しに来たの？」

「え？」

「どうやらほんものの人間はわたしとあなたのようね」

かの女は赫い髪を掻き上げながら、愁いを帯びた眼差しでわたしを見た。わたしはじぶんの姿を確かめようとした。下半身が丸裸だった。おもわず、股間を隠してうろたえた。欲望のままに他人を識ろうとする心がこういった姿にさせたにちがいない。かの女はわたしのペニスを抜き取って、窓から投げた。乾いた音がした。血が前掛けのように広がった、それがやがてズボンになった。わたしの羞恥心をわたしの血が拭い去ったのだ。

「女に飢えてるの？」

「そういうわけじゃない――でもここは居心地がよくないみたいだ」

「わたしは帰らない」

「どうして？　このままじゃ寝たきりだ」

「あなたは父にいわれてここに来たんでしょう？」

「宇佐美所長の娘さん？」

「わたしはあの男を赦すつもりはない」

そのとき大きな破裂音が鳴った。建物をつんざくような振動とともに黒い物体が地面に突き刺さる。それは巨大な宇佐美

だった。眼鏡の奥の眼が冷たく光り、ゆっくりとかの女を見定める。かの女は手早かった。懐から拳銃をだして、巨大な父親を撃ち抜いた。怖ろしいほどの悲鳴がして、宇佐美は砂になって崩れた。わたしが驚いていると、かの女は平然とした貌で、酒を注いだ。

「苦しむだけ、苦しめば好いのよ、精神科医なんて」

「なにがあったんだ？」

「わたしのこれをみればわかる」

かの女は上着のボタンをひとつずつ外した。ちょうど心臓のあるだろうところに穴があった。瞬間、そこから飛びだした大きな手がわたしの顔を引きずり込んだ。悲鳴することもできない。

「あいつがやったことよ、よく見て」

ペニスが大きな手に刺さっている。うねうねとうごき、いまにもかの女をまるごと貫いてしまいそうだった。わたしはそいつを根元から喰いちぎった。それでも傷口から何千もの陽物が顔をだす。やめて！――かの女は自身の躰にむかってそういった。陽物とともに大きな手は穴に収まり、かの女はボタンを留めた。わたしは嘔き気を憶えてしばらく黙った。

「これ以上、あいつのおもちゃにされたくないの」

そこで場面が変わった。わたしはかの女とロング・アイランドにいる。バス乗り場でカウボーイが死んでいる。広場を永久運動するバスを止めることはできなかった。《鶏はまわる、鶏はまわらない。》と書かれた伝言板にかの女がじぶんのなまえを書いた。宇佐美柊子、それがかの女のなまえだ。わたしはスマホをだしてタクシーを呼んだ。しかしやって来たのは救

急車だった。わたしたちは救護隊の衣裳を着て乗り込んだ。

「きみの痛みをわかってあげることはできない。でも希望を見せることはできる」

「どういうこと？」

「おれの夢に案内するよ」

わたしは海へいこうとおもった。映画『ノッキング・オン・ヘヴンズ・ドア』みたいに。宇佐美の虚像から逃れて、海へ。走り始めてそれが無意味かも知れないという不安が襲ってきた。なにしろ、車は不安定なバイパス道路の上で、右へ左へ蛇行し、やがて森に入ったからだ。わたしは衣裳を脱ごうとした。暑すぎるからだ。柊子は不思議そうにわたしを見る。わたしはアクセルを踏みつづけた。のろのろとうごく車体。やがて建物が見えて来た。黒い現代建築には「鉄の博物館」と看板にあった。

「これがあなたの夢なの？」

「そうらしいな」

「いってみようか？」

わたしは肯いた。海への手がかりがあるかも知れないからだ。ひと気のない建物だが、数人の職員らしい男女がいる。1階のカフェテリアは無人だった。おれはサンドイッチが置かれたカウンターへいって、ふたつ失敬した。柊子は笑った。初めて笑ってくれた。わたしたちはふたりでテラス席に坐って、それを喰った。なんの味もしなかった。

「こんなもんだよね、夢って」

「なかも入ってみようか」
「うん」
わたしとかの女は博物館のなかへ。すると迎えに来た職員の男が地下を案内した。厭な予感がした。やはり地下にあったのは円形のプールで、ボートが係留されている。試作機だ。なかには白髪の老人が眠っている。そのとき、柊子が小さく悲鳴した。天井から黒いなにかが突き刺さっている。宇佐美にちがいない。かの女は拳銃を構えて、狙いを定める。宇佐美の声が響き渡る。それは柊子を刺激した。弾丸が尽きるまで打ちつづける。飛び散った宇佐美がボートの老人に取り憑く。覚醒した老人の声で宇佐美がいう。
「柊子、きみの自由を尊重するよ」
柊子は銃をリロードする。
「だから心を閉ざしちゃだめだ」
かの女はもうつぎの狙いを決めている。
「だってきみはぼくのものなんだから！」
老人の頭が吹っ飛んだ。わたしは柊子の手を掴んだ。そのまま階段を駆け上がって博物館をでると、走って来た車をヒッチハイクした。慌てて後部座席になだれ込み、運転手に怪訝な顔をされながらも、わたしはいった。
「海はどこだ！」
「おやおや、ということはおまえさまは海へ行きたいのだね？」

黒縁眼鏡の男がいった。助手席に工具類が広げてある。

「ええ、そうです。できれば産婦人科医のいる海が」

「ではお見せしましょう」

車が走りだした。うつくしい旅路だった。柊子はバカルディ・モヒートの壜を持っている。一緒に呑んでみたが味はない。でも、最後まで呑む。やがて沿岸部へ来た。通行止めの看板を薙ぎ倒し、砂浜へ降りてゆく。不安定なビートが聞える。わたしはＣＡＮの『Mushroom』をスマホから聴いている。まるで故郷を懐いだすようだった。父と一緒にヨットハーバーにいったときの光景を噛みしめる。

「着きましたよ」

仮面ライダーＢＬＡＣＫのお面をかぶった少年がいう。わたしたちは降りて、海の家にむかった。そのなかは広大なディスコティックで、ガラスで仕切られたむこう側では映画を上映している。ウェイターがやって来て、奥の席を勧めた。

「ご注文は？」

「産婦人科医をひとり」

「かしこまりました」

ウェイターが去った。時間の感覚がだんだん早くなる。呼吸が荒い。もうすぐ睡眠から醒めるらしい。若い女が白衣を着て、入ってきた。わたしたちを見つける。それはむかしの母だった。たしかまだ28だ。

「恵一、大きくなったのねぇ」

母はやさしく笑った。

「母さん、このひとを助けてやってください」

わたしは柊子の手を握りしめた。かの女がわたしを見つめる。

「どうしてほしいのかしら?」

「柊子さんを、もういちど産み直して欲しいんです。かの女を妊娠してください」

母は肯いた。そして柊子の手をとって映画のなかへ入っていった。わたしは静かに嗚咽した。これでかの女は大丈夫なはずだ。でも、かの女と現実で会うことは叶わないだろう。気づくと、実験プールにいた。わたしは点滴を受けて横になっていた。たしかに現実である。廊下のほうから男の悲鳴がした。宇佐美の声だ。

「なにをするんだ、柊子!」

スタッフを説得して、わたしがようやく現場に着くと、病衣を着た柊子が宇佐美を撲り飛ばしたあとだった。わたしは急におかしくなって笑った。そんなわたしを見て、柊子が笑った。

「数見さん、次の仕事探さなきゃね」

「そうだね。——じゃあ、いこうか?」

わたしと柊子はその週のうちには結婚を決めた。転職はきびしかったが、それも乗り越えた。いまではふたりの子供もいる。さっき電話があった。長らく精神病院に入院していた宇佐美元所長が亡くなったということだった。これでもはや柊子を傷つけるものはいない。わたしはレコード棚からマイルスの『In A Silent Way』をだしてじっくりと聴いた。

*

Mの場合

みんなと一緒だったときから、わたしはちがうっておもっていた。だれかがそばにいるときでも、じぶんがひとりのような気がしていた。なぜっていうのはわからない。だから少しずつじぶんから、みんなの場所を去ってしまった。いまではもうだれの顔も浮かばない。だれかの声を求めるなんてわたしにはできない。そんなことは身勝手だし、じぶんからいなくなったわたしをだれが受け入れるものなのか。

夢ボートの話を聞いたとき、わたしはだれかと繋がることへの欲望をどうしても抑えられなかった。たったいちどはなれただけで、これからもずっとはなれつづけることに耐えられそうにないから。どうしても被験者になりたかった。もちろん、簡単じゃない。何ヶ月も受診が必要だし、多くのひとびとと会わなきゃならない。でも、わたしが世界と繋がる最後のきっかけみたいにおもえたから、この日までやってきた。また学校にいってみんなと話したい。

丸いプールに舟が浮かんでいる。ぜんぶで6つ。わたしをふくめて被験者はみんな女性。でも年齢はばらばら。まずは臨床医との面談。それからデータ収集。それからボートへ。水にゆれられるままにされ、点滴を受ける。やがて眼のまえが昏くなってひとの声がした。

「田村百瀬さんですね？」

「はい」

「わたしの姿がわかりますか？」

暗がりのなかで男のひとが立っている。

「ええ」

「これから接続を開始します。落ち着いてください」

「わかりました」

なにかの電源がオンになったような駆動音がする。それがだんだんと近づいて来る。眼のなかが明るくなる。気づくとどこかの墓地にいた。子供たちがかくれんぼしている。「もーいいかい？　まーだだよ」なんて。無邪気だなっておもった。お墓でそんなことができるほどにこの子たちは純粋なんだっておもった。「もーいいかい？　もーいいよ」。隠れていた子供たちはみんな大人になってしまっていた。鬼の子だけを取り残して、そしてその子は小さいときのわたしだ。おもわず、声がでた。わたしは大人たちを掻き分けるように進み、藪のなかへ逃げてしまった。息が荒くなる。小さな胸から大きな咳がでる。なんでこんなにも動揺してるんだろうか。ここは夢だってわかりきってるのに。

どうにかじぶんを落ち着けて藪をでた。そこは学校のウォータークーラーのあたりだった。みんなが水を呑み、はしゃいでる。なにをそんなに喜ぶことがあるんだろ。わたしは不思議だった。幼いころからずっと。でも疑問を持たないように過ごして来た。だからわたしも仲間に入れてもらおうとした。

「こっち来んなよ、ブス」

平井さんがそういった。かの女につづいてみんなが罵声を浴びせる。わたしは走って逃げた。地上から2階へつづく階段

をあがって教室のあいだにある、車道に飛びだした。車がクラクションを鳴らす。だれかが中指を立てる。裏切られた気分でバスを待っていると、女のひとが屋上から降りて来た。かの女はまったくの無表情でいう。

「どうやら、ここはあんたの夢みたいね？」

「そうですね……」

「あまり魅力的とはいえないね。あたしの夢に来なさいよ」

かの女は金髪に染めた髪をなびかせ、短いスカートからナイフを取りだした。

「ここの空間、まだ未完成らしいね」

そのままナイフで廊下を切断し、そのあいだから進んでいった。そのさきには夜の町があった。クラブや、バーの立ちならぶ、怪しい感じの通り。貌のない客引き。おなじビートが連続するだけのうるさい音楽。わたしは戸惑った。ホストクラブらしい建物にふたりで入った。シャンパンタワーが逆再生されるなか、女はラウンジに坐って、注文をくり返した。

「北都くん、呼んできてよ。光紗が来てるっていえばわかんだし」

「あいにくですが、お客さま。北都は接客中でして」

光紗さんがボーイのひとを蹴りあげた。

「呼んで来ねえとこの店潰す――どうせわたしの夢なんだから」

光紗さんはべつのテーブルから男のひとを引っぱって来た。どうやらそれが北都らしい。

「この男、あたしをさんざん喰いものにして居直ったくそやろうよ」

光紗さんは男のひとの胸を叩いた。

「やめろよ、光紗。おれだっておまえが好きなんだよ」

「ばかいってんじゃないわよ！　やくざにケツまでくれてやったホモ助が！」

男のひとはそれきり消えてしまった。光紗さんはまたボーイを呼んだ。わたしはさっさとじぶんの夢に帰りたかった。でも、これがわたしがみんなのなかに入るチャンスなんだろうか。どうしてもわからない。

「北都くん、呼んで来てよ。あたしが来てるんだから」

かれはまた現れた。こんどはおなかから血を流していた。わたしはめまいがした。嘔き気も少し。光紗さんはそれをあざけるようにまたもかれを罵倒した。

「その疵痛いでしょう、死にたくないでしょう？　売りまでやらせて、シャブも仕込んで好き放題のあんたをあたしが刺してあげた。地獄で報いを受けて！」

「光紗、もうじき金が入るんだよ。おれがナンバーワンになって店をでたら高級外車がおまえを待ってる！」

まるでかれはストップモーションの人形みたいっておもった。光紗さんは高笑いしている。わたしはもう耐えられなくなった。ここでなにかいわないとボートの意味がないっておもった。だからかの女の手を掴んで、その瞳に問いかけた。

「光紗さん、ほんとうにこのひとが憎いの？　それともこのひとを忘れないじぶんが憎いの？」

じぶんでも怖いくらいキツい云い方だった。光紗さんもやり返す。

「はぁ？　あんた、なにいってんの。わるいのはぜんぶこのばかで、憎いのもおなじよ」

「でも、終わんないよ。このままこんなことしても」

「じゃあ、あんたがあたしの人生、償いなよ」

わたしは光紗さんの手をとって、ラウンジの下にある空間へ導いた。そこはバスの車内だった。学校までのバスのなか、みんなが話している。そのなかにもうひとりのわたしがいる。楽しそうなわたしを光紗さんが嗤う。

「あんたってけっきょくふつうになりたいだけね。でもあたしはちがう。特別になりたいの。いまさらクラスメートのやさしさなんか要らない」

「そうかも知れない。でも光紗さんはほんとうに特別になれたの？」

かの女は黙りきり、そのままバスは学校に着いた。みんなが降りていく。運転手もいなくなる。バスはもう進まない。静かな朝の陽射しが、秋の光りが、瞬いている。わたしは光紗さんの過去が知りたくなった。光紗さんはまたもナイフでバスを切り裂いた。どこかの田舎の町の夕暮れにいた。制服姿の女の子が林道を自転車で走っていく。高校生の光紗さんだった。そのままかの女は家にたどり着く。けれども玄関が開かない。裏口から窓を覗く。男女が絡み合っていた。高校生の光紗さんはじっと家のまえでふたりを待つ。やがて夜になる。ようやく男のほうがでてくる。玄関に立つ母親がようやくかの女に気づく。「あら、そんなところにいたのね。――塾はどうしたの？」と声をかける。光紗さんは泣きそうになるのを堪えながら、「きょう休みだよ……」と答える。

場面が変わった。倍速再生される光紗さんの日常。不良仲間とのつきあい、ヤバいパーティー、男たち。田舎をでて働く。誘われてホストクラブに入り浸る。そして北都との出逢い、荒んだ生活、ナイフ、警察、裁判、懲役、出所、――北都の死。

冷たい刑務所の塀が都会のなかにまで侵入している。塀のなかのひとびとの営みがどこまでいっても、わたしたちの世界と交わらないでいる。それがとても悲しかった。わたしは光紗さんと塀伝いに街を歩いた。そしてわたしたちは塀のなかに手を差し入れて、互いの手を握りあった。

そこで夢は終わって、わたしたちはボートから降りた。被験者のなかに金髪の女のひとはいないけど、たしかに光紗さんはいた。呆然とした顔で廊下を歩いていく。わたしはそっと声をかけた。

「あの光紗さん、ですよね？」

「あんたは？」

「百瀬です」

「そうか、あの手の感触……」

光紗さんはじぶんの手のひらをしばらく眺めていた。

「また会えますか？」

かの女は立ち止まった。

「会ってどうすんのよ」

「え？」

かの女はまた歩きだして手をふった。

「帰りなよ、まともな世界に」

わたしはなにも云えないままで、その日は病棟にもどった。そして5日、心理検査の結果がでて、わたしは退院することになった。夢ボート療法の効果はまだよくわからない。日常に還されてすぐ、学校へのバスに乗った。もう放課後がちかい。それでもわたしは学校にいった。ウォータークーラーのまわりで騒ぐ子たち。そのなかに入って話そうとおもった。みんなが珍しそうにわたしを見る。いやだ、見ないで。でも、わたしは声をかけていた。なにをいったのかはもう憶えてない。気づいたときにはボール遊びをしてた。高く投げたボールがカーヴするなか、同級生たちがいっせいにジャンプを決め、ボールの上を飛んでるのが見えた。

*

Hの場合

後頭部にひでえ打撃を受けた。ロープがおれを死に追いつめる。まさかとおもった。こんな試合で負けるなんてと。気づいたときには発作で全身びくびくだったらしい。脳にまで疵を受けて、おれは立ち直れるのか。2階級制覇は夢に終わった。タイトルがむなしい。すべてがぺらぺらのうそっぱち。バスジャックでもやらかして、乗客ごと自爆したくなる。それでも医者はあんたの精神に異常はないという。ばかたれが。おれがどれだけひとを憎んでるのかを知らしめたい。毎日、じぶんで便所にもいけない。研修生のアジア人にケツの穴を拭かせてるのは屈辱そのものだ。まさかじぶんがボクサーになって、それで人生をダメにするとはおもわなかった。顎の裂傷、テンプルの疵もひでえ。あんなやつは刑務所にいくべきだ。もうだれも見舞いに来ない。半年間、ずっとここにいる。

B棟では夢ボート療法を実験してる。それによれば損傷した脳神経を助けることもできるそうだった。だがおれは対象外だという。ボートでは治せないほどに後遺症がひでえ。舌が麻痺するので、涎を垂らしながら考える。悲劇ってやつはじつに身近だ。こんなにも悲しいものだったとはおもってなかった。医者は7日に1度しか来ない。外部の人間なんだ、主治医なのに。おれは苦痛を訴える相手がいない。看護人はふざけた態度を隠しもしない。

おれは柴山宏樹、21歳、前途を断たれた惨めなボクサーくずれ。戦場へいったジョニーよりはマシかも知れないけど、だったらどうした？　いってみろ。おれは怒りでずっと叫んでる。でも、ここは保護室だ。だれにも聞えない。犬は元気だろう

か。おれにはわからない。コーチと連絡をとって、治療方針の変更を依頼したいが、筆談もできねえ。このままやられるだけか。もうじき食事の時間だ。ベビーフードがおれを待ってる。あんなもの美味くねえが。

扉があいた。2重ロックの厳重なやつだ。マスクをした男が入って来る。――はい、柴山さん、お食事ですよ。――そして有無をいわさずに口にスプーンを突っ込みつづける。なんていう拷問なんだ。だれかなまえをつけてやれ。お次は定期検査だ。からだをいじくりまわされておれは不愉快。迷走神経刺激療法（ＶＮＳ）も、脳深部刺激療法（ＤＢＳ）も、やってくれない。いや、たしかどっちかはもう験したんだっけ？　おれにはわからない。おれは夢ボート療法の告知を激しく叩いた。これだ、これをやってくれってな。でも、主治医のやつ、そっぽ向いてやがる。

「あなたは重傷過ぎる、夢や言語それ以前の問題だね」

うぐー！　うぐー！　うぐー！――なおをおれは告知を示した。

「さて、病室に帰る時間ですよ、柴山さん」

車椅子の心地のわるさ。あらゆることで敗北してやっと掴んだ幸運が、ウンコだったときの衝撃ったらない。夜は点滴で眠らされた。悪夢をよく見た、あの敗北を回避しようとして失敗する、ひでえ夢をだ。こんなおれを慰めてくれるのは玲子だけだったが、もはや来ない。かの女の、あのうつくしさにもういちど勃起したいけど、それも叶わない。

「おはよう、柴山さん。朝の薬ですよ」

からだがくそ怠くなる、なぞの薬を毎日だされた。まるで拘束衣を嚥んだみたい。うごけなくなって、でも眠れなくって、ただ天井をみあげるだけの時間が来る。そのたびに毎回おれは実家で飼っていた犬どもについて考えた。満足に遊んでもら

えず、ほとんど繋がれるだけの犬。かわいがるのは子犬のうちだけ。ああ、おれはやつらにひでえことをしたよな？その報いがいまのおれかも。語ることを奪われた身体、いったいどこでなにが起きてるのか。夢ボートの連中は幸運への出口をでたのか。おれにはもうだれもとも接続することができない。

それでもあるていどからだが恢復して、週に1回だけ、遊戯室を許可された。テレビがあって、本があって、雑誌があった。おれはひとびとの語りをただ聞き流した。おれはだれよりも喋りたかった。言語障害も少しはマシになったが、「あの」、「この」、「それ」、「おれ」しかいえなかった。どうしたものか、おれを気に入った心理士の仁井見という男がおれのつきそいになった。あるとき、ノートを渡された。ペンは自殺防止で渡せない。かれとの面談中に文字を書くリハビリをした。

やがて1年が過ぎた。事態はあまり進まなかった。「はい」と「いいえ」、「すき」、「きらい」が加わったぐらいだ。文字数だって50字もあれば御の字だ。おれはまたも夢ボートに取り憑かれはじめた。科学雑誌に発表されたおなじボクサーの体験を読んだからだった。それによればボートによって記憶の混濁と暴力性が治まったこと、脳神経の異常が改善されて、運動機能に向上が見られたことが書かれてあった。おれは雑誌をもって主治医を待った。結果はノー。くそったれ！

アイラインを塗りつぶした女の主治医が冷笑を浮かべて去ってった。おれのなかでなにかが壊れようとしていた。おれは玲子に電話した。必死になって会ってくれるように頼んだ。かの女もわかってくれた。面会当日は雪だった。おれはあらかじめ用意した。文字ボードを持って会話に挑んだ。玲子にもどって来て欲しい一心でボードを使う。だけど、叶わなかった。

「もう好きなひとがいるから、あなたは立ち直るのよ」

「はい？」

「あなたもそれを望んでるはずよ」

おれは叫んだ。

「いいえ！」

玲子が帰って面会室から追いだされた。おれは遊戯室で計画を練った。夢ボートに乗るための。それから毎日、おれは騒ぎ立てた。雑誌を振りまわして訴えた。そのたびに注射で眠らされた。もうだめかも知れない。深夜、仁井見がおれを遊戯室に誘って、お慰みをいった。

「生憎きみにできることはもうないんだ、あとは施設にいって欲しい」

「きらい！」

「でも、きみの行動にみんな困っているのは事実だよ。すまないが」

おれは車椅子の上からゆっくりとかれに持たれかかった。かれは驚いて払おうとしたけど、おれは正面から首を狙い、両腕で締め上げた。骨の砕ける音がした。そして夢ボートの告知に書いた。「これすき」だって。仁井見の死を確かめてから、遊戯室の鍵を内側から掛け、そのドアノブにズボンの腰紐をかける。そのまま首を絞めて全身の力を抜く。これがおれに残された、たったひとつの方法だと妄想しながら。けっきょく警備員がおれを発見した。そのまま警察が来た。おれは云えるだけのことばをぜんぶいった。やつらは理解しなかった。夢ボートの告知に書かれた文字を叩きながら、つぶやく。

「〈これすき〉――いったい、これはなんなんだ？」

おれの障碍は裁判で有利だったが、生憎おれのような重傷者を受け入れるのは医療刑務所でもムリなようだった。いろい

ろとヨウゴしてくれるやつもいたけど、どうだっていい。おれはひとごろしだから。けっきょくいりょう刑ム所が折れて、とくべつにおれをいれてくれた。おれにはもうかたることがない。だれともつながりたいともおもわない。しんだようなじんせいだしんでるのとかわらないおれまだここにいる

*

Fの場合

86歳の崎島藤春は認知症が進行して、もはやじぶんがわからなかった。臨床の条件としてはいちばんわるい部類に入る。心の治療はもちろん目的でなかった。かれの最後の遺言を聞きだすのが主眼だ。一部の医者は反対したものの、けっきょくボートの研究者たちの声には勝てなかった。老体がボートに耐えられるのかが問題だった。それでも開発チームの力関係でことは決まった。藤春は暴れるようなことはなかったが、繰り返しじぶんの母親を呼んだ。じぶんんが老人であることを信じようとしなかった。かれを無事ボートに乗せてから、点滴を始めた。薬の量は加減してある。なにかあっても夢からもどれるようにしていた。

「崎島さん、聞えますか？」

「え？――ああ」

「始めますよ」

「ええ」

催眠が始まった。老人は躰をびくつかせ、ばたばたと両手を動かしたものの、やがて大人しくなった。かれは少年時代に帰っていた。工業地帯の油臭い空気のなか、かれはきょうがじぶんの誕生日ということに興奮していた。産まれて10年、この世界にいるんだという感慨。きょうは誕生会があった。友だちはもう呼んであった。ミチ、カズオ、いっちゃん、トモコ。

授業中ずっと空想にふけった。バースデイケーキのことだ。しだいに教室が融けてゆく。窓から滴る景色が鈍色の塊りとなって机に崩れかかった。みんなの悲鳴がする。それが気持ちいい。休み時間になって便所にいったら、さきにいっちゃんがいた。いっちゃんはバスの運転手をしている52歳の男である。

「おう、ふじくん」

「やあ」

「おまえの誕生日、わるいけどいけないや」

「え？」

「いけないてっていってんの」

「なんだよ、それ」

「おれ、九州にいくことになったから。嫁の妙子とも別れるし、篤は兄貴の養子になる。もうバスには乗らないよ」

そんなことをいってるのに、いっちゃんはそのあと飲酒運転で死んでしまった。妙子さんとはもう長いこと会っていない。最後に会ったとき、喫茶店のボックス席で篤くんについて話した。あれからいちども母親として会ったことはないと断言していた。それが痛ましくて、かの女をまともに見られなかった。

「ふじくん、さようなら」

いっちゃんはいなくなった。サラリーマン金融の入り口で、今度はカズオに会った。くたびれた背広を着て、階段をくだってでてきた。一瞬、藤春に気づかないふりをしたものの、諦めて顔をあげた。

「ふじくん、おれ、きょういけないんだよ」
「なんで？」
「遊びの女が子供つくっちゃってさ、これから堕ろすの」
「莫迦なことしたね」
「おれには運がないんだよ、ふじくん」
いつのまにか、カズオはランドセルを背負っている。なかから営業先のリストをだして読みあげた。
「どうだ、金貸してくれ」
藤春は断った。
「パーティーに来ないんだろ、もう関係ないよ」
「だれもいかねえよ」
その声をうしろにして藤春は歩き去った。やがて3組のまえに来た。ミチに声をかけよう。かれなら来てくれる。昆虫図鑑の大きく突きだした表紙がかれを阻んだ。しかたなく窓をあけてミチに声をかける。
「おーい、ミチ！」
重機の騒音がする建屋のむこう側、そこから声がする。やがて作業着を着た男が現れた。掘削機を片手に持っている。
「なんの用だよ、フジ」
「なにってべつになにも」

「ないなら帰れよ」
「いやさ、きょうの誕生会なんだけど」
「なにいってるんだ、おれたちゃ大人だろ？　わるいけどいけない。きょうはこのあと安全講習の資料づくりで事務所にずっと罐詰めなんだ、おまえはいつもひまでいいよな。そんなに金がいいのか、大学講師ってのは」
ミチも来ないんだ。藤春は昆虫図鑑を閉じて返却口に持っていった。そのとき、ガラスがわれる音がした。知らない女のひとが藤春を見ている。なんだか怖ろしくなって廊下を駈け抜けた。放送室のまえまで来て、そこにトモコがいるのを懐いだした。ドアをノックする。
「トモコ、おれだよ」
ドアが開いた。香水と排泄物の臭いがした。ネグレジェを着たトモコがでてくる。
「なによ、いまさら」
「きょうの誕生会、来てくれるよね？」
「なにそれ、忘れたぁ」
トモコはベッドの脇の灰皿から吸いさしのいっぽんをとって咥えた。メントールの匂いがする。テレビから下品な笑い声が響く。トモコは『平凡パンチ』を捲りながらため息をついた。
「ハルくんは知らないけれど、わたし大人になったの。だからいまさらバースデイパーティーなんていけない。それに彼氏がしつこくって。すぐ嫉妬するんだから」

「でもトモコ、おれのことが好きなんだろ？」
「むかしのことよ」
「でも、やり直せないか？」
「あんた、成績よかっただけでつまんない男だよね？　どう？　修士さまのご気分は？」
かれは屈辱に眼を赤くしながらドアを閉じた。もうなにも云うまい。そうおもって下校時間まで過ごした。時間になって学校をでた。バスを待とうとしているときだった。見慣れない車がかれのあとをつけていた。不気味だとおもった。つぎの瞬間、男ふたりが降りて来て、かれを車に連れ去った。猛スピードで発進する車の後部坐席で藤春は脅えていた。いったい、なにが始まるのかと。
「電話番号は？」
「え？」
「電話だよ、それともないの？」
「いえ、あります」
「じゃあ、教えて」
かれは番号を教えた。運転席の男がスマホをとりだしてかけ始めた。やがて母のホログラムが反応する。
「崎島ですけど――」
「あんたのところの息子さん、預かってるんだ。引き取って欲しい」

「あの、どなたですか？」
「それ聞いてどうすんの？」
「とにかく息子は無事なんですか？」
「声を聞かせてやるよ」
男がスマホをかれに差しだした。ホログラムにむかって藤春は叫んだ。――母さん、ぼく攫われた！――沈黙。「莫迦ね、パーティーだから早く帰ってね」。ホログラムが消えた。男たちが嗤った。
「冷てえ母親だな！」
「さあ、いこうぜ！」
車は町を離れた。そして知らない林道に連れ込まれた藤春は辱めを受けた。代わる代わる男たちがかれのうしろに立った。昏くなっていく空を見あげていた。ことが終わって、そのまま置いていかれた。どこにじぶんがいるのかもわからない。そのとき、またガラスがわれる音がした。知らない女のひとがかれを見ている。藤春は逃げた。人家のあるところまで走ると、警察を呼んでもらった。でも警官にさえ林道でのことは云えなかった。警官たちはなにもなくてよかったとばかりに喜び、笑った。かれは怒りを憶えた。家に帰ったときには21時を過ぎていた。たったひとりでケーキを食べる勇気はない。バタークリームの匂いが厭だった。そのとき、またもガラスの音がした。若い女のひとがでてくる。藤春は母を呼んだ。でも、来ない。女のひとは語りかける。
「お父さん、ねえじぶんがわかる？」

「わかるってなにが？」
「お父さんは老人なの」
「おれ、まだ10歳だけど……」
かの女は困惑しながらも頬笑んだ。
「きょう、だれも誕生会に来なかったのね」
藤春はきゅうに大人になった。そしてため息を吐く。
「みんな忙しいんだよ、しょうがない。いまのような時代じゃゆとりなんてないのさ」
女はかれの手を握りしめ、肩に手をかけた。
「でも、お父さんは深く傷ついている」
藤春は諦めような声で話す。
「そんなことはない。おれにはおまえがいる。里美、だから心配しないでくれよ」
「でも、あの男たちのことは……」
藤春はきゅうに顔色を青くして現実に抵抗するように躰をゆさぶった。ふるえながら怒り、成長しきった躰で家じゅうを壊し始めた。雄叫びをあげて、そのまま家屋を突き破ると、町を焼き払った。ミチ、カズオ、いっちゃん、トモコ、みんなを殺した。殺して殺して殺し尽くした。ミチ、カズオ、いっちゃん、トモコ、みんなだいきらいだ。だからみんな死んじゃえ。廃墟の町で青い鬼のような藤春がひとり泣いている。

「お父さんの痛みをわたしが背負うことはできない。でも、わかってあげられることはできるとおもう」
「たわごとはよせ……おれの手は血まみれだ……」
「お父さんはわたしより過去が大切なの？」
かれはじっとじぶんの手を見つめた。
「これは夢なんだね？」
「そうよ、夢を通してわたしとお父さんの意識を繋げているだけ。やがてプログラムも終了するわ」
「どうかしていたよ、おれが友だちを殺すなんて……」
里美は父の肩を抱いて、その胸に顔を埋めた。
「里美、おれは死ぬんだね？」
「そうね、もうじきそうなるらしいわ」
「孫によろしく、もちろんきみの旦那にも」
藤春は立ちあがった。右腕が抜け落ちた。地面に砕け、あたりに散らばる。左腕が落ちた。砕けた破片が半透明になって輝いている。下半身が落ち、上半身が落ち、やがて顔が落ちた。里美はしずかに見守った。やがて催眠が解けた。ボートから起き上がった里美は52歳の女だった。しばらく放心したようにうつむいていたが、点滴を外されてボートを下りた。主を失ったボートが音を発てた。臨床医がデータの印刷された紙を持ってきた。
「藤春さんの最後の記録です」

データを受け取って里美は父の眠るボートへとむかった。穏やかな顔で眠っている。もう目醒めない男。里美はその頬を撫でた。（がんばったわね、お父さん、あなたの弱さも、わたしにとっては強さになる）とおもった。かの女はプールをあとにすると、息子の幹貴に電話をかけた。たったいま、おじいちゃんが死んだって。

*

小休止

深夜放送に夢中だった少年時代、尖った文化作品を識るには夜のテレビがいちばんだった。さまざまな映画、ポルノ、音楽を識った。おなじころ、夢に取り憑かれ、それを絵や文章にするようになった。いまでもふるい夢についておもうことがある。最近めっきり夢の具現化をしないのだが、作品のエッセンスとして吸収することが希にある。ほとんどの夢は正直いって使いものにならない。じぶんの取るに足らない羞恥心、怒り、嫉妬、憧れが輝くだけの断片に過ぎないのだから。それでも、とおもう。おれは夢によって語る方法を学んで来たのではないのかと。

*

Jの場合

単純な8ビートなのに裏拍にキックが入れられない。さっきの3連キックもできなかった。足がうごかない。メンバーの白い眼がつらい。その次は左手だ、ハイハットに入れるはずの短いフレーズがずれてしまった。客も気づいてる。きっと下手なやつだっておもわれてる。おれにはどうすることもできない。ステージが真っ白になって、おれは立ちあがった。だれよりもさきに楽屋に退けた。ボーカルがおれにいう。おまえはやめろって。局所性ジストニアと診断されたのは2年まえのことだった。それからは瞞しだましでやって来た。でも、とうとう瞞せなくなった。件のライブでひどい恥を掻いて、おれは音楽から遠ざかった。そしてどういうわけか、絵を習い始めた。静物デッサンから初めて半年もした頃、事故に遭った。詳しい話はできない。だが、それで眼をやられた。すぐに視力回復手術を受けることにした。幸い貯金があったし、両親も健在だったから。でも、眼は見えないままだった。長い時間がかかってから医者がいうには心因性のものらしかった。おれは実家で静養することになり、アパートをでた。

できることはなにもない。ただ静寂に耳を澄まし、運ばれる食事をとって寝るだけの日々だ。おれはにはもうなにもない。もちろん、治療法はある。行動認知療法や投薬だ。それもやった。でも、いっこうに眼があかなかった。光りから拒絶されたような痛みが連続して訪れた。（夜は昼を分かち、……）というジム・モリソンの声がどこからか谺してる。夢ボート療法を報されたのはもっとあとだった。おれはさらに2ヶ月の検査ののちに治療を赦された。ボート、そのひとつにおれは乗り

込んだ。（なんでえ、こんなもの！）とおもった。こんなもので治るとでも？　おれの視界に男が見えた。

「あれ、治ったのか？」

「いいや、まだですよ、滝田さん」

「そうか……」

「これからスイッチを入れます」

男の姿が幽霊みたいに消えた。だんだんあたりが明るく、白くなる。やがてなにもかもが白一色になった。じぶんさえもわからない。認識できない。やがて音だけが聞えてきた。ドラムの音だ。ひでえ失敗だらけ。ジストニアが産みだした悪夢のドラミングだ。おれは耳を塞ぎたかった。でも耳はおろか、じぶんの手さえわからない。そのとき、うしろからギターの音が聞えた。おれはふり返る。だれもいない。でも、その音はおれのひでえドラムに合わせて丁寧に弾かれてた。調和する演奏。おれのこころが晴れあがるような気分。最後の1音まで完璧だった。おれは呼びかけた。姿のないギタリストへ。

「おい、あんた、だれか知らねえけどいいギターだな！」

白い空間のなかに靄が発っている。そのむこうから歩いて来るかげ。ギターケースを下げた男だった。歳はおれとおなじくらい。30半ばだ。

「ひでえドラムだな。合わせるの苦労したよ」とかれ。

「いきなりだな、あんた」とおれ。

「まあ、そんなところだ」とかれ。

「あんたはなんでここに？」とおれ。
「愛着障碍だってよ」とかれ。
「なんだそれ？」とおれ。
「さあね」とかれ。
ともかく、おれたちは出逢った。おれは車を用意することにして自動車工場を襲撃した。白い空間は卵の殻のようにもろかった。ボルボに乗り込んだおれたちはサンアントニオを目指して甲州街道に乗り入れた。もう秋だった。ポケットの莨を咥え、火をつけないまま吸い込んだ。炎が噴きだし、銀のマグマがおれの鼻をいぶす。なにもかもが最高だった。ところがギタリストと来たら、不安そうな顔でおれを見ていた。「リトル芸者」と書かれた駅のまえで車を停めた。
「どうしたんだよ？」
「おまえ、飛ばしすぎだろ」
「え？　車か？」
「ちがう。おまえのやり方が、だ」
「べつにいいだろ？　夢なんだから」
「よかないよ。おれまで道徳を犯される」
不愉快そうにかれは口をぬぐった。キザなやつめ。
「ところでなまえは？」

「野崎だ、野崎榮（のざきえい）」
「おれは滝田淳平。おまえはいくところあんのか？」
「ないよ」
じゃあ、文句なしってことでいいだろう。「リトル芸者」から京浜に乗り換えて、横浜駅で降りた。ボルボはいつのまにか消えてしまっていた。サンアントニオへはどういくのが正解か。とりあえず、通行人の財布をぬきとってみた。森田一義の2万円札がいっぱいだった。細かいのがない。しかたなくほかのやつからも財布をぬいた。しめしめ三上寛の4千円札が3枚もある。おれは特急券を2枚買って、野崎にも渡した。列車が来る。おれはサックス奏者から指定席を買い取って坐った。これだとシュウマイ弁当の特典もついて、サンアントニオまで2時間もかからない。
「おまえ、愉しそうだな」
野崎がビールを呑み始めた。
「おまえが陰気なんだよ」
おれは弁当をパクついていた。うしろから坐席を蹴られた。
「まあな、人間関係クラッシャーだからな、おれ」
「なんだそれ？」
野崎は疲れ切った顔で答える。
「たまにいるだろ、酒に酔って恨みつらみでひとに搦む暴走くんが」

「それがおまえか？」

「7年まえのおれがそうだった。みんなからきらわれ、絶縁された……」

そんな告白、どうだっていい。おれはシュウマイを喰いつづけた。うしろの蹴りはたびたびつづいた。いったい、どんなど阿呆が坐っているのかを確かめようと腰を浮かしてうしろを見た。するとおれをクビにしたくそボーカルがちゃらい女と一緒だった。おれは頭が真っ白になった。なにもなかったかのようにもとにもどった。冷や汗がでる。おれは野崎にいった。途中下車しようぜって。

「ヒューストンで降りるんだ、あそこなら銀行がある、金がいっぱいある！」

「それ、おまえの金じゃねえじゃねえか……」

「黙って従え！」

おれたちは降りた。野崎はギターを列車に置き忘れた。でも、気づいてない。銀行へいった。ショットガンがないので徳用マッチで我慢せざるを獲なかった。3番窓口に立って、マッチに火をつける。行員の女がひとりひとり炎のなかへ飛び込む。銀行をでたときには歩けないぐらいの現ナマがあった。でも、鞄に穴が空いてる。少しずつ洩れだす金を野崎に渡しながらタクシーに乗った。

「サンアントニオまで」

運転手は驚いた顔でふりむいた。

「え？　武蔵小金井じゃないの？」

「ちがいます」

かれは諦めたようにいう。

「じゃあ、武蔵小金井を経由してサンアントニオってどう？」

「いくらかかりますか？」

「2万でいいや。もちろん$でな」

その提案に乗ることにした。しょうがない。車はこいつしかなかったから。ラ・ヴィリタ・ヒストリック・ビレッジまであと何日かかるやらだ。

「ヒストリック・ビレッジ？　あっこにはもうメッキ工場しか残ってねえよ！」

運転手が呻った。まさか心を読んだのではあるまい。おれはため息交じりにスマホで音楽を聴いた。眞名子新『野原では海の話を』だ。最近は毎日聴いてる。おれを癒してくれるのはもはやソロ・シンガーたちだけだ。4時間ほど北へ走った。アメリカ大陸はとうに過ぎている。3日めに入ってはじめて休憩した。そこは北ヴェトナムの売春宿だ。泊まるだけなら激安だった。地元のバーでおれたちは酒を呑んだ。味なんかしない。

「おれはもう叩けないドラマーなんだ、眼だって見えない、絵も描けない」

「眼は心因性なんだろ？　絵でやってけよ。まあ、ドラムだってまだ余地はある」

「なんの余地が？」

「キックをやめてスネアとシンバルだけにすればいい」

「はあ？　おまえ、なにいってんの？」
「おれと組むんなら、そうしとけ」
「おまえと？」
まあ、たしかにやつとのセッションはなかなかよかったし、手数を減らしたドラムならなんとかなるかも知れない。シンバルもライドとクラッシュだけにするか。おれは夢から脱出して、実際の野崎って男に会いたくなってた。もちろん、眼が見えれば話だが。翌日からまたもドライブ、途中おれは眠ってしまった。気づくと東京だった。タクシーは消えてる。おれたちは金を奪われ、路上に棄てられてしまってた。
「武蔵小金井だ！」
おれは怒りを込めて鞄を地面にバウンドさせた。鞄はそのまま空の彼方へと消えてった。野崎はまだ眠ってる。おかしなやつだ。おれはかれを起こして立たせた。やつも事態に気づいたようだった。眼を擦ってあたりを確かめてる。
「たしかに武蔵小金井だ」
「どうすんだよ」
「まあ、しゃあねえんじゃねえか？」
「それもそうか……」
歩きながらおれは話した。このまえの提案についてだ。野崎と一緒に音楽をやるってことだ。おれはやりたい。でも、眼のことがある。もしずっと見えなかったら、もうなにもできない。

「おれがおまえの眼、治せるかも知れない」
「なにいってんだよ?」
かれはポケットから葉っぱをとりだした。摘みたての大麻草だった。そいつをおれの眼に貼りつけて、手のひらで押さえた。しばらくなにもなかった。しかしだんだんと時間の感覚が遅くなった。なにもかもが重い。そして瞼の裏で虹色の天使が輝きだす。ドラムが、ベースが、パーカッションが、アナログ・シンセが、ギターが聞える。空間の呼吸が全身で感じられる。おれはおれでないものになったような気分でリズムに身を任せた。なにもかもを委ねた。でも、しょせん夢のなかの幻覚体験だ。それはあっさりと治まった。おれはがっかりしながらもかれにありがとうっていった。
「こんなもんだよな、夢のなかって」
「そういうなよ」
野崎が笑った。はじめて心から笑ったようだった。
「またおまえとは話したいな」
「ああ、そうしようぜ」
呼吸が苦しくなって来た。拘束された両手が痛む。現実のなかへ沈んでゆく感覚。肉体の重さが苦しい。眼をあける。光りがあふれだしたように入って来る。闇のなかの声はもう消えた。おれは起き上がって眼帯を外した。見える。見える。見える。あいつのおかげにちがいなかった。おれたちはボートを降りた。針を抜かれ、テータを手渡された。おれがいままで語ったことが記録されてる。恥ずかしいくらいに正直なおれがいた。

「サンアントニオ、行けなかったな」

男がちかよっておれに云った。野崎榮だった。実際のかれはちょっと外見がちがう気がする。

「いまにいくさ」

「ライブができりゃいいのに」

「路上でだっておれはやるよ」

おれたちは病棟にもどると、音楽の話をした。いままで聴いた曲、そして演奏した曲について交わした。退院するころには予定は決まってた。おれはアパートにもどって楽器をいくつか処分した。ビートマシンとメタル・ブラシを買った。マシンと同期してスネアを叩けるようにした。リハーサル・スタジオでふたり音を合わせる。ひさしぶりに他人と会話したようなそんな感じがした。それからほどなく、おれと野崎は活動をはじめた。もちろん、幻のサンアントニオをめざして。

*

Aの場合（Reprise）

夢ボート療法を受けてから1年が過ぎた。ぼくはアパートにもどってせっせとアルコール予防のプログラムにでた。でも、それだって半年でやめてしまった。肉親とはぼくの暴力がきっかけで縁を切られ、父の世話をしない自由をはからずも得たというわけだった。季節はまた秋だ。夢ボートが最近廃止のうごきを見せている。個人の夢を不正に収集しているとか、そもそも開発の段階で精神汚染があったじゃないかとか、そんなごたつきを見た。ぼくにとってあの体験は半端だった。中断されてしまったし、だれとも繋がってない。語りという要素がほとんどなかった。いまでもあのボートに乗れるのであれば乗りたい。あのびっくりハウスはもうなかった。というか、そもそもあの森そのものがない。いまはマンションが建っている。そんななか、心療内科でぼくは夢ボート療法の話をした。『ゆめと意識の科学館』のことも。どうやらあの施設はあくまで民生用の娯楽施設だったということだ。ぼくの体験は正規のものでなかったということがわかって俄に欲望がでてきた。ちゃんとした施設で夢ボートに乗りたいという気持ちだ。それでまた1ヶ月、検査した。今度はアルコール問題が盾だ。

「中尾さん、あなたの脳に若干萎縮が見られる。それを解決しましょう」

「ボートにはすぐ乗れるんですか？」

「いま予約あるのでね、来月ですね」

入院が決まって、身支度をした。肉親を住所録から消した。かれらとはもはやなんの関係もない。だれのこともぼくは好

きではない。入院当日、あらためて心理テストをやった。心理士とも面談した。3日経って、いよいよボートだ。6人の患者たちと乗り込む。水の抵抗でボートがぐらりとする。点滴を受ける。データを受信するコンピュータが起動する。いよいよスイッチが入り、催眠のなかへと落とされた。

「中尾藜(あかざ)さん、聞えますか?」

技師が声をかける。鏡のなかから聞える。

「はい」

かれはモニターにむかってなにか合図をしている。

「接続を始めるのでリラックスしてください」

「わかりました……」

やがて眼のまえがひらけて野原に来た。子供たちが遊びまわっている。古い遊具がひと知れず回転している。なんだか懐かしい。じぶんも子供時代、この場所に来たような感覚がする。ひとりの少女が野積みの藁を引き抜いて、占いをしている。なにを占っているのかはわからない。とにかく、甥や姪のような厭味を感じさせない。なんともなごやかだった。そこへ一頭の野生馬が現れた。穏やかなまなざしでぼくを見ている。手を伸ばしてみた。馬は首をかたむけて応じた。そのとき、うしろから斧が振り下ろされ、その首が落ちた。血が噴きだし、ぼくは恐怖して後ずさる。

そのまま走って野原をくだっていく。やがて危険が薄れたところで飲酒欲求が高まってきた。でも、金なんかない。それでもかまわずに酒場に入っていった。『ローハイド』というのがその屋号だった。ぼくはモスコミュールを頼んだ。そのとき、

これが夢だっていう自覚が芽生え始めた。ここならなにをしてもいい。倫理の薄い頭で考える。酒が来た。もちろん、味なんかしない。ぼくの接続相手はどこにいるのだろうと考えながら、顔のないバーテンと話をした。バイクが趣味というかれは数年まえの事故以来、足に金属が入ったままだといった。そのとき梨花と漣が子供だけで入ってきた。ぼくはバーテンにいった。

「子供が入って来たけど？」

「え？」

バーテンの顔が固くなった。

「子供だけで入店してるよ、あれ」

ふたりを指さした。

「いいえ、ちゃんとした大人ですけど……」

かれが困惑しながら答える。ぼくも困惑している。ふたりはほかのバーテンにダイキリとロングアイランド・アイスティーを注文したところだ。そんなものを呑める顔には見えない。ふたりは大きな声で喋りだす。まったくこれ見よがしに。聞いているだけで腹の立つ声だ。

「ナカオアカザってやつがいたんだけど、むかし夢ボート療法ってやつに嵌まっちゃってさぁ、そのまま夢のなかなんだ。おかしいだろ？　夢からでれなくなったんだぜ？　いまだに夢のなかでさまよってるんだって」

漣がバーテンに話す。しかし、どういうことだ？

「そうそう、あの叔父さん、現実からいなくなっちゃってね。もう20年もまえに」
「いまでも姿を変えてこのへんにいるかも知れないな」
漣が笑った。梨花も笑った。おれは聞えないふりをしてモスコミュールを飲み干すと贋金を払ってでた。すっかり夜だった。回転木馬のある広場で、悲しそうな娼婦がひとりラジカセで踊っていた。映画『ベティ・ブルー』をなぜだか懐いだした。ぼくはかの女に声をかけた。
「遊ばないか？」
「金はあるの？」
「あるさ」
ポケットからだした金貨をかの女の手のひらに乗せた。かの女は驚いた顔でそれを掴み取った。下品な仕草をしながらスカートを捲って下着を見せる。肉厚の唇が魅力的だ。近所の店で白ワインを買って、ホテルにしけ込んだ。かの女はいった。
「知ってる？　ナカオアカザって。夢ボートに乗ったまま沈んじゃった男なの」
「へえ、おもしろそうだな」
ぼくはわざとらしく笑ってみせた。女は訳知り顔で喋りだした。なんだか不愉快にさせるところがある気がする。
「それがね、だれでもいいから繋がりたいっていう男らしくてね。いまでも出現するらしいの」
「なるほど。それできみも夢ボートを？」
女は笑った。

「冗談云わないでよ、あんなもの昔のものよ。わたしはこうして夢に侵入して遊んでるだけなの。みんなそうしてる」

いよいよ、ぼくは確かめたくなった。

「じゃあ、これはだれの夢なんだ？」

「あたりまえよ、ナカオの夢じゃないの」

ふたたび女は笑った。しかし、一瞬表情をゆがめ、ぼくの顔をじっと見る。

「――あんた、ナカオさん？」

室の空気が異常に暑かった。そのとき女のスカーフに眼がいった。すばやくそれを解いてみせ、つづけてそのスカーフで首を締め上げた。苦痛に制止した顔は恐怖と怒りで醜い。息絶えるまえで締めつづけた。そして死体を壁に塗りつぶした。そして窓にむかって叫ぶ。――おれだ！――おれが中尾藜だ！――声がでなくなるまで叫んだ。ことばに意味がなくなるまで叫んだ。でも、だれも来ない。現れない。ぼくの夢はもうぼくのものじゃない。屈辱を感じながら、ホテルをでた。味のしない白ワインに酩酊しながら歩いた。やがてもとの野原に帰ってきた。馬も子供たちも死んでいる。そして生きているのはぼくだけだった。

「そんなところでなにをしている？」

警官がふたり立っていた。若年と中年のコンビだ。ふたりとも眼鏡をしている。

「見ての通りさ」

ぼくはあたりを見渡した。

「おまえが殺したのか？」

答えはたやすい。

「ああ、そうだ」とぼくはいった。「おれの夢のなかだからな」とつづけた。警官は色めきたって、ぼくを立たせた。そしてパトカーのへと連行した。そして無線をとって喋りだす。「えーっ、警邏2号より、鶴見町相良台中央公園にて殺人の容疑者1名を発見、確保、本人の認否あり、児童数名を殺害したとのこと。どうぞぉ――」だってさ。ぼくにはもうどうでもよかった。この夢からでられないのなら、ここで暮らすしかない。

そのまま警察署に連行された。アルコールが検出されたため、アルコール譫妄の疑いをかけられた。べつに否定しなかった。そのまま精神鑑定もされ、泥酔中の殺人と判定された。裁判はひどく長引いた。拘置所の冬はきびしい。さっさと終わって欲しかった。ぼくはなにも否定しなかった。もちろん、控訴もなし。求刑通りの死刑だった。ただし、判決が決まってもなかなか刑は執行されなかった。毎日、日記を書き、本を読みながら過ごした。そのうち、ここが夢でないような気もした。けれど確証は得られなかった。死刑執行の日、お祈りをしてからぼくはみんなに殺された。そして暗闇のなかに落ちたボートがふたたび浮上した。そしてつぎの瞬間、ぼくは眼醒めた。眠っていた躰はひどく重たく、自力では動かせなかった。数ヶ月のリハビリがつづいた。いまはようやく杖をついて歩ける。

２０５５年の秋だ。ぼくは61歳、なんの夢も、なんの手段も持たない老人だった。やりたかったことはもうできない。〈ナカオアカザの帰還〉はほんのささやかな話題にはなった。ぼくを取材したいという声もあった。ぜんぶ断った。いったい、なんのためにぼくはボートに乗ったのか。もうなにもわからない。皺だらけの手のひらを見つめ、1日を過ごす。見舞いに

はだれも来なかった。野次馬がいただけで、そのなかにはぼくが殺した娼婦もいた。かの女だけは現実とそっくりだった。（うつくしい）とおもった。でも、もはやそんなものは彼岸の事物だった。父も母も、もういない。ぼくの友人だったひとたちにも忘れられている。いま、ぼくはブッシュミルズの12年を呑みながら、この回想録を書いている。もうじき、障碍者支援センターの担当者がやって来る。そのまえに酒の臭いを消さなきゃならない。あの銀色の雲はきょうはもう去ってしまったらしい。ぼくにはぼくの意義が見えない。接続できる相手がいない。ひとりよがりな思考だけが夢という場所に残り、やがて見えなくなった。きのう買ったベーコンに蝿が集っている。

*

献辞

夢の具象化というものの魅力を教えてくれた存在や作品に感謝を捧げる。つげ義春、内田百閒、寺山修司、鈴木清順、庵野秀明、この5名を筆頭に。

*

離郷者たちと（アイリス、リー、そしてマイケル）

part.1

8月13日の朝のことだ、「マイケル・ジャクソン！」という声がした。子供の声だ。たったいまである。死んだｋｉｎｇｏｆ　ＰＯＰへの哀悼かも知れないなとおもって作業をつづけていたら、またしても「マイケル・ジャクソン！」。そしてさらに「マイケル・ジャクソンのお兄ちゃん！」と来やがった。さすがに怪しくなって窓のそとを見た。子供が警備員の男にたかっていた。見憶えがある。褐色のアラブ人だった。べつにかれは踊っていたわけでも、歌っていたわけでもない。しかし子供に笑いかけていた。むかし、萩ノ茶屋の救貧院で映画『This Is It』を観たことがある。ミュージシャンたちと曲を練るマイケル、たしかに躰が反応する音楽だった。心はまったくでも。

小さな声でおもわず、「ＰＯＷ！」と叫んだ。おれにはもっと実存的な問題があった。冷蔵庫である。毀れた。そして金がない。身も蓋もない話だ。今月はなにか潰滅的だ。酒に溺れ、仕事を逃し、これがそれだ。そしておれは生活保護だ。家電が壊れたって追加支給はない。今月は掃除機を買ってしまった。どうにもならない人生。父にも母にも頼れない。朝からそんな感じだったから、午後になっていきなりアイリスとリーが訪ねて来たのは手淫の最中だった。ズボンを上げたとたん、パンツのなかで射精してしまった。ふたりにはなにも云わなかった。おれを訪ねる人間なんか、そもそもいないからえらく気まずかった。アイリスは光沢のある黒いミニ・スカートに白いブラウス、黒い髪を短く切って、白い肌を誇示している。ハートリーの映画『愛・アマチュア』のソフィアみたいだ。ソバカスさえもきれいだった。リーはカーゴパンツになにかの

バンドTシャツ、髪は砂色で長い。リーが口火を切る。

「臭うよ、この室」

「少しね。掃除もしてないようだし」とアイリス。

アイリスは室を見渡した。ベッドに3つの本棚、ユニット・シェルフ、作業机がふたつ。そのうちひとつでPC作業用。椅子はふたつ。ふたりはベッドに腰掛ける。アイリスの足が優雅にクロスする。ショルダーバッグから香水をだして首元に一吹きした。臭いについて、おれはもう平気だが、いわれれば臭いような気がしてくる。おれは精神障碍2級だ、赦してくれ。見逃してくれ。

「アイリス、なにか援助してくれないか？　おれはもう限界なんだよ」

おれは云った。

「森夫、愛は無形であり、消費されるべきものじゃないのよ」

アイリスはおれを窘めた。いぜん互いが発し合った愛についての議論にかの女は結論を下したんだ。それでもおれはかの女の愛が欲しかった。ただなんとなくお喋りをするというのが、いい加減堪らなかった。

「愛よりも冷蔵庫のが心配だな」

「壊れたの？」

「ホヤホヤだね」

かの女は冷蔵庫へいってドアをあけた。そして悲鳴して、流しでゲエゲエやってしまった。さすがに申し訳なくおもって

おれは謝ろうとした。んで、近寄ったとたん、「来ないで！」と騒がれた。リーはそのさまを見て、笑っていた。死んだゴキブリたちと鶏肉の赤いドリップ、そして野菜くず、いくらなんでもひどい。われながらひどい。

「ところでふたりともなんで前もっていってくれないんだ？　室の片づけもできなかったじゃないか？」

アイリスが口もとを拭いながらリーの隣に坐った。不機嫌さがうつくしかった。

「おれ、きょうで日本を離れるんだ」

リーが云った。

「そうか、元気でやれよ」

おれにはどうだってよかった。リーは首をふって答える。

「そうじゃなくて、もう来られないんだ。家業を継がなきゃ。おれの夢も終わりさ。惨めなもんだろ？　あんたとちがって飛行機にも乗れるのに。ちくしょう。なんでこんなことになるんだ、アイリスともわかれる。くそ田舎で不自由が待ってる」

すぐになにかいってあげるべきだったかも知れないが、適当な辞が見つからなかった。しばらく黙ってかれの顔を眺めていた。この場面さえものにできればおれはまた作品が書けるのを識っていたし、そしてそれがひどく非礼であることも識っていた。どうしていつも気づかないんだろう。気づいたときには書き上げていて、じぶんが天才だかなんだかになったかのような気分になる。ことばを綴るのは力の要る作業だが、その報酬はアルコールよりも純度が高い。

「家業？　なにいってるんだよ？」

リーは少し起こったみたいだ。

「わからないのか？」

おれも少し苛立ってしまった。

「わかるもわからないもそんなもののためにいままでおまえが語ってきた夢を売り飛ばすのか？　おまえが熱心に話したじゃないか、ありゃ、ぜんぶうそだったのかよ？」

おれにできることがないのはわかりきったことだ。ひとの助けになれるような人間じゃないってこともさんざん識っている。それでも互いに作品を送り合った仲だった。やつには敗残者になって欲しくない。アイリスはリーの腕を撫でて、励まそうとする。リーはことばを探しているのか、黙ったままおれを見ている。かれらはなんどか日本へは来ていた。ふたりをおれに引き合わせたのは三浦果実という埼玉在住、自称・現代詩界のスポークスマンなる男で、三浦さんはおれの第1詩集『終夜営業｜Open 24 Hours｜発送受付』のコピーをリーに読ませたらしかった。アイリスにもだ。ウォッカで酔ったリーの頭にはずいぶんと刺さる作品だったらしい。かつてもいまもひとかどのなんとかになれないおれを励まそうと、ふたりはときどき、おれのところに来てくれた。でも、おれは41歳で、働いていない。生前最後の詩集を去年だした。リーもおれもひでえ父親のもとで育って、アル中になってしまった落伍者だった。それでもどっかで「撰ばれることの恍惚と不安」を信じたりもしていた。リーは日本語が上手かったものの、おれは英語はからきしで、かれの作品を自動翻訳でしか味わえなかった。歯痒かった。

「ぼくを歪めてるのはキリスト教的価値観だ、それが問題なんだよ」

「神学論争なら教会でしなよ」

おれはアパートの裏手を指さした。カソリックの教会がある。正午になると鐘の音をひびかせる。

「なんて冷たいんだ」

「すまんな。でも、なにをしてあげられるよ？　このおれに？――だって、いままでさんざんメールで話したことの蒸し返しじゃねえか。そんなんやらかしてもしょうがねえよ。くそ親父とは縁を切る、――それだけだ」

おれはかなり苛立っていた。早くアイリスとだけになりたかったからだ。もしもそんな機会があるならだが。しかし、リーの悩みごとにはさんざんメールでつき合ったし、前回会ったときだってそうだ。おなじ結論にたどり着くだけならもういいではないのか？

「母はどうなる？」

リーは母親のことでも問題があった。ひとり残すのが可哀想だっていうんだ。おれの母はとっくに夫から自立して、引っ越していたから、なんとか、なるようになるとおもった。

「いまの時代、守るべき女性なんて存在しないって上野千鶴子ならいうよ。上野はフェミニズムの権威だ」

アイリスが青ざめた貌でおれを睨む。疑問と驚きを以てして。リーは両手で貌を塞ぎ、そのまま吐きすてるようにいった。

「ひでえ……けだものだよ……」

アイリスがリーを立たせた。そして腕をとってでていく。おれは止めなかった。作品を観ることができるのに眼のまえの人間を観ることがおれにはできなかった。いついつもそうやってなにもかもをことばにして、おれは他人を傷つけている。いま、この瞬間でさえも。作家になるのはこういうことだとずっと考えていたのにもかかわらず、いまさらそうではないと

いう感情が湧きあがって来るのを感じた。もちろん、それを否定しようとするじぶんもいる。だったら、両方連れてゆくしかない。おれはドアをあけた。そしてふたりのあとを追った。坂をくだって南の角を曲がっていく。かれらは教会にいくんだ。おれもなんどかいったことがある。精神病でおかしかった頃に。洗礼をしてくれと頼んだんだ。そのとき神父にエゼキエル書が引用された映画『Ｐｕｌｐ　Ｆｉｃｔｉｏｎ』のシナリオ本を見せたんだ。かれは驚きながらページを繰っていた。あの本をまだおれは持っている。この場合、だれが心正しき者で、だれが悪しき者なんだ？　だれが弱き者？　だれが羊飼いなんだ！　おれはこのままふたりが教会で結ばれてしまうのが厭だった。神とやらに祝福され、手のとどかないところへと飛んでいってしまうのが怖かった。この際なんであれ、ふたりの仲を引き裂きたかった。いろいろとならべたててはいるものの、アイリスが好きだったから。かの女がまるで事故死のような初恋を乗り越える糧となるべきひとなのだと妄信すべく、おれは歩いた。大理石の入り口でぐずぐずやっているリーをアイリスがBeat itしている。そしておれに気づき、罵声を浴びせる。

「よせ、アイリス。これは男の問題だ」

「なによ、知ったような顔で」

「落ち着け。リーに神学は合わねえよ。いまはそっとしとけばいい。でも、見棄てるな」

かの女は黙ってリーの腕を放した。リーは急に素面へ揺りもどされたように笑った。子犬のように笑った。そしておれの肩を叩いて、「酒を買ってくれ」といった。おれはその通りにした。ファミリーマートでアーリータイムスのポケットを買い、かれに渡した。チョコレート・クロワッサンも買ったけど、クロワッサンはおれが喰った。おれの好物だからだ。でもって、

マイケルと呼ばれた警備員を見に、建築現場へいった。アスファルトに敷かれた保護シートの上で、かれが案内してくれた。心のなかでおもった。「やっぱｋｉｎｇってちげえよな！」って。リーは酒を呑みながら、もう上機嫌だった。リーは35歳、職業不詳。でもお察しである。おれたちはまたおれの室で時間の空費。問題は棚上げだ。アイリスは27歳、モデルでライター。なにやら隠しごとがあるらしい。おれたちみんなが時間をムダにして、じぶんの若さを浪費していた。そしてせっかく共有した時間でさえも、ＳＮＳでたやすく拡散してしまうのだ。おれはそんなもの、もう見たくない。そしてまるでなにもなかったようにリーもアイリスもいなくなった。まさしく「さよならニッポン」である。おれたちがいた場所、おれたちの時間、感情そして是非、みながみな時間に上書きされてもう見分けがつかなくなる。どれだけ手を伸ばしても届かない境地だ。けっきょく冷蔵庫は社会福祉協議会から借りた金で新品を買った。壊れたやつはもともと妹のお古だった。その妹もいまでは院をでて家賃7万の物件にお棲みだとよ。もう15年は会ってない。

きょうも工事の音がうるさかった。この辺りはずっと新築工事がつづいている。立地がよかった。駅もちかいし、高速の入り口もある。スーパーも吉野家もあった。ただ遊ぶような場所はなにもないのだけれど。ふたりがいなくなって室の空気が入れ替わったみたいだった。なにかの機械音に紛れてふたりの声が聞えるようだった。おれはおもった、辞こそ内なる救いだ。だって無料だからな。

part.2

へべれけのリーからメールが来なくなって5日になる。きょうは9月25日。受信箱はいつもからっぽだった。またもひとにきらわれた。よくあることだ。あれからもずっとリーの愚痴がつづいた。スペルもむちゃくちゃなメールが1日にいくつも来た。まるで10年まえのおれみたいだった。酒に酔って見境なく他者を攻撃する化けものだ。初恋で事故ったときのおれみたいだった。なるべくかれを刺激しないようにやんわり接した。じぶんがかつてされたようにかれを見棄てないことだけは覚悟した。おれがみんなから無視されたように、かれを無視しないと固く決めた。おれはあいつらとちがう。そうおもっていた。

*

洋書屋で小さな詩集を見つけて買った。アラン・マッケルという知らない詩人の『物語の一部』という黄色い本だ。略歴を見るかぎり、かれは本筋の詩人ではなく、B級アクション小説家で、行旅死亡人となってしまったらしい。死んだのは41歳。詩の内容は、ざっくりといえばエッセイの延長のようなもので、正直詩と云っていいのかもわからない。若い友人たちとの交流とか、就職面接の話とか、作家になったあとのこととか、日常雑記的なものが多い。ただし興味を惹いたのは100頁

にも充たない本の裏表紙の解説にチャールズ・ブコウスキーのなまえがあったからだ。決め手だった。最近は翻訳もＡＩがやってくれるわけで、おれも数篇だけやってみた。そのなかでも次の詩はいい作品だっておもった。

すべては無意味

〈クウォーター・パーク〉という酒場でめずらしく呑んでいた
かれは室でしか呑まない男だった
もう若くない顔で時折
笑うそぶりを見せる
その口もとは
神経がやられたようにゆがんでさえいた
かれはいった、「すべては無意味なのかも知れない」と
そしてつけ足した、「ぼくの父がいったように」

初出『パーシー・アカデミー』誌'63年12月号

最後に話の目的を明かした「もし金にならなければ」
職探しにあぶれ、
救済支援も打ち切られ、
せっかくの長篇小説もモノにならなかったという、
そして長い電話すえに父にそう宣告されたとのことらしい

クォーツ・ヒルの職安通りで
かれと最後に遇ったのは10月の第2木曜日だったとおもう
救助艇に潜り込もうとするかれを咎めて、
酒を呑ませようといったら、
かれに断られた
アル中のくせによとおもった
かれが命を絶ったと聞いたのは知人の文藝仲間からだ
わたしはなにもいえなかった
すべてが無意味であることによって

アラン・マッケル／１９４０年、サウス・ダコタ生まれ。父の失業により各地を転々とする。10代から詩を書き始めるも、30代に小説家へ転身。級アクション小説を連作。代表作に『Acid Down』、『Combat Line』がある。そのあと映画関係の仕事をするも、失踪。'82年、アーカンソー州にて一文無しで倒れているのを発見される。州立病院にて死亡確認。身寄りはなかった。享年41。死後、有志たちによって詩集『"A PART OF STORY" Alan Mckelle Uncollected Poems：1956/1976』がだされた。

細かいところはじぶんの好みで改変してある。ＡＩには口語訳でと注文もつけた。さしずめこんな内容だとおもうけど、心許ない。まあ、どうだっていい。いつもいつもじぶんを気持ちよくさせてくれるなにかがあれば生きていける。最近、そう考えるようになった。おれのアル中はシアナマイドと恐怖心で押さえつけてある。死ぬなんてこともない。父とは縁を切った。もう会うこともあるまい。母との和解が叶ったいま、もう父に云うことはなにもない。

先月、おれは働こうとしていた。どっかで日払いの仕事をやって￥2万ばかりつくろうとしていた。月の頭に稼いで光熱水費・通信費・食費のぶんを払おうとした。しかし仕事なんかなかった。酒に溺れた。そのまま文なし。そしてあの忌々しい冷蔵庫だった。賃貸保証料の還付、コレクションの一部を売却して穴を埋めた。でも、そういったことにはもう懲り懲りだった。アルコール、すべての災厄の根源。そしてわるびれて、それが格好好いとおもいこむことの愚かしさや、社会との余分なかかわりをなくすこと。詩の投稿サイトなんか最悪だ。褒められたいやつで溢れている。それはまちがったことじゃないが、傷つく覚悟のない表現をおれは赦すことができない。どっかずっと根っこのほうで、じぶんがされたようにみんな

傷つけばいいと願っているのかも知れない。それはわからない。

ともかく、翻訳した詩をリーに送ってみた。それきりなんの返事も来なくなった。おれにとってはかれのためをおもった愛情のつもりだった。寂滅がつづくなか、不意に電話が鳴った。夜の10時である。でてみると三浦さんだった。おれたちは互いの近情を話し合った。最後にかれは懐いだしたようにリーのなまえをだした。

「楢崎さん、リーくん、すごい楢崎さんのこと憾んでましたよ」

「えー、そうですか？」（やっぱりな……）

「楢崎さんね、リーくんは《登場人物が自殺する詩を送られて、まるで死ねといわれた気分だ》って、いってました。あれはよろしくない。今後もああいったことがあるとね、楢崎さんのこと、だれにも紹介できないんですよぉ、わかりますかぁ？　楢崎さん自身のためにもよくないです」

どこまで女々しいんだ、**リーの野郎!!**　怒りで辞を失いかけた。おれは励ますつもりで送ったのに。まったくどうかしている。だれよりもかれを大切におもっているのに、なぜ、どうして噛みつくんだ？

「もうリーくんね、日本の詩人に絶望したっていうんですよぉ。みんなきらいだって。おれんとこにもね、攻撃メールが来ちゃってねぇ、それでねぇ、楢崎さんねぇ、釈明のメッセージ預かるんであとでＤＭください」

それで話は終わった。終わったあとが問題だった。恥辱と怒りの混じり合いをなんとか顕在意識が追っ払うのに時間がかかった。リーが三浦果実を使っておれに反撃をかましたことが赦せなかった。おれの面子なんてどうでもいいが、やり方ってもんがあるだろうよ、リー。いまごろやつは自室にこもってNicoの『The End...』でも聴いてるんだろう。メソメソしな

がらヒロイックになりたがる。ほんとうむかしのおれにそっくりだ。深夜になってせっせと釈明を書いた。いったい、こういった日常がどこまでつづくのか。おれは残暑に汗を掻き、水浴びをした。おれでない、なにかがこの物語の余白を埋めてくれるのを願って。

＊

part.3

アイリスは少なくともメールのなかではリーの話をしなかった。まるでおれの女のようにふるまってくれた。気分はすごくいいし、今度こそふたりきりでカフェでもいきたいとおもった。おれは黒髪でショートカットの女の子が好みだ。ただし外人は守備範囲ではなかった。かの女と会ってから変わった。次に逢ったらカフェや映画館にいきたいとおれは誘った。かの女はおれを傷つけないように遠回しに断る。いつものことだった。だったら勝手にすればいいのだが、かの女はそれでもおれの作品はうまく褒めてくれる。おれ自身のことはあまり語らなかった。もしもあと10年、おれが若かったらとおもった。でも、それじゃあ、いまのリーのようにじぶんの問題で手一杯だったろうな。アイリスはメールでいった。《いつか愛の課題をあなたに与えるときが来るでしょうね。あなたは納得できないし、克服できないかも知れないけれど、わたしとあなたは見えているものがちがいすぎる》と。いったい、どういう意味なんだ？ おれは訊いてみたけれど、返信にはその部分だけ言

及をなかった。かの女の次の来訪を期待するしか、おれには手がなかった。

どうして女たちは要らぬ期待をさせるのだろうか。過去、多くの女と交流を持った。しかし、だれもわたしの辞を褒めても、わたし自身をよくいってくれるのはわずかで、前者も早々とどっかへ消えてしまった。おれとキスをして、その様子を詩に書いて欲しいといった女がいた。でも、ずいぶんまえに自裁してしまった。おれは女を知らない。セックスは飛田で1回だけだし、姉妹とはずっと疎遠だ。でも、わるいのはいまのままの出逢い方だ。みんな、文章でおれを知っている。そうじゃない、生身のおれを見せなくちゃならない。出逢う場所だ。音楽をやって、ギターを弾いて、歌って、ライブハウスやライブバーにでたい。おれはまだ音楽に夢があった。月4回、レッスンも受けている。オリジナル曲を持っている。でも、なかなか人前にでる踏ん切りがつかなかった。ともかく行動するしかない。おれは41歳。

アイリスのよくわからないところは、おれにむかって恋愛するなとか、あなたのベッドを借りたいとか、おもわせぶりな発言をするところだ。さっきもいったようにおれの女にでもなったようなことをいう。おれは戸惑って真意を聞き出そうとする。そのたびに禅問答のような状態に陥る。

「あなたにふさわしい愛をわたしなら教えてあげられる」

「それっておれのまえで脱いでくれるということ?」

「あなたはまだ愛の戸口にも立っていないのよ」

なんなんだ、この女は。じぶんの経験を鼻に掛けているのだろうか。愛の言葉はいつも他者のものだ。おれにはなにもわからない。遊ばれているみたいで不愉快にもなった。いつか、あのぴちぴちスカートに包まれたケツを触ってやるぜ。熱く

なった心で冷たいグラスをとった。水をぎりぎりまで入れて呷る。リーとはいずれ決着が必要かも知れない。アイリスとの情事を空想するのはそのあとでもいいだろう。ともかく、なにがあるのかがわからない。おれはおれの最後の詩集、『不適当詩劇』を折に触れて読んだ。詩文学への憧れなんて消えてしまったものの、いつかおもい描いたビジョンがどこかで結実するのをひそかにおれは望んでいるのかも知れない。深夜、呼び鈴が鳴った。おれはでなかった。しばらく物音がいたが、それもなくなった。おれはドアにそっと近づいた。ドアをあけた。だれもいない。

しばらくして三浦さんが訪ねて来た。1年ぶりだった。おれは少し室を片づけた。もうお互い会って8年になる。正直胡散臭いところもあるが、べつに害はないので、なにもいわない。かれは56歳。話題はあっちへこっちへ飛んだ。減量のための食事だったり、最近の音楽についてだったり、歌誌の進み具合だったりで、とりとめもなかった。おれはいくつか自慢したいレコードがあったものの話し忘れた。

「アイリスさんとつき合ってるの？」

「わかりません。でも、わるくない関係ですよ」

かれは笑った。

「わからないってどういうこと？」

「だってかの女は仄めかすていどのことしか云って来ないんですよ」

いくつかメールを読み上げた。かれもその真意は計りかねていた。

「はあ、そうですか。――楢崎さんのほうからアクションは？」

「いやあ、踏み込んできらわれたら洒落になりませんからね」

かの女との関係はどうしても守り抜きたい。

「でも、楢崎さん、もっと積極的になったほうがいいですよぉ。そのほうが破局しても後悔しないだろうしぃ」

ほんとうにそうだろうか、かれの辞を疑りながら、それでも新展開を夢想した（積極的にか。そんな辞をなんど聞かされてきたことやら。しかしそのたびに打ちのめされてきた。それでもまただれかに触れたくなる）。

「なんか、次の一手を考えますよ」

つもりもないのにそういった。かの女から見放されたら、それこそ命取りだとおもった。ふたりで吉野家へいき、食事をした。三浦さんは懐いだしたみたいに「リーくん、最近なにしてるんだろう、メールも来ないんですよねぇ」といった。それからおれの貌をまじまじと眺め、「まるでおれのせいでリーくんがふられたんだって貌してますよねぇ」と調子よく笑った。案外そうかも知れなかった。

＊

サイレンを響かせて救急車がやって来た。むかいの高級養老院だ。生きるか死ぬかの瀬戸際についていまは考えたくない。以前そういったことばかり考えていたからだ。死んだところで評価されないのはもうわかった。生き抜くだけしか方法はない。死んだあとの評価なんてどうでもいい。だってそんなの関知できないからだ。自殺企図のある暮らしをおれはもう棄て

た。40代に入ってすべてを受け入れることにした。おれはもう後戻りしない。いつかアイリスに出世したおれを見せつけたい。そのためにはどんな表現だってやってみせる。事実、おれはやっている。挑んでいる。どんなジャンルに到達するにせよ、おれには準備ができあがっていた。いまはもう夕暮れ。きょうは午前中、医者だった。労災病院の糖尿内科を受けていた。肥満解消にマンジェロという注射を処方され、食前にはインスリンを打っている。計算では来年1月には70kgまで落とせるはずだ。

ともかくおれはじぶんを完全に制御して、表舞台に立ちたい。なんとしてでも望みを叶えたかった。夕餉に燕麦、弱火で煮立てて、カレー粉と蕎麦汁で味付け、わかめと鶏胸肉を入れた。だれかさんが死んでいるかも知れないなかで、やがて救急車が走り去った。おれはずっと幸運だ。生きていて、野心があって、そしておれの文学をわかってくれる、少数のひとびと、そしてアイリスがいるのだから。おれはもう怖くない。喰い終わって散歩にでかけた。生田町公園を経由して二宮神社までいき、また引き返す。そして室にもどり、アイリスへのメールを書いた。《ライターの仕事はどうだい？ このまえいったようにふさわしい愛を教えてくれよ。おれは待ちきれない。きょうもきのうも室でひとり悶々としているよ。なにか愉しい話題や本があったら教えて欲しい。おれはじぶんを持て余して、いまにも破裂しそうなんだ》と。

返事はない。夜の静寂さがとてもつらいものにおもえた。どうにもできない愛がある。救いのない愛がおれのなかに息づいている。早く、この場所から去ってしまいたかった。夜の鮭とともに岸を超えたかった。

＊

若い死者たち

マーヴィンがティムと撲り合いを始めたそばから
だれかの帽子がまわって来た
かれらの情婦、デイジーだ
見物料を払えということだった
莫迦らしいからわたしはでていって
おもてのポーチで夜を聴くことにした

どうしてだれもが愛と憎しみの区別がつかないのかを考えながら
リード線に集る虫のような心でみんなのことを考えていた
二月の夜、だれもいないところで
みんなことを考えていた

初出『ポエトリー・マーケット』誌'65年9月号

だれかがいるところではてめえのことしかないのにもかかわらず
やがて撲り合いが終わったらしくみんながわたしを呼びにきた
新しい酒がだされ、そいつを平らげるかで賭けをした
「おれたちはまだ若い、おれたちはまだイケる」
そんなオダをあげて、次々に倒れた
酔っ払った死体を算えた声
ワッツを預言した声をわたしは知っていたのだ

マッケルの詩をまた訳してみた。あまり善い詩とはいえなかった。おれのほうが巧い。それは確かだった。おれなら現実に閉じこもったものは詩であれ、散文であれ、書かない。異次元に持っていく。でも、これはあくまで現実の模写に過ぎない。なぜ、かれが詩人としてうまくいかず、小説家になったのかがわかる。けっきょく現実の再現でしか、かれの想像力はエネルギーを持ち獲なかった。熱源を持ち獲なかった、ということだ。

ラジオＤＪが曲のあいまに話す戯れごとのようにおれの日々が過ぎてゆく。もちろん、おれには創作があって大変豊かな気分にもなれる。しかし相も変わらず、月の半ばに金が消え、買い出しの食料以外は紅茶と水しかなかった。稀覯本やレコ

ードの蒐集がやめられなかった。エロトピアのこともある。むかしのポルノが忘れられない。おれは物質の欲望に塗れている。どうせ本は読まないし、レコードは聴かない、ＤＶＤは観ない、エロはもう躰が反応してられない。でも、諦めがわるかった。おもえばものに飢えた子供時代を過ごしてきたし、金にも困っていた。まわりのみんながやっているようにテレビデームで遊び、少年漫画雑誌に興奮するということがなかった。家はきびしかった。家訓があったとすれば、《優れた者に与えよ、そうでない者からは奪え》といったところか。父はいったん怒ると、おれのものをよく破壊した。姉や妹たちにはそんなこと絶対にやらなかった。おれの心はいつもウィッカーマンのなかに存ったんだ。それはなんども焼き亡ぼされて来た。でも、いまのおれは自由だ。ものを獲るのも失うのも自由。架空の女の子との新生活を営むこともできる。そしていつかはアイリスのようなほんものの女の子とだって暮らすことができる。他者と比較してじぶんを卑しめるのはもううんざりだ。優れた者には優れた罰が必要だ。足りない者にこそ赦しは必要とされるべし、である。

　終戦80年のエッセイでおれはこんなことを書いた。《……あるいは神殺しをしなかったわれわれの上の世代の人間はみんな愚かだったと。裕仁天皇の意思や、実際の指揮命令系統がどうであれ、かれを神の座から降ろしてゆくだけの主体性がわれわれの国にはなかった。だからいまも戦争責任と無縁なところで『皇室ファミリー』などといっておちゃらけていられるのである。でも、こんな一見過激な態度を以てしても神なる父はビクともしないだろう。われわれが交わすことのできる辞はたった三十一文字（みそひともじ）の短歌という名の批評でしかないからだ》と。美名なんか欲しくもない。

　おれの目論見がどれだけ正確なのか、どれだけでたらめなのかはわからないし興味もない。ただいえるのは検閲や、自主規制を怖れているようじゃ作家とはいえないというところだ。ほんとうの英知が英知出版の本にしかないように。そうとも、

川島和津実と沢田舞香のグラビアがおれの人生を完全に狂わせた。――と、そんなことを考えている間に固茹で卵ができあがった。ピンク岩塩をふりかけて喰った。人生に勝てるような気がする。きょうの午後は秋らしいかぜが吹いていた。

＊

Part.4

あの釈明文がどうなったのかをおれは知らない。ある夜、呼び鈴が鳴ってでてみるとリーが立っていた。こっちがなにも訊かないのをいいことにべらべらと捲し立てた。ＡＮＡクラウン・プラザに宿泊しているといった。すぐそこのホテルだった。窓からだって見える。ずいぶん金のあるやろうなんだとおもった。

「おれはやっつけたんだよ、くそ親父を！　この拳で！　黄金の腕だ、黄金の腕を持つ男なんだぜ？」

リーは身ぶり手ぶりで撲ったときの感触を語る。

「おいおい、親父を撲るのはもっと早くやれ、10年まえにな。ガキじゃねえんだから落ち着けよ」

おれが父を撲ったのは21のときだった。

「わかった、わかった、あんたのいいたいのはこうだろう――〝おれの教育が巧くいった〟ってか？」

「そうとはいわんさ。ただ気になるのはなぜいまなんだ？」

リーはしばらく黙り込んだ。でも、すぐに顔をあげておれに迫った。
「あんたが背中を押したんだ、おれを奮い立つようにね」
「じゃあ、せいぜい感謝するんだな」
「冷たいぜ、おい！」
リーの声を背中で聞き、ジンジャーエールを冷蔵庫からだした。そしていっぽんをおれに、もういっぽんをリーに渡した。よく冷えている。キャップをとってひとくち。それからＰＣ机に置いて椅子に坐った。
「で、これからどうするんだ？」
「もちろん、就労の準備をするよ」
「この神戸で？」
「もちろん、この神戸で」
そういって手続きのことやなんか、入国管理の法律についてのことやなんか、今回の滞在計画についてのあれやこれやを話しつづけていた。おれは右から左へ聞き流し、洗い流した。まあ、いいだろう。目的を持つ人間は好い。明確であればあるだけ好い。おれはSonic youthの『rather ripped』をかけた。特別愛着のあるレコードじゃないが、雰囲気は好きだった。
「ところで、おれの釈明文だが」
「もう読んだって。気にすんな」（気にすんのはおまえの役目だろ？）
「じゃなくて、おれがいったことがまちがいだったか訊きたいんだが」

リーは真顔になってこっちを見つめた。それからジンジャーエールをぐっと呷った。それからベッドに坐って笑った。

「あんな真摯な森夫は初めてだったよ。まるでしおらしい小娘のようでね。なんていうか、その、あんな繊細さを見せることもあるんだなっておもったよ。詩の世界のそとで、現実のなかでね」

おれはべつに気に留めなかった。ＰＣで釈明文を読み返した。こんなことが書かれてあった。

親愛なるリーへ。今回のできごとについて正直に謝罪したいとおもっています。ああいったものを送りつけてじぶんを愉快だと誤解したわたしはどうしようもない愚か者でした。ただあなたを傷つけたいというよりかはマッケルの詩にあるような父親に敗北して去ってしまうようなことは絶対にないようにとおもっただけです。辞が足りなかった、配慮がなかったことを心からお詫び申し上げます。一刻も早く、いまの家を棄てること、そして家族との歪んだ関係性のなかでじぶんを苛むことのないように願っています。かつてわたしが辿った煩悶の月日をあなたには送って欲しくはないんです。

たしかにしおらしい小娘だった。まちがいない。おれはいまさら恥ずかしいともおもわなかった。まあ、そんなもんである。いつもはだらしない男だが、それでも筋を通そうとする。ときには少女のように花を摘んだりするのである。

「そういえば、最後に会った8月、おかしなことがあったんだ」

おれはマイケル・ジャクソンの話をなんとなく話した。

「あー、それってビラールのことだろ？」
「ビラール？」
「ビラール・アリー、トルコ人さ。なにやら闇深そうな男だったよ」
「なにか話したか？」
「帰りに世間話をね」
「それだけ？」
「ああ……」
辞を、ジンジャーエールごと飲み込んで、そのまま空にした。「闇深い」とはどういう意味か。少し考えてやめた。リーのいうことにいちいち意味づけをしても、それこそ無意味だ。おれもジンジャーエールを干した。そしてボトルを廊下にむかって投げつける。乾いた音を発てて落下した。リーも飲み干したボトルを投げた。おまえがやるなよとおもったが、なにもいわなかった。赦してやるしかない。おれは大人だからだ。そうとも41のね。リーは「もしもアイリスが来たら報せてくれ」といった。かれらは破局したのかも。そうおもいながら、おれはじぶんが最後に書いた詩を読み返した。谷川俊太郎への追悼詩だったけれど、そもそもあまりかれの作品に馴染みがない。おれはまったく適役ではなかった。事実、詩はさっぱりウケなかった。

*

タニカワ、
タニカワ、タニカワ、
タニカワシュンタロウ、
またの名を「青は遠い色」と囁いた青1、
法定色素、別名ブリリアントブルーＦＣＦだとね

＊

雷が鳴っている。やがて雨だ。それも激しいのが来た。怒りにふるえるように窓がゆれた。停車中の車から小石のような音がする。悲鳴するひとびとの声。歓喜するおれのなかの声。

「それよりもリー、ふられたんだろ？」

「だれがいってるんだよ？」

「もちろん、おれだが」

声を発てずにふざけるなといってリーはおれのベッドに横たわった。読みかけだった本を触って、ページをでたらめに捲る。落ち着きのない動作だった。そしてふいに起き上がっていった。

「おれはふられたわけじゃない。――それよりもあんたに好い話がある」
「なんだよ？」
「英訳したあんたの詩を知り合いの雑誌に載っけてもらう」
「ノーギャラで？」
「もちろんノーギャラで」
「勝手にしなよ、おれは責任持たないからな」
「まあまあまあ」
詩に成果を求めてもしょうがない。やれることはやって来たつもりだが。オンデマンド出版なんてだれも買わない。まあ、だれだって無名の版元の本なんか読みたがらない。なにかしら基準となるブランドがなけりゃ読まれない。おれはもうそういった世界でのレースには降りてしまったし、いまさら未練もない。冷やしておいたウォッカをだして生で注いだ。リーがいった。
「おれにもくれ」
「いい加減にしろよ、リー。おまえ病気なんだろ？」
「あんただって糖尿だろ？」
「ふん」（鼻を鳴らしてみせた）
おれたちは盃をかさねた。けっきょくそれだけだった。われわれはいつも会えば酔ってしまっていた。文学についてまと

もに語ったこともない。文学について話すことはなにもない。詩についてもそう。できることは酔うことだけ。そして気がつけば床で眠っている。やつはベッドの上だ。

*

part.5

世界じゅうに増殖をつづけるイスラム教徒について、おれは否定的な感情しかない。少なくともそれを覆す報道をおれは見たことがない。文化的軋轢を多様性という語でパッケージしたところで、すべての人間にシャーリアを求めようとするイスラム指導者たちの地政学的傲慢さにはだれもが我慢の限界が来ているだろうし、事実そういうニュースはイギリスや欧州発のものが多かった。ビラールはなかなかに控えめで大人しい男だ。リーの考えは知らない。そもそも、なんでリーがビラールを知っているのかも。

「兄が行方不明なんだ」とビラールはおれに告白した。5年もまえにイギリス留学していたかれの兄、ファルーク・アリーは数名の同級生たちとともに失踪。そのあと日本に渡航していたことが判明したらしい。ほんとうなら兄とおなじイギリスにいくつもりだったビラールは就労ビザをなんとか取得して日本入国を果たし、目下のところ兄たちのゆくえを追ってい

るというわけだった。しかし、そんなものは警察や入管の仕事じゃないのか？　わざわざ単身乗り込んで来るところに家族関係のまがまがしさが垣間見てとれた。家族なんてほっとけばいいのにとさえおもった。おれは事実そうしている。

「兄はわるい連中に追われていた、もしかしたらもう消されたのも知れない。でも、これはぼくが始めた戦いなんだ、祖国から連綿とつづく戦いなんだ。もしかしたら兄が悪党であってもおかしくはない。そのときはぼくの手で始末をつけるよ」

ビラールはひどく冷静にいった。始末だって？　ひと殺しはごめんだった。

「兄はぼくとちがって度胸のある男だ。――なにをやらかすか……」

「大丈夫だよ、きみの兄さんはもどって来るさ」とリーがいう。（かるがるしいやつだ）とおもった。

おれはメニューを見ながら肉料理を撰んだ。こんなときは肉がいちばんだ。わざわざメッカの方角で屠られる畜生をおもいながら、おれは店員に声をかけていた。シシタヌクを撰んだ。シシタヌクは鶏肉のグリルで、まずはヨーグルト、レモン汁、酢、オリーブ油、おろし玉葱、おろし大蒜、塩、醤油、生姜、トマト、香辛料を混ぜ合わせる。それから鶏肉を加えて、漬け込み、冷蔵庫でマリネにする。玉葱と交互に竹串に刺し、油をかけて焼く。途中でマリネ液をかけながら焼く。肉を喰うとき、人間はけものに還るような気がする。味つけの重厚さがなんともよかった。店の雰囲気も、そとの静けさもよかった。好い飯だ。やがて食事が終わった。おれはリーに先にでるようにいわれた。なぜかはわからない。外国人同士でなにか話があるのだろう。おれはひとり会計を終えて、そとにでた。もう10月だったが、温かい午後だった。帰ったとき、アイリスからのメールに気づいた。またおれをからかっていた。社会学用語の濫用された文章だけで、頭がくらくらっとした。いい女だ。まるでおれを繋いでくれる鎖のようにおもかった。

《いまどこでなにをしてるんだよ？ ここから近いのかい？》

《「彼らが地からあがる時は、輪もまたこれらと共にあがる。生きものの霊が輪の中にあるからである。」――『エゼキエル書』第1章21節》

《そんなことを訊いてるんじゃない、いまどこにいるかって訊いてるんだよ》

《おお、愛しの迷い子。でも、わたしもうすぐ飛び立つから安心して》

そのまま連絡は途絶えてしまったが、添えられた画像には新幹線が映っていた。どうやら新神戸に来てくれるみたいだった。辞にならない歓喜が躰を駈け抜ける。それはセックス以上の快楽だった。そんなときだった。呼び鈴が鳴ったのは。いったい、どいつだ。おれの愉しみを邪魔してくれたやろうは。ドアをあけるとリーだった。なんともつまんねえやつ。おれは真顔になってやつを見た。やつは酔っていた。そしておれの耳に口を寄せ、囁く。

「アイリスはいつ来るんだよ？ あれはおれの女だからな」

やつはもうアイリスの恋人じゃない。背中を向けておれはいった。

「ふん、それはかの女が決めることだぜ」

おれは手と手を打ち鳴らした。けものがけものを嗾けるみたいに。

＊

２０２５年3月19日、イスタンブール市長イマモール氏が自宅で拘束された。エルドアン政権による野党弾圧の一環とされ、同日トルコ資産は「トリプル安」に見舞われた。国内では100人以上の野党関係者が収賄・犯罪組織運営などの容疑で拘束されており、政治的緊張が高まっている（『ブルームバーグ』トルコ支局発）。

ターコイズブルーのスカーフをしたアイリスがおれの室にいる。ちょっとした用事でおれはでていた。鍵はかけてない。もちろん、不用心だった。でも、こんな事件ならいつでも歓迎だ。かの女はちょっと疲れた様子で、おれに笑いかけた。素晴らしい。かの女はスカーフを解きながら、最近あったできごとを断片的に語る。ウェブ記事の取材で長野にいったとか、そこでの料理のことや、あるいは映画館で痴漢に遭ったとか、東京の地下鉄網に改めて閉口したとか、将又日本の文藝業界は批評を失い、読者に媚びているといったことまでを途切れとぎれに話した。そして最後につけ加える。

「それでもあなたはなによりも幸運よ。世間といったものに穢されていないから」と。

「それっておれが幼稚ってこと？」

「いいえ、あなたは逃げ延びる才覚があるってことなの」

それはいえていた。おれは人生をもはや他人のための奉仕にしないと固く誓っていた。もうずっと他人のためには働かなかった。それまではずっと地底のような世界で他人の仕事を他人のためにやっていたから痛いほどわかる。

「生命力よ」

「え？」

「あなたには生命力を感じる」

たしかにそうかも知れない。おなじ科白を詩人仲間の田中修子にもいわれた。かの女が逝ってもう何年になるのか。算えてみた。3年だ。とうとう、かの女とキスをすることもなかったな。「楢崎さんとキスして、それを楢崎さんに詩に書いてもらって……」――当人が本気で云ったのかは怪しいが。かの女の声がとても好きだった。おなじ歳で、おなじ7月生まれだった。誕生日をお互い祝い合ったあとで、かの女は死んでしまった。

「でも森夫、わたしに逆らわないで」

「逆らっちゃないさ」

「もしリーがなにをいってもわたしに味方して」

「リーなんか、ハンチクだよ」

おれが笑った。リーの存在を脅威におもっているアイリスが少女のようでかわいい（でも修子さん、おれもけっきょくは因業なんだ、あなたのことをこんな小説のなかに書いてしまう、どうしょうもないくらいの作家先生なんだよ。ごめんよ、修子さん、おれは言語化することでしか、文字にすることでしか他人と通じ合えないんだよ）。しばらく心がじんじんと痛んだ。おれはアイリスを誘ってどっかにゆきたかった。フラワーロード沿いにちょうどいい喫茶店があるのを懐いだした。

「いこうよ、アイリス」

「そうね」――かの女は初めておれに応えてくれた。おれはかの女のスカーフを拾い上げた。そしてふたり立ち上がり、おれはかの女の首にそれを巻いた。この人生を信じられるような気がして一瞬嬉しかった。かの女はなにもいわずにおれの

あとについて歩く。やがて店が見えて、ふたり入った。なにもかもわるいことはひとつもないような貌で、おれはかの女との時間を愉しんだ。おれはたしかに幸運な男、いずれなにもかもを手にできるはずだ（でも修子さん、あなたは笑うかもしれないね。おれが幸運なんていっているのを聞いたら）。

*

おれから女性性を抜き取ったらアイリスみたいになるんだろうとおもったけど、どうだろうか。アイリスは東京へもどった。モデルの仕事だ。リーが訪ねて来ることもあった。それに加えてビラールが一緒のときもある。やつらの相手なんかしたくなかった。おれはアイリスの所持品になりたかった。もしもかの女のピアスや指輪になれて、一瞬の輝きのために生きられたのなら、いつ棄てられてもかまわない。こんなふうにも考える。かの女のバッグのなかに、名刺入れと一緒におれが入っていたらいいとも。かの女がだれかに「これ、わたしの」といってくれたら、それだけでいい。初恋の地獄が癒えて、ようやく立ちあがろうとしているときにアイリスと出逢ってしまったのは幸運だったのか、不運だったのか、いまもってわからない。いえるのはかの女もまた地獄かも知れないということだ。

ビラール・アリーは24歳、この夜、人生ではじめて飲酒するというのでわざわざおれの室が撰ばれた。わけがわからない。戒律を破るならてめえの室でやればいいのに。どうやら仲間にバレるのがまずいらしい。最初のグラスを啜るまで30分はかかった。ブツはハートランド・ビールである。その儀式が終わってから、どうしてか、おれはおれの室を追いだされた。沈

黙。リーとビラールはゲイなのか。しかし男色もイスラムでは御法度である。なにかあるのか。

ドアが開いたとき、妙な臭いがした。よくわからない。独特の臭いだ。まさか大麻ではないのか。ふたりは気持ちのよさそうな貌をしている。おれもいちどはやってみたかった。リーの持っていた鞄をあけて、なかを弄くりまわした。そのなかに印刷された写真が1枚。学生たちの集合写真だ。そのなかに見覚えのある貌があった。アイリスである。いまよりずっと若い。上からペンでなまえが書いてある。もうひとり、なまえのある人物がいる。中東系のマッチョマンだ。Faruk Aliとある。これがビラールの兄なのか。でも、それをどうしてリーなんかが持っているのか。おれは当惑したものの、素面だった。写真をもとにもどしてふたりを起こした。

「おれの室は祈禱室じゃねえ！」

ふたりを追いだして窓をあけた。しばらくしてドアを蹴る音がした。呼び鈴も鳴った。でてみると警官ふたりだった。葺合警察だった。大麻らしい臭いはもうしていない。フードファンも回している。それにおれがやったことではない。やましいことなどないのに警官の制服はおれに問いかける。

「夜分すみません、楢崎森夫さんですよね？」

「ええ」

「いまから任意同行、お願いしたいんですわ」

「え？」

断ることはできないようだった。おれたちは階下へ。停められた車のなかに誘導された。パトカーはいつも乗り心地がわ

るい。すみやかに車は発進した。無線がうるせえ。警官たちも無線でおれのことを連絡する。隣の警官がおれに訊く。

「職業は？」

苦い問いかけだ。

「自営業です」

苦い答えだ。

「どういったあれで？」

苦い問いかけだ。

「出版業です」

苦い答えだ。

「本だしてはる？」

恥ずかしい。

「ええ」

「アマゾンとかでも買えるの？」

オンデマンド出版なのだが。

「キンドル版なら……」

30年ちかく書いているのに、いまだ商業出版に漕ぎ着けられないので、えらくばつがわるい。深夜の葺合署は懐かしさが

あった。なんども世話になって来たし、留置場にぶち込まれたこともあった。Y部長刑事、いまどうしているだろうか。傷害で挙げられたおれをよくしてくれた。もう11年もまえのことだ。警官Aがいった、

「きょうね、職質で捕まえたやつ、スタンガンと一緒にね、楢崎さんについての書類を持ってたんですよ」

警官Bが繋げる。

「あなたの写真とか、マンションの写真、地図、連絡先とか、親の住所とか、そんなの一切合財や」

警官Aがつづける。

「事情聴取したらね、金で雇われた、誘拐するつもりやったっていいよったんですよ」

警官Bが補足する。

「いまのところ、依頼主については黙ってるからね。一応貌だけ見て欲しいんや」

おれは鏡の室に案内された。小さな室のなかに椅子、机、そして鏡の仕切りがある。おれは初めて来る場所だった。そしてやがて連れられた男も大学生風のこれといって特徴のないやろうだ。おれは知らないやつだと即答した。しかし脳裏にはあの写真のマッチョマンが懐いだされた。アイリスのむかしの男がおれを狙っているのかも知れない。おれがなんとか帰って来ると、さっそく電話があった。どっかで監視していたにちがいない。

「もしもし、楢崎ですが――」

電話のむこうからはなにも聞えない。だからこっちも黙った。3分ほどの黙り合いの末、むこうから切られてしまった。受話器を降ろしたとき、厭な汗がどっと噴き出して来た。夜はまだまだ長かった。でも、おれは眠剤を嚥んでベッドにあが

った。なにもなかったようにふるまいたい一心だった。アイリスがあんな大男に転がされているのを妄想した。臍を噛むようなおもいに駈られた。かの女を独占したかった。いついつまでもおれのそばにいて欲しかった。

アイリスからのメールは無言電話の翌日にあっただけだ。あのトルコ人とはなんら関係を臭わせない内容で、つらつらと日常のことが書かれてあった。まるで「なにも心配するな」と暗にいわれいるようだった。「察しろ」ってことかも知れない。それから音沙汰なし。ともかく、あの男が搦んでいるのはたしかだった。でも、それを心配してもしょうがない。だっておれはアイリスという物語の一部なんだ。それはとても淫らで、誇らしいことだった。かの女をおもうたびに躰が熱くなった。正直殺されないかぎりはどうだっていいことだ。おれはなにごとにも怒ったり、慌てたくなかった。じぶんのペースを乱され、他責思考に駈られるのはかんべんして欲しい。

リーが仕事を見つけたと報せて来た。しばらくツアーガイドをするという。まあ、いいだろう。ビラールは週末になるとパブで呑んでいるらしい。深みには嵌まるなといっておいた。おれのほうはよくわからないままギターを弾き、歌誌を編輯していた。なんだかぼんやりしていて力の入らない日常がつづく。22時には床に就き、午まえに起きている。最近はずっとスケールとフレットノートの勉強がつづく。それでも少し午睡する。午後の眠りのなかに男が乱入して来た。室が沙漠で充たされる。難民を乗せたバスが立ち往生している。黒眼鏡のディレクターがおれにいう。——きみは好い詩人になれるって。男はクルアーンを暗唱しながら、鋭い剣を持ってこちらに迫って来る。ディレクターは気づかない。室のカーテンが突然落下する。朝日のなかで燃える裸僧像が2kgパックで販売される。いくつかの霧の断片を剥がしながら男がおれの脇腹を突き刺した。血ではないなにかが滴っている。おれは男を突き飛ばした。奈落へと降りていくのはまちがいなくおれだった。

汗にまみれて眼を醒ます。おれは口のなかで呪文をくり返した。なんの意味もない辞をくり返した。やがて気分が落ち着きを取り戻し、おれはベッドから離れて、水を呑んだ。

＊

知らないよ。

（'74年4月、出版エージェントであるパーカー・ミラーへの手紙に添付された詩で、手紙の本文にてかつての詩人仲間に金を貸したり、金の無心に遭ったりしたということが書かれてある）。

詩人だったころの友だちが——大して友だちでもないやつがおれに電話をかけて来る
いったい、どういうわけか、おれたちは仲がよかったことになっている
きのうはヴィンセント、きょうはマースティン、あしたはだれだろう？
みんな出版社にコネが欲しいといっているが怪しい
だっておれのような5流作家になにができる？
あいつら、いつまで経ってもメソメソと詩を書く
まあ、おれだってそのひとりだったが。

いずれによ、斧が必要になるだろう
過去とおれとを分かつための斧が。

じぶんの両手でできることをやるだけなんだよ、人生ってのは。
（むかし、そんな唄があったような気がする）
ほかの手が必要なら諦めるしかないよな。
そんなこともわからないやつらがおれのまわりにいて、
おれを訪ねて来る。なんという悲劇。

そろそろ、軒を閉じるよ、みんな。
アリス、カーナ、パーシー、マーヴィン、そしてグランドリーそのほか、
おれはきみたちのことなんか知らないよ。
いままでも、これからもね。

こんなものを詩集に撰ぶやつらはどうかしている。マッケルだって生前知っていたらとめただろうに。こんなものをじぶんの詩として認識されるのは恥辱以外の何者でもない。おれは静かに苛立っていた。水が沸騰しそうでしない、そんなぎりぎりのなかで生きている。週末はきらいだ。できることがなにもないからだ。次の受診日は火曜日である。眠剤が切れかけている。それが不安でならない。まあ、メラトニンだって無能じゃない。以前に較べれば眠りの質は安定している。ただ固い椅子に坐ってばかりいる生活は躰によろしくない。ずっとまえにひでえ痔を患っていたときがある。医者には「入院する？」

とまでいわれた。あんなものが再発したら生活なんてできない。

こういうふうにおもったことや、あったことを書くときにいけないのは、ついつい目的にばかり眼がいって、気の利いた科白や、必要なぶんの贅肉まで失ったものを書いてしまうところだ。おれは焦りすぎる。売ってしまった本を懐いだした。ロバート・マッキーの『キャラクター』だ。人物造形についてちゃんと学ぶべきだった。高価な本だが、ほかの脚本関係の書物と合わせてもたった¥1、000にしかならなかった。噫。物はすべて売ったそばから買いもどしたくなる。おれはまた映画脚本を読むことにした。

幼い頃は映画監督になりたかった。さらに成長して脚本を書きたいとおもった。実際書いてもみたが、おれには経験も知識もなく、さんざんダメなものを書き撲った。以前、1本書いて師匠の森忠明に送った。おれはかれをえらく不愉快にさせてしまった。「なんでこんなに後味のわるものを書くんだ！」と逆鱗に触れた。

そんななか、アイリスを訪ねるものがおれのところにあった。ボロを着た若い男で、なぜかおれのことを知っていた。おれはやつをなかに入れた。ほんとうはそうするべきでなかった。すぐに追い返すべきだった。男はスツールに坐ると、アイリスとの関係をぶちまけた。そしていった、

「おれはあいつと係わったからこうなった！」

ボロの上着を叩きながら、やつはいった。埃と悪臭が舞う。

「で、そんでおれのところに？」

「そうさ、最後に会ったとき、あいつはおまえのことを話した」

なにか誇らしい発見のようにかれはいった。
「どういったんだ？」
やつは急に勢いを失った。
「どうってべつに。――あいつがおまえの住所を洩らしただけだ」
「どんなふうに？」
「どんなって、――それはじぶんがここにいるって……」
われわれは沈黙した。やつは室を見渡した。なんでもねえっていうふりで話をつづけようとした。
「よしなよ」
おれはいった。
「よしな。ここに来てもかの女の痕跡はない」
やつは吼えた。
「だったらスマホを見せろよ！」
おれはスマホをとってかの女の連絡先を見せた。やつは了解したようでその場に尽くした。
「たしかにおまえのほうが正しそうだな。かの女の番号はそれだけだ」（まあ、最初から終わりが見えているよな？）
それでもやつは諦めきれないようで、
「おまえの身は安全なのか？　かの女になにも誘われてないだろうな」

やつがいきなり身を乗りだしていった。おれにはなんのことかわからない。
「知らんね、かの女がなにをするんだ？」
おれはやつに躙り寄った。
「おれにやったように攫って、へんな注射を打つ」
なんてこった！――こいつはうそつきだ。やつのまぬけづらにとことん飽きていた。
「根拠はない」
「こんなにおれがいってもか？」
ルンペンはまだおれのスツールにしがみついている。おれは決心していう。
「ああ、そうだ。――アイリスはおれの恋人だから」
やつはがっかりして去ろうとした。おれは尋ねる。
「おれのことでアイリスは？」
なにかいったのかとおもって訊いた。
「――調子の好い詩人だって……」そしてこうつけ加えた、「おれのことを調子の好いモデルだって……」と。
おれはなにもいわなかった。そのままやつをだして、ひさしぶりに買ったコロナスマトラを悠々と口にした。気分は上々だ。なにもわるくない。このままずっとこの小説を書きつづけたらとおもった。陽は傾いて、ボクサーグローブのような形で、ゆっくりと沈んでいった。おれはさっきまで男のことを考えた。生活保護なら紹介してやれるが、アイリスのことまで

はできない。あのまま沈むのがせいぜいだろうと値踏みした。だって、それ以外できることはあるのか？　おれにはわからない。まあ、ただあの男がいったように攫われて、注射を打たれることもがあっても、おれはかの女に尽くせる唯一の男だってことを宣言しておこう。

かの女とはじめて会ったのは2年まえで、そのとき、かの女は三浦さんに連れられて来たんだ。近所の中華レストランで話をして、すぐにおれたちはわかり合えた。かの女は喋りまくった。おれの書いたものの、どこが好いとか、わるいとか、そんな話をひろげた。

「あなたの詩、どっかで泣いてるのに、その泣き方がわからないみたいだった」

おれは虚を突かれてなにもいえなかった。

「あした、あなたの室にいっていい？」

「ああ、――でも散らかってるよ」

「そのほうが都合がいい」

「え？」

「詮索しないでね」

「……わかったよ」

おれたちは自作のチャップブックを交換してわかれた。なかなか気分のいい、冬の夜だった。おれはかの女の英語の詩をいくつか翻訳しようとおもった、でも口語だらけのその詩はまるで歯が立たなかった。当時はいまのようにＡＩブームでも

なかった。そのあとリーも交えて3人で会うようになった。アイリスはすぐにリーに馴染んで、おれなんかいじけてしまった。でも、いまはちがう。アイリスはおれを見ている。

*

part.6

パーティー会場は渋谷のアートカフェだった。特別な日のための特別な照明が輝き、無意味な現代美術と、白痴的な相貌のわれわれを照らしていた。そもそもの発端はまたもアイリスだった。おれが退屈な室でギターを爪弾いていたら、またも急に現れて、超自然的におれを東京へと連れ去った。パーティーはあらかじめ予告され、かの女によれば15名の文化人。業界人が集まったという。シャンペンが音を発てているさなか、流ている曲がRolling Stonesの『She's a rainbow』だというに気づいたのはアウトロに差し掛かってからだった。まずアイリスはおれを出版業界の人間に引き合わせた。かの女は黒いドレスで正装していた。背中が大胆にあいている。おれのほうも仕立てたばかりの上下を着せられていた。なんだか恥ずかしい。そしておれはかの女の家に泊まっていた。

「紹介するわ。詩人の楢崎森夫。まだ孵化してないけど、殻は薄いの」

なにをいっているんだ、おれは詩をやめたのに。

「みなさん、もう読んでもらってるとおり、かれは詩も短歌も小説も書くし、音楽や美術もやるのよ」

さっそくお偉方たちがおれに握手を求めた。

「きみの本、どれもいいね。なによりデザインが好い。素人じゃないよね？」

「ぜんぜん素人ですよ、ぜんぶ独学です」

「それは凄い！」

大勢が歓声をあげた。たぶん、もう酔っているのだろう。おれはかれらを信じなかった。それでも相手が変わるごとに、おれの気分も大きくなっていった。写真関係、モデル関係、映像関係、舞台関係とつづくなかで、なんだかじぶんに才能があるような気がして来た。曲が変わる。David Lynchの『The big dream』だ。

「ねえ、あなた、ほんとうに詩をやめたの？」

「やめたよ。もう書かない」

「じゃあ、なんでこんなにきれいな殻を持ってるの？」

「さあね。おれのせいじゃないさ」

かの女の知人、劇作家の井上顎人がやってきて、かの女をおれから取り上げようとした。正直気分を害したので、睨みつけた。それを井上は見逃さなかった。

「嫉妬しなさんな。器用貧乏くん」と井上はおれをからかった。たしかにおれは器用貧乏だった。それだけにはなるなよと、森忠明から警告されているにもかかわらず、進んでその道を歩いてしまっていた。羞恥心で辞がでなかった。

「さ、――好い話があるんだ、アイリス」

おれは取り残された。グラスを持ったまま、まわりを見渡す。みんな怪訝な表情でおれを見ている。居たたまれない。それでも写真家たちが手招きしてくれたので、そこへ入ることにした。モデルの女の子たちも近い。

「きみ、写真巧いね」

だれかがいった。なまえは知らない。

「写真家ではだれが好き？」

「高橋恭司……かな。――できればおれも女の子が撮りたい」

「モデル、雇えばいいじゃん？」

「生憎おれは地方に棲んでるから」

「どこ？」

「神戸だよ」

相手が黙ってしまった。おれは酒を呑みつづけた。そしてまたちがうグループに紛れ込んだ。アイリスは井上と姿を消して、そのまま30分帰って来なかった。帰って来たときにはかの女も少し酔っていた。

「ごめんね、寂しかった？」

「いいや……」

「拗ねてるのね」

そのまま深夜まで宴はつづいた。最後に聴いた曲は折坂悠太の『夜学』だった。タクシーで帰った。アイリスの家は横浜関内にあった。おれはもう泥酔状態だった。かの女の室の匂いを憶える時間もなく、ベッドに入って寝入ってしまった。浅い眠りのなかでアイリスと踊る夢を見た。踊りながら、どうしたものか、おれのズボンがなくなってしまう夢だった。衆人環視のなかで恥ずかしい眼に遭う夢をよく見る。起きたとき、かの女はいなかった。朝の10時を過ぎていた。かの女は仕事の時間だ。メールを見ると大量の新着があった。知らない人間のなまえが大量に踊っていた。そのほとんどがおれの才能を賛美していた。一緒に仕事がしたいとか、あなたの本をだしたいとか、作詞をやって欲しいというのもあった。おれは無我夢中で返信した。

午になって近所をぶらつき、ファミリーマートでサラダチキンと黒酢ドリンクを買った。テキトーな場所で喰った。おれは罠に嵌まったのか、それとも幸運を掴んだのか。それがまだわからない。家にもどった。改めてみるとごくごく必要なもの以外、なにもなかった。テレビがないのはおれもおなじだが、デスクトップもない。夜になってアイリスが帰ってきた。

「お疲れさまです」とおれはかしこまった。

「マッサージしてよ」

「かしこまりました」

足のマッサージをしてあげた。かの女の呼吸音が突然淫らなものになる。どうしたものか。おれは勃起しそうな気分を抑え、按摩に専念した。長い足だ。おれのような短足とは釣り合いが取れない。どうしてかの女はおれに拘るのか。もしかしたらほんとうにおれが好きなのかも。だが心の奥では女というものに対しての信用はなかった。裏切られるのは厭だった。

その翌日からずっとおれは仕事だった。コラムの打ち合わせ、モデル相手に撮影、合間に作詞の相談――といろいろなことがあった。アイリスと一緒に上京してから5日め、おもわぬ人物から連絡があった。井上顎人からだった。

「このまえはすまなかったよ。きみの恋人を取り上げてさ。詫びついでに話がしたいんだ、実際会ってね」

「どういったご用件ですか？」

「きみの最後の詩集だっけ？――あれが気に入った」

「『不適当詩劇』ですね」

「あれを原作に舞台をやりたい」

そう来たか。おれは好きにやっていいって答えた。原作料だけ入ればいいと。演出や演技について知識はないし、おれがどうこういうことではない。

「――じゃあ、契約書を交わそう。あしたは空いてる？」

「ええ、いつでもいいです」

おれはそういって電話を切った。これが失墜の始まりとは知らずにだ。次の15時になって新宿までくりだした。なかなか気疲れのする場所だった。金のあるやつらを包囲するためなら、なんだってやりそうな人間ばかりいた。『ルノワール』でおれたちは話した。井上は厭味ひとつ、皮肉ひとついわず、紳士的だった。契約書もばっちり。前金で5万頂戴した。

「アイリスよりもずっと生々しいよ、きみの詩は」

「ほんとうですか、アイリスよりも？」

「正直、甘く見てたね。わるかったよ、からかって。でも、きみはなにかひとつのもので成功したほうがいいね。じっくり考えればいいさ」

「ええ」

おれは金が入ったのと、ことが成就しそうなこと、そしてアイリスよりも上に立てたという喜びでいっぱいだった。それをそっくりかの女に話してしまった。かの女は聞き流したように見えた。でも、そうじゃなかった。明くる日から業界人たちからの返信が一気に減った。ある人物は「アイリスとなにかあったのか？」と訊いてきた。いいや、なにもないはずだ。それでもいっこうに事態はよくならない。コラムも作詞もなしになった。打ち合わせの予定がどんどん消えていった。おれは焦った。アイリスに電話したものの、でなかった。

さらに翌日、遂には井上さえ「舞台はなしだ」といって聞かなかった。このときになって初めておれはじぶんの発言を悔いた。でも遅い。嘔いた辞を飲み込むことはできない。週末、放心したままベッドで横になっていた。アイリスが近づいて来る。香水の匂いがする。ローズマリーに似ているような気がした。でも、たぶんちがう。

「もう帰ったら？」

おれは黙っていた。アイリスが手を回したんじゃないか、それなのになにも語らないなんて。絶望感が支配する頭のなかで文章を射精しようとするおれの試みはどうやら打ち砕かれたようだ。

「これ、交通費――新幹線くらいひとり乗れるでしょ？」

かの女は最後にいった、――「迷子にならないでね」と。たった1週間の文化人ごっこ。すべてがつくりごとでしかない

という事実に呆然とする。おれは身支度をした。かの女はおれに衣裳袋を渡した。かの女がパーティーのために仕立てたおれの服が入っている。かの女のマンションをでて、タクシーを拾った。東京駅までいく。別れ際にひとこともなかった。帰りの列車のなかでかの女のふるまいを反芻した。しつこくしつこくおもい返した。おれはどうしていつもわるい選択してしまうのだろうかと夢中で考えた。

道徳

初出『リトル・シティ』誌'70年5月号

エドヴァルド・ムンクの『サン・クレーの夜』のプリントを
壁いっぱいに貼りつけてエレナ・ウースはわたしの履歴書を点検していた
赤毛のエレナ、それからわたしのうしろに控える半ダースの求職者たち
正気を失いかけた午後の陽射しがかすかに忍び込んで来るオフィス
『殺し屋について』と題されたわたしの頭のなかの草稿
なんやかんやあって検品係にいちばんで採用が決まった
よしよし、あとはカフェでビールを呑むだけだった

けれども廊下へでたわたしをエレナは呼び戻した
そして職務経歴書の空白を指さした
「これはなんですか？」
「苦悩と研鑽の一年ですよ」
「なんですって？」
「だから苦悩と研鑽の〝二年〟ですよ」といったんだ
「冗談は困ります。これはまっとうな仕事なんですよ」
「それはウースさん、わたしのせいではないんだ。とても大変だったってことですよ」
「とにかく採用はなしです。お引き取りください」
わたしは一瞬で青くなった
もう一週間、この町で食い扶持をさがしていて
だのにたった数年の空白が理由で追いだされる
そんなことはぜったいに赦せなかった
「おい、エレナ！」
わたしは怒鳴った
『サン・クレーの夜』が震撼するほどの声でだ

「おい、エレナ、おまえわかってんのか？　てめえのいってることがよ！」
そしたらエレナのやつ、わたしにむかって中指を突き立てて、
さっそく警察に電話しようとする
わたしは逃げたよ、エレナさん
とんだ、ケツの穴だ
ふたりとも。

この詩にあるような焦りと苛立ちをいま感じている。あれからかの女から連絡はなし。リーも来ない。だれもいない。おれの人生に穴が空いたようだ。朝起きてすることがない。このところギターも触っていないし、なんの研鑽も積んでいない。ただメシを喰って、紅茶を飲んで、たまには酒も呑む。それだけだ。どうしたものだろう。どうしたらアイリスにふり返ってもらえるだろうか。そればかり考えていた。

果てしない停滞感。見放されたという感覚。おれがいままのおれをかなぐり捨てたくなる瞬間。いったい、どれほど待てばかの女に赦されるのかを知りたい。おれはダメなやつだった。底なしにダメなやつ。頭のなかで議論が起こる。それを見過ごすことができない。いまも次の瞬間もぜったいに考えてしまう。またしてもおれは見限られた。10年まえとおなじように。あのときは全員同級生だったからマシだ。けれども今回は東京の業界人たちだ。もはや作品をつくって発表する場所がないのかも知れない。どこまでいっても素人のまねごとだ。ああ、井上顎人め。とんだ、喰わせ者だ。ほかにもいろんなや

つの貌が浮かんだ。まったくどいつもこいつも本気で生きてないんだ。だからアイリスに手を回されて、すぐにビビってしまうんだ。**くそったれ、アイリス！**

呼び鈴が鳴る。おれはでる。ビラールだった。――「なんか用か？」とおれはいった。ビラールはなにかに脅えていた。血走った眼でおれを見る。おれはやつを室へあげた。

「なんの話があるんだ？」

「リーが、――リーが裏切った」

「どういう意味だ？」

震えて声のでないビラールにおれはなにもいえなかった。

「きみも知ってるんじゃないのか？」

「なにを？」

「リーの居所とか……」

「生憎と知らんね」

「そうか……」

首を垂れて坐るビラールにおれはビールを差し出した。

「呑めよ。喋りやすくなる」

黙ってそいつを受取って呑んだ。そして小さく「ちくしょう」と呟いた。

「リーのやつ、最初から兄を探るためにぼくに近づいたんだ」

「いったい、なんのために？」

「やつはスパイなんだろうとおもう。そしてぼくはもう用済みのようだ。やつの室にいったが、もう引き払ったあとだった。空港へいったようだ。そのさきに兄がいるかも知れない。でも、ぼくには動けない。兄を殺したくはない」

リーがそこまでの切れ者にはおもえなかった。間抜けなアル中で、おれのまえではいつでも脳天気なやつがそこまでの行動するとは想像できない。いったい、どこまでが事実で、どこからが演技なのか。

「また物騒な話だな」

しばらくビラールは黙っていたが、覚悟を決めたように語りだした。

「だってぼくは地元の組織に命令されたんだ、兄を殺せって。兄は組織の金を持ち逃げして結社をつくった。さらにイギリスから逃げて日本に拠点を移した。次はまた金を奪って飛ぶつもりなんだ。あした命令が来る。それまで待っているのが怖ろしいんだ、わかってくれ」

「話す相手をまちがえてるよ、ビラール」

おれにはなにもできなかった。わかったところでなにもならない。沈黙がえらく長引いた。おれは音楽をかけた。Joy Division の『Atrocity Exhibition』だった。イントロのドラムがおれの神経を高ぶらせた。ギターが神経症的に侵入し、歌が始まる。ビラールは苛立っていた。おれの無神経な行いに。でも、なにもいわない。

「ぼくはやはりいくよ。兄を殺せるのかはわからない」

ビラールは立ちあがった。そして静かにでていった。おれは音楽に合わせて踊ってみた。ひどいリズム音痴だった。これじゃギターなんか弾けるわけがない。それでも最後まで音楽は追究したい。じぶんなりのやり方ってやつがあるはずだ。それにしてもおれの人生の登場人物ときたら、変人ばかりだ。おれ自身がというのもあるだろうが、どうかしている。みんながみんな角を生やした小鬼のようにおれのまわりを律動している。それは往復運動かも知れないし、永久運動かも知れない。ともかくアクリル絵の具を溶かした水のような混濁した意識下部のなかで目醒めようとする妄想の一群をおれは見逃さなかった。殺人を筆頭とする、あらゆる謀略を司るトルコ人の男をおれが幻視する。ピカデリーでアカデミックと罵られた男の素顔を奪う手押しヤサイの男女、かれらのなまえは知らない、知っているのは初恋のこと、蔑まれながら大人になるということ、そして愛の不在を算える術をもはや失って、やはり初恋のことを考える。でも、それだってすぐに忘れる。ひとはみな記号に過ぎない。死んでいるか、生きているかだ。おれはどうにかやっている。夜になって電話が鳴った。ビラールからだった。手短な別れをいって切れた。沖縄へいくといっていた。焦臭い物事がつづいた。おれにはどうすればいいのかがわからなかった。とりあえず、じぶんの詩集を読み返しながら時間を潰そうとした。

*

夜の雷光

夜にさえも見放されて、
飛び起きておもう
かつて惹かれた女たちを
そしておれをきらった女たちを
氷上の稲妻みたいに去ってしまったなにかが、
おもての車のポーチを照らす
いつまでもおれをはなれないかの女らのこと、
眠れないからだが求める、皮膚の安寧
あるいは空腹の技法かなにか、
ともかく道のわからない時間があまりにも多すぎて、
じぶんの痛みさえ、遠い過古みたいにインターの出口をさ迷ってる
なにしろ、この時間には終わりというものがないから、

去ってゆく車の窓が怪しく光りだす
過古の高速がすべてをかつて見た夢と融和する
まるでその夢のなかで、夢であることを悟ってしまったみたいに
高橋恭司が撮ったブコウスキーのポートレイトを懐いだす
何年もまえから棚にある写真集が時折、おれの手のなかにある
晩年のかれの顔の皺から、おれの手の皺に至るまで、
発光する歳月がおれたちを通り過ぎたものだが、
かれは栄光を勝ち取って、
おれは負けつづけ、
やがて稲妻に打たれる
男というものは母親から女たちへの接し方を憶えるとさっき読んだ
それならばおれは失寵と疎外と黙殺を学んだ
新神戸駅が驟雨のなかに建ってる
この詩を書くために駅まで歩き、
そして帰ってきたおれには、
おれのような男にふさわしい死をおもうことの、

ほのかな愉しさだけが千年の雷みたいに
窓を照らしつづける、
——黙れ。

part.7

沖縄の麻薬摘発、10年で最多10～20代が大幅増　２０２４年県警まとめ／'24年に県警が麻薬取締法違反容疑で摘発した人数が36人に上り、過去10年で最多だったことが14日、県警のまとめで分かった。23年（11人）の約3倍。10～20代の摘発人数が大幅に増加して、摘発人数を押し上げた。薬物事犯全体でも同世代が約7割を占めており、若年層に薬物が浸透している現状が浮き彫りとなった。'15年以降の麻薬取締法違反容疑での摘発人数は、同年の20人が最多だった。'24年に同法違反容疑で摘発された10代は20人（前年比17人増）、20代は10人（前年比8人増）。コカインやMDMAの所持や使用が目立ったという（『琉球新報』朝刊）

沖縄での殺しについておれはなにも知らなかった。もちろん、その時点では報道すらされてなかったのかも知れない。とのもとかく地元のやくざと、外国勢力との接点がそこにはあったらしい。それがいまになってわかったが、それがどうした？ともかく、おれがアパートで午睡を愉しんでいるときにかれらは訪れた。3人の男にそとの車まで連行された。3人それぞれルーツがちがう人種だった。いままでに磨いてきた力を是非とも披露したいという実感だけは伝わって来る。車で待っていたのはアイリスだった。ターコイズブルーのスカーフに臙脂色のジャケット、黒いスラックスを穿いている。靴は黒いショート・ブーツだ。

「いったい、なんの真似だ？」

おれの声にもびくともしない。頬笑みを浮かべてこっちを見ている。

「ちょっとした旅行よ」

かの女の視線がおれのなかで膨張した。子供を咎める母のようにかの女はおれのことを見抜いていたんだ。後ろ手に縛られ、おれはそのまま空港ちかくのホテルに連れられた。中埠頭のちかくだ。室は「ハーバースイート」とあった。なかなか贅を尽くしたお迎えだった。しかし、そこには先客がいた。かれこそはファルーク・アリーだった。おれは手錠をかけられ、ベッドに縛りつけられた。白人のイギリス人、アジア系、アラブ系、べつべつのルーツの男たちがおれを囲む。アイリスはファルークと一緒にテーブルにかけてこちらを見ている。屈辱を感じた。かの女のなにもかもがうつくしかったからだ。そしてそれがべつの男に注がれていたから。

「助けてくれ。おれはなにも知らない、きみがなぜこんなことをするのかもわからないんだ」

おれは懇願した。

「大人しくしててね」

アジア系がスタンガンをおれの首筋に当てる。金属ボルトを肉体にねじり込まれるような痛みが駈けめぐる。10カウントで電流が止まった。かの女は鞄からスマート・スピーカーをとりだすと、ベッドの脇に置いた。そしてファルークとでていってしまった。そしてそのまま1日が過ぎた。食事のときだけ、室をだされ、レストランで食事があった。アイリスの姿はない。室に帰るとファルークが待ち構えていた。男ふたりがおれを椅子に縛りつける。大男はおれの貌を張り飛ばした。椅子のまま引き倒され、おれは頭を打ってしまった。それでも悲鳴すら上げられなかった。男ふたりが椅子をもどした。

「間男めが。――でも、きみはしょせんアイリスの精神的な玩具（おもちゃ）に過ぎない。あの大量のメール、おれはぜんぶ読んだ。なかなかの詩人のようだが、ものごとを見抜けないものは死ぬしかない。きみには人質として散ってもらう。生きて帰れるとはおもうなよ。あしたまで待って、沖縄まで飛んでもらう」

「かの女はどうしておまえと？」

「おれが実力者だからだ。組織を裏切ってまで大金をつくり、こうして日本にも拠点をつくった。一生、不自由にさせない金がある、いずれ権力が手に入る」

「そんなものは妄想だ」

「おやおや、間男くん、きみに少しでも嫉妬したおれが莫迦だったようだ、まあ、あとは愉しんでくれ」

ファルクールが手を叩いた。スピーカーが反応する。

「始めるのね」アイリスの声だ。

「そうとも、入れ」

入ってきたかの女にファルークはキスをした。そして抱き合い、見せつけるように笑ってみせた。ちくしょう。アイリスはポケットからアイマスクをだしておれにかぶせた。なにも見えなくなる。でも、アイリスの匂いがする。ベッドの軋む音、どうやらふたりともベッドにいるらしい。やがて絡み合う男女のそれが聞えた。けもののように愛し合うふたりの声がする。身動きができない。おれは嫉妬でいっぱいだった。でも、気づく。おれの一部が暑くなっている。ふたりの絶頂の声がして、あとは喘ぎがつづいた。おれは汗で濡れ、気持ちがわるかった。アイマスクが外される。かの女が立っている。平手打ちを

喰らった。

「これでわかってでしょ？」

辞が出ない。

「わたしはファルークを信じてる、愛してるのよ」

かの女は真剣だった。

「わたしたちの邪魔はしないで」

「してない」

「ほんとに？」

「ほんとだ、でもきみはなぜ？」

「わたしが立てた計画だから」

おれはベッドに運ばれてベッドの縁に額がぶつかって血が滲んでいるのに誰も気づかないアイリスは笑っているのか泣いているのか声だけが残っているスピーカーが光っているファルークの手が動くおれの手は動かない椅子が軋む音が耳の奥に残っている痛みはもう痛みじゃないただの記号だおれは記号になったアイリスの視線が記号を読むファルークが言うおれは聞くおれは聞かないおれはおれじゃないふたりともでていったなにも知らないふりをするできない言葉が硬直する時間がまだない起き上がれない針がぶつかってはじめるこんなものはきっと事実なんかじゃない

食卓をめぐるダンス

＊

警報がつづくテレビ画面のすみっこでぼくは歩き疲れた自身をなぐさめようとした
だれかが鉈を抱えてこちらに来ないものかと、ずっと不安に怯えながら
枝を踏む音がどこからかしているのにだれも気づかないふりで過ぎる
死んだはずの人間と、婚姻を果たす男は夜を信じない
冥府とこの世界を繋ぐ橋をマディソンと名づけながら、
太い血管のような存りようでぼくの眼を奪おうと、
隣人たちが裸体を脱いで待機中である
どうしたものか、ぼくのなかでかれらが涸れた河みたいに人生を横切っている
だれともつかない呼び声がハロー、ハロー、と片言を囁くのはなぜか
その声にぼくはレイモンド・カーヴァーの子供たちと名づける

＊

だから、どうか、もうこちらには来ないでよ、
アルコールで痒い頭を掻き毟って、
酒場通りを突っ切ってくれ
中年時代を色取るはずだった、さまざまな技法を忘れて、
たったいまアンプの電源を入れたんだ
果てしない初恋の地獄、愛の地獄をもう受け入れまいとして、
ぼくはかの女を世界から削除して、
意味を失った言語から文字を差し引いたんだ
けっきょくきみが知るかぎりに於いてぼくは終わってしまった大人で、
この場所には夢も望みも、温かい繋がりもない
人生の速度はおもったほど、速い
長い眠りのようで短い覚醒に過ぎない
やがて寝台特急の幻影のなか、
なにもかもが消えてしまい、
ぼくはまたしても、
朝食を忘れる。

＊

冬の夜のマントなかで男が通りを過ぎてしまうのは父の幻だろうか
もはや交歓のないおもいでの在処をぼくは殺戮して時間を潰した
道の端に坐って莨を吸う老人たちがガードレールを喰む
ラジオがぼくに語りかけ、バナナが人知れず腐れる
黄色いヤッケのランナーがひとり車間を縫って、
未明の海岸まで走るさまは'90年代の映像だ
しかもその画質にはの香りがして、
多くの孤立者を酩酊させてしまう
ぼくは巨大な陽物となって新神戸駅へ突入したい
これまで生きた証、ここまでやってこれたことをたっぷり憎みたいからだ
ダイヤとダイヤが交差する、――谷上駅からカウントされた爆撃予告、
そしてポンヌフと名づけられた電話を携帯して歩くひとびとに幸福を与えたい
まちがっても自身の地図にない過古をふり返ったりしなくて済むように罰したい

公衆電話が鳴る丘で、ぼくは蜥蜴の気分で呼吸を整える
引用された意味と文脈がすれちがったところから、
ハム・エッグ・トーストをつくる方法がわかったから、
もはや田村隆一『緑の思想』をたずさえて歩く必要はない
ベーコンを剥奪されたフランシスの頭上をずっと泳いでゆくんだ
だれともつかない呼び声がビコーズ、ビコーズ、と囁くのはなぜか
たぶん——ときみはいう、——ここが世界で最初の12月だからさって。
号令と大礼服が支給された町で、夜長姫が毎日殺されるぼくの世界じゃあ、
もはや、きみとぼくでしか、この自由を確かなものにはできない
だって、——とぼくがいう、——ここが世界で最後の12月だからって。
真夜中、運ばれたラジオが役所で自裁したとヘッドラインの速報が告げる
ああ、この情景こそがぼくに与えられた幸福なんだ
おお、この迷信こそがぼくに決定づけられた罰なんだ
遠い中心街で、まっすぐにきみと見た、
ぼくがきみと出会うまでの回路を。
その地平が光りだす、あの恍惚のすべてを

ぼくらは見つめる、なにもかも信じようと
なにもかも受け止めようと。

*

ただいまアリゾナ州トゥーソンにてキャデラックの卵巣から電波を受信しました
だれかが鉈を抱えてこちらに来ないものかと、ずっと不安に怯えながら
これまでの愚かな行い、アルコールに起因する問題行動の夥しさで、
ずっと、ずっとナースコールを鳴らしている
ぼくはいつも嘔きそうなんだ
遠くの友人たち、そのだれもがぼくを変におもうだろう
ぼくが狂ったっておもうにちがいない
でも、ぼくはこの暑い列車でずっとアメリカを待っている
次発の地下鉄へ乗って、17系統のバスを待つ
囚人たちのイカしたリズムでタンゴを踊る、警笛を持ったベースマンと一緒に
ぼくの出生日時と、ぼくの死亡日時を繋いでメビウスの輪にしたい

銀河と渾名された車で、トラックメイカーたちの麦畑を侵したい
タジョウマルという猫をつれてテレビ画面を登りたい
知らない土地で知らない駅を探すように
きみはぼくの内奥でさまよう
大丈夫、ぼくが手を握っているから。
どんな迷妄もどんな虚構も、
敵じゃないさ
いつものように笑い澄まして、
郷愁に充ちた道を破壊する愉楽をつくりあげる
雨期のような姿で歩くきみを7月のようなぼくが追いかける
洞(うろ)を叩くレゲエが、フランス国歌を唱うなか、
ぼくはきみと、君が代のリズムで、
ブルーズを奏でたい
いまこそ。

＊

テレビ画面のすみっこでぼくは警笛を聴いていたのは午前2時も半ばだった
トラックがスタックして鉈が投げだされるまで不安に襲われていた
だれかが枝を踏む、その音にだれも気づかないまま過ぎる
死んだ人間の婚姻をきみは信じない
マディソンが焼け落ちたあたりで、
ぼくの眼を奪おうときみが待つ
隣人はまだ待機中である
それもいい、――ぼくのなかでみんな水のないプールみたいに人生を諦めている
だれともつかない呼び声がアデュー、アデューと叫ぶのは儀式だ
その声にぼくはカシアス・クレイの兄弟たちと名づける
やがてふりかぶった拳がクロス・カウンターを決めるとき、
はじめてぼくはきみの顔に気づく
きみはぼくだった
暗闇は夜だった
音楽は世界だった

7番めの月が落ちるとき、
ぼくときみとの青果物のなかの忘れられたアボガドが放たれ、
だれもいない公園の真ん中で、名づけられない怪物とともに眠ったんだ
滲んだピンクがつづく裏階段でドロップを嘔きだして、
ペーヴメントに斃れた
だれかがぼくの躰をひきずってゆく
さようなら、ぼくの愛しかったひとたち
蒐集して来たレコードのジャケットたち
マゼンダからブルー・ヴェルヴェットへと至る場面で
死んだ鳩のようなぼくは長いお別れとともに
またもや夕食を忘れている。

＊

＊

神戸空港を飛び立った。窓から見下ろす海は固いプラスティックのように見えた。人生はじめてのフライトがまさかこうんなかたちで実現するとはおもわなかった。約2時間の旅路。それはうつくしくなかった。両側には男たちがいて、おれを監視している。かの女たちはべつの席でふたりきりだ。でも、ほんとうにファルークのことをかの女は愛しているのか。かの女のように賢い女が犯罪者なんかとつき合うのかがわからない。那覇空港からわれわれは別行動をとった。またもかの女と一緒だというのに心は晴れなかった。もしかしたらほんとうに殺されるかも知れない。

膚に貼りつくような陽光が乾いた空気のなかで輝いている。ホテルにチェックインしてから、おれとアイリスはかりそめの自由のなかにいた。ファルークと男たちはもう作戦を開始している頃だ。人生、初めての沖縄。那覇の町をおれたちは巡った。といっても主要な観光地には興味がなかった。せいぜい牧志駅から国際通り商店街に入って、店々を物色していただけだった。テレビに映る沖縄は基地と海と民謡のイメージしかなかった。那覇はとにかく南国だ。椰子の並木が象徴的だった。日米関係の極点といえるような基地問題はずっとくすぶっている印象があったが、最近では県民の関心も経済へと傾いているとどっかで聞いた。基地反対派の左翼が支持を失っているとも。そしてかれらは先鋭化しているとも。中核派や革マル派やなんかも噛んでいると。——しかし、そんなことはどうでもよかった。おれは傍観者だ。おれはアイリスといられるのだから。かの女の存在あればほかのことなんかまるで意味がない。本気だ。町の賑やかさがおれを支えていた。

「よお」

ふり返ってみればリーだった。カメラ片手にこっちへ歩いて来る。ビラールの話を懐いだした。やつはほんとうに記者やスパイなのか。アイリスは怪訝そうにかれを見た。

「どうしたの、こんなところで」

「ちょっと遊びに来たんだ。友だちがシェアハウスをやってるんで誘われたんだよ」

ちょっとしたバカンスのようだ。

「ふーん」

アイリスが気のない返事をした。

「ところできみたち、どこに泊まってるの？」

アイリスはホテルを教えた。おれたちは夕方、ホテルに帰った。レストランで晩餐をとった。海鮮料理をたらふく喰った。人質もわるかない。このままずっとアイリスの人質でいたい。食事を終えて室に帰ろうとしたときだった。リーが現れ、アイリスにいった。

「森夫と話があるんだ」

「なんの話？」

かの女はかげのある目つきで答えた。

「ちょっとしたことさ」

アイリスがおれを見る。
「ねえ、リーと話がしたい？」
おれはどうだってよかった。
「かれが望むんならね」
「わかった、でも早く帰って来てね」
おれはリーに着いていった。ロビーでリーが切りだした。
「おれはジャーナリストなんだ。ずっとアイリスを追いかけて来た。かの女はビラールの兄とできてる。ファルークはあしたの麻薬市場を襲撃して金を奪うつもりだ。いまならおれはあんたを助けられる。さあ、いこう」
おれは告白された事実にまっこうから反発した。やつはずっとおれを瞞していたからだ。これまでの交友がうそっぱちだったと認めるのが怖かった。
「いやだ、おれは残る」
呆れたようなリーの貌に諦念の色があった。おれたちのあいだにいままであったことがなんの意味も成さないと気づかされる。いったい、どれだけやりとりをしたかをおもえば悲しかった。でも、いま立場がちがいすぎる。これ以上、なんの融和も見いだせない。やつがいままでずっとおれを瞞し、おれのアイリスを狙っていたとおもうと反吐がでそうだ。
「そこまでアイリスに惚れたのか。莫迦か、あんたは」
おれはくり返した。

「おれは残るっていったんだ」

リーは背中を見せた。おれたちの友人関係も終わりだ。いままのすべてのやりとり、交流がペラいうそみたいだった。

「……好きにしなよ」

リーはホテルをでていった。おれは室に帰った。アイリスが待っていた。テーブルの上に注射器と薬液が用意されていた。

――遅かったのね――とかの女がいった。そしてベッドで横になるように命令した。

「ちょっと痛いかも知れない」

注射器に針をつけながらいった。おれはされるがままに注射を受けた。――「これは幻覚剤。死にはしないから安心して」。しばらくして時間と空間の感覚がおかしくなっていった鈍麻した頭でものを考えようとする一切が空となり尚且つ充たされている宇宙的ビジョン惑星間を旅しているような気分脈拍の速さ正体不明の高揚感が伴うかの女の声がおれに囁くそのままじっとしているのそしたらなにもかも赦せるようになるわたしのことだってファルークのことだってあしたの夕方まで薬は持続するそれまであなたには宇宙をさまよっていて欲しいのさあ素直になるのよそしてあなたは殻を突き破るのよ

*

気がついたとき、おれはハイウェイを走るタクシーの坐席に沈んでいた。空港へとつづく道を走っている。脳漿が揺れるような酩酊感は、どうにかなっていた。窓のそとを見た。かの女も一緒だ。当然。かの女がいない世界なんて、いまは考え

られない。でも、少しアパートが懐かしくなった。もう2度ともどれそうにないからだ。

タクシーが一般航空ターミナル（ＧＡＴ）の脇で止まる。降りてなかに入る。セキュリティゲートへとむかう。カウンターでそれぞれのパスを見せた。おれはビジターパス、かの女はランプパス。係員がそれをスキャンし、身元確認をする。手荷物をベルトコンベアに載せ、Ｘ線検査装置を通す。金属探知機のゲートをくぐるとき、ポケットの小銭や鍵をトレイにだすように指示され、ボディチェックで軽く腕を広げて立った。液体類の制限や危険物の確認もあったが、なんの問題もなかった。ゲートを抜けると、陽炎の立つ一般航空用エプロンが広がっていた。そこには一機のセスナが、沈黙する金属の獣のように鎮座している。飛行機はアイリスが手配した個人所有のものだ。エプロンでかの女が立ち止まった。おれには止まっている飛行機が鳥の神のように見えた。どうも地上と空との関係が曖昧だ。じぶんの躰が浮遊しそうでしない。おれは迷わず、セスナに呪いをかけようとしたものの、かの女が制止する。

「ここでひとを待つの」

「トルコのマッチョマンを？」

かの女が笑った。

「ところで森夫、あなたパスのちがいがわかってるの？」

かの女がおれの上着のポケットを指す。おれはおもわずパスに触れた。ラミネートされたカードの角が、指先に刺さるように冷たい。生憎ちがいを識らない。ふたりの男が近づいて来る。大きなスーツケースを持っていた。現ナマが入っているのだろう。麻薬市場はいったいどんなものだったのか。いったい、その場しのぎの快楽にいくらの値がついたのか、気にな

るところではあるが、おれに関係のない金だ。ファルークがアイリスに手をふった。

「アイリス、おれはやったんだ」

「ジョイスはどうしたの？」

「やつなら死んだよ」

整備士たちが機体を点検する。ひとりが機体の腹を叩いた。あたりにはケロシンの刺激臭が立ち込め、無線のノイズが鼓膜を苛立たせる。そのとき、コンテナの影からひとりの男が滑りだしてきた。男はなにもいわず、近寄って来る。

「兄さん、もう終わりだよ」

ビラールの声だった。

「一緒に帰ろう、兄さん」

「腑抜けに用はない」

ファルークが冷たく云い放ち、もうひとりの男にスーツケースを機内へ運ぶよう促した。そして、鋭く叫んだ。「警備員（セキュリティ）！」。待機していた空港警備員たちが、一斉にビラールを組み伏せた。取り押さえられたかれのポケットから、小さなプラスチックの塊りが転げ落ちる。３Ｄプリンターで作られたような、玩具同然のシングルショットのピストルだ。それでも、エプロンには緊張が走った。だれもが息を潜める。ビラールは抵抗しない。ファルークは乗り込む。警備員たちが無線で応援を呼び、かれを包囲したままターミナルビルのほうへと引きずっていく。アイリスがタラップに足をかけた。おれも着いていく。そのとき、かの女がふり返った。かの女は頬笑んだ。なんだか悲しそうだ。そんな貌しないでくれよ、アイリス。おれの心

がひさびさに痛い。一瞬悲鳴すらあげそうになりながらかの女の顔を見つめた。

「あなたの役目は終わったの」

「え？」

おれには解せなかった。これほど一緒にいたのに。これほど時間を共有したのに。いまさらおれを置き去りにするのか。おれたちの目的地を知っているのはアイリスだけじゃないのか。滑走路が陽炎でゆらいだ。おれは抗った。本気だった。なにかも棄ててかの女と一緒になりたかった。

「おれもいくよ、――おれを連れてけよ！」

アイリスはなにもいわず、スカーフを解く。そしてそれをおれの足許に落とした。絹の布が、無機質なアスファルトの上に花弁のように舞い落ちる。おれは拾いあげた。セスナのエンジン音が轟く。おれはあとずさりしながら、かの女になにか伝えようとした。伝えなければならなかった。しかし、もうどうにもできない。辞がでない。離陸体勢に入った機体をただ眺めていた。エンジンが始動し、凄まじい風圧がおれをうしろへと押しやった。なにかを伝えなければならない。しかし、喉は熱気に焼かれ、声はかき消された。ゆっくりと機体が動きだす。窓越しにアイリスの背中だけが見える。美しかった。おれはただ、右手にビジターパスを、左手に彼女のスカーフを握りしめ、遠ざかっていく金属の塊りを眺めていた。うしろでは、警備員たちがビラールの身体をアスファルトに押しつけている。

やがてセスナは熱気と重力をふり切り、地上を去っていく。その一瞬だった。視界の端で、金属的な閃光が尾を引く。小さな物体が機体にぶつかった。おそらくは対空砲弾か、あるいはドローンの類だろう。機体が傾き、左主翼の付け根から炎

が吹きだす。そして爆発は遅れてやってきた。機体が激しく身悶えし、アルミ合金の皮膚を引き裂く。おれはなにも云えず、ただ震えている。セスナの破片が地表に到達するまでのおよそ19秒のあいだ、おれはスカーフを首に巻いて叫んだ。おれはまだアイリスのものだ！――笑いが零れた。笑いながら、泣きながらあたりを走り回った。そこへリーが駆け寄ってくるが、おれの狂乱は止まらない。アイリス！　アイリス！と叫びつづける。その名を叫ぶたびに、おれの肺胞は熱い空気で満たされていく。涙が頬を伝い、視界を歪めるなか、おれは炎の破片が降り注ぐ滑走路を走り回った。ほどなくして、世界という名の制度が押し寄せてきた。米軍のハンヴィーが砂塵を巻き上げ、パトカーのサイレンが重なり、マスコミのヘリが空を覆う。レンズの列が、地に伏したおれたちを事件として冷たく切り取っていく。もうなにも要らない。アイリスがいないのであれば、かの女が生きていないのはわかっていたから。すべてが世界線の午後の出来事だ。こんなにも素晴らしい気分ははじめてかも知れない。突如、制服を着た男たちが背後からおれの頭を掴み、アスファルトへ叩きつけた。鼻腔を突く油の匂いと、冷たい地面の感触。飛び散った火花が星のようにきれいだった。だが、痛みとともに、その法悦は急速に色褪せていく。そのとき、おれを支配したのは底知れない怒りだった。死んでもよかった。いや、死なせて欲しかった。おれはかの女の、たったひとりの「人質」なのだから。

　かの女の笑みがなんども脳髄をはためいた。閃いた。記憶にあるすべてのかの女がおれにむかって別れを告げている。それでもおれは諦めたくなった。もはや、できることはないとわかっていても。リーもビラールもおれも、それぞれのパトカーへ押し込まれる。車窓を流れる景色は、もはや意味を成さない。遠ざかる風景。緑色の空が夕刻を示している。またひとりおれがおれでないものに変わってゆく。それを止めることはできそうもない。やがてパトカーは長い渋滞に巻き込まれた。

たぶん、全便欠航で引き返す車が多いのだろう。でも、おれにとってはどうでもよかった。もうなにもかも。じぶんの生死すらもかなぐり棄ててしまいたかった。だが、どこまでいってもおれはおれで生きることも、書くこともやめられそうにない。なにかがおれを突き動かして、ここまで運んで来た。その悲運に涙するひまもないのはわかっている。ただ、次の一行を探すための、苦しい静寂がつづいていた。

*

離別

わたしはアパートの浴室を掃除している
エディスというなまえに憶えはない
それでもかの女の名残、そして部分的な懐かしさ
あるいは去っていったものについての考古学を感じさせる
舟の軌跡を奪い去っていく未明の波
この患いを遠ざける、虚構なんてない
それが事実、どこまでも事実

秋のサンフェルナンド・バレーで女優が殺された
映画のなかで女優が殺された
あの女優はかの女にそっくりだった
ふしだらでも澄み切っていて、

初出『ポエトリー・マーケット』誌 '68年10月号

男たちを気にもとめない
そして地位もないままに引退した

アポロ・ストリートを進み、
二番目の酒場に入る
ニューキャッスルを頼んでしばらく窓を眺めていた
かの女の話したことをぜんぶ懐いだそうとした
なにしろ、四年のあいだだったから
それは骨が折れた
窓のむこうからだれかが覗き込む
それはまちがいなく出逢ったときのふたりで
わたしはおもわず、手をふってしまっていたんだ

＊

リーが室に上がって来た。ノックもなしにだ。かれは勝手にスツールをひっぱりだして坐ると、おれを見ながら憐れみを示した。よせよ、そんなのっておもった。しばらく辞をだしあぐねていたものの、懐いだしたように喋りだす。

「きみには感謝してる。おれの記事をよりよいものにしてくれて。ビラール・アリーは拘置所に移された。いまだに組織については口を噤み、家族の話ばかり、兄のことばかり警察にも弁護士にも話しているそうだ。いっぽう米軍のやり方は知ってのとおり、日本政府の追認で片がつくだろう。もちろん、いままでにない超法規的処置だ。民間機へのドローン攻撃と殺害行為……」

そんな話はどうだってよかった。

「おれが詩人だったのはむかしのことだ。きみの詩はたしかに凄い。でも、なんの意味がある？　三浦がおれたちを引き合わせたときにはすでにイギリスの女はわれわれにマークされていた」

だからどうだっていうんだ？

「きみはじぶんを責めるかも知れない。でも、そんな必要はない。かの女がいなくなったことで、かの女との関係は永遠のものになったからだ――わかるか？」

わかるものか。

「ちなみにいまもアイリス・モローの遺体だけは発見されていない。かの女の墓はどこにもない」

おれはずっとなにもいわなかった。眼も合わせなかった。かれの足許をなんとなく眺めていただけだ。やがて諦めたようにリー・ケスラー記者はおれの室をあとにした。事件から2ヶ月半、ほんとうに慌ただしい毎日だった。おれは机のわきか

らアイリスのスカーフを取った。保存袋に入れていつも眺めている。かの女の香水がなんだったのか、銘柄が知りたい。おれはそれを夜まで見つめていた。やっぱりローズマリーの香水だとおもう。

20時になって、三浦さんから電話があった。まるで別の世界の人間のようにその声は聞えた。かれは事実というものに興味を持っていた。熱量があった。おれはあらかた説明した。できるだけアイリスのことを避けて話した。かの女をおれだけの秘密にしてしまいたかったから。

「で、楢崎さんはいま大丈夫なんですか?」

「大丈夫って?」

「いやぁ、身柄とか、精神的影響とか?」

「なにもないです。われわれはけっきょく仮象の世界に生かされてるだけかも知れませんね」

「え? カショーってなんすか?」

「識りません」

窓を見ると、路上から光りがパチパチと点滅している。地上のパッシング・ライトがずっと明滅していた。おれはそれがアイリスの再来のようだとおもった。電話を置いて、地階に降りる。停まっていたのは介護タクシーで、太った老女が車椅子で難儀している。なんてこともない光景だった。あのうつくしいアイリスもいずれは年老いていただろう。じぶんが終ぞ獲られなかったものを悲しみながら、すぐに室にもどったら電話は切れていて、そしていまはもう電話をする相手なんか、だれもおもい浮かばなくて、おれは膝を折って、しばらく泣きじゃくった。しかし、それもたった数十秒の出来事で、おれ

はさっさと椅子にかけると、この物語を書くべく、その題名を『離郷者たちと』とした。でも、これじゃ古臭い。ヘミングウェイみたいだ。だから（アイリス、リー、そしてマイケル）とつけ加えた。なんとなくサリンジャーだ。これがいい。そうおもって、おれは物語の一部となったんだ。

*

ディキンス・ハーを読解する

＊

観察という行為がどうしたものか癖になっていた。物心ついたときにはそうだった。たぶん、両親の仲がよくなかったからだ。いつも聞き耳を立てて、ふたりの動向を探っていた。おれがいまのおれになったのはそのせいもある。まちがいなくある。父が母を怒鳴りつける声を裏庭から聞いているおれ――子供の心をそのままそっくり剔りとってしまうような声をおれは毎日のように聞いたものだ。そしてその声はやがておれにも浴びせられた。純真さのかけらをすべて奪い去ってしまうような父の暴虐におれはもうひとりのおれを置くことで耐えた。観察者としてのおれ、被観察者としてのおれだ。おれにはどうにもできなかった。だからおれは視るという行為によって、自我を維持していたのだ。それは父や母から離れたいまもつづいている。おれに植えつけられた咎のようなものだ。どうしたものか、脳裏から離れない幻影のような実家の姿。そんなものをおもい描くことの愚劣さをいま味わっている。

真夜中だった。ディキンス・ハーの『血に飢えたブロンド』という小説を紹介していた。いかにもアメリカ中西部の町並み。夏の臭いの残る裏のポーチでだった。青草が激しく風になびく。集まった3人の若者はそれぞれメモをとっている。おれにはどうだっていいことだ。話が終わってひとりの少女がおれに訊く。「これって先生の願望なのですか？」って英語でいう。「あなたもブロンドに殺されたいとおもっているんですね」って英語でいう。その瞬間、おれは現実に引き戻された。ここはアメリカではない。裏のポーチでもない。雑居ビルの一室だった。そしていまは秋だ。

ベッドのわきで友人の滝田が眠っていた。時計を見ると6時をまわっている。おれは足で、やつを起こした。やつは少しだだをこねてから起きた。おれも起き上がって吐息した。『血に飢えたブロンド』という小説は読んだことがない。ディキンス・ハーというなまえにも憶えがなかった。いったい、おれはどうしちまったんだろう。朝食の支度をした。日本式の朝食をだ。カップ蕎麦に握り飯を添えた。滝田は落ち着かない様子で身体中を掻いている。虫でも湧いているのかも知れない。その動作が終わったら、嚔(くしゃみ)をした。

「居候生活はやめたらどうだ?」

おれはやつに云った。もう3日ものあいだ、やつは居坐っていて、おれとしても限界だった。

「まだつづけるよ」

やつが肯く。なんの反省もない顔でおれのほうを見ている。少し苛立ってしまった。

「まあ、ほかの人間の室でな」

おれは水を差した。これでいいのだ。

「わかった、わかったよ!」

やつは首を大きくふって応えた。おれはひとりで朝餉を喰った。やつはパンを買いにでかけた。事務所で眠るのは気分がわるい。きょうこそ仕事、——探偵の仕事だ。ブロンドのことは忘れよう。滝田がもどってきた。わたしはやつの顔をしばらく見つめた。おれは尋ねた。

「おまえの女はどうしてる?」

「旅行さ。それでおれを追いだしたんだ」

おれにはどうだってよかった。緑茶の入ったカップをしばらく弄んだ。ほんとにどうだっていいことなのに頭を刺激した。

『血に飢えたブロンド』――いかにもパルプな題名だ。友人の本職はドラマー、おれは独立したての探偵だった。相棒が新しい仕事をくれる予定だった。まあ、相棒というよりも仲介業者だ。どこよりも腐った仕事をくれる。おれが断れば、もっとゲスなやろうが引き受けるだけだ。

「宿賃なら払うよ、もう一晩泊めてくれ」

「きょうから新しい仕事なんだよ。すまんな」

「おまえにはもう頼まねえよ」

滝田はパンを噛りながらでていった。どうだっていい。あの少女のいったことが、いまだに頭のなかを転がっている。べつにブロンドにまつわる願望なんかないのだが。かの女のような少女とインモラルな関係を結びたいわけでもない。いまは仕事に集中すべきだ。10時を過ぎて電話が鳴った。相手が云った。

「予定よりちょっと早いんだがね、動いてもらいたいんだ」

「ちょうど手が空いてるんだ、話を始めてくれ」

「未成年の誘拐事案だよ。ところが警察は動いてない。家族によればかかりつけの精神科医となにかあったらしいが。それよりもその未成年は庭瀬不二子の孫なんだよ」

ニワセとはだれだろうと考える時間は必要なかった。以前の職場で出会った依頼人のひとりだ。雇われ探偵、最後の仕事

だった。忘れるはずもない。かの女は息子の前妻に孫を盗られ、そして息子は余命幾ばくもなかった。おれは前妻を説得して、なんとか息子と孫を引き合わせたのだ。しかし、それだってもう半年もまえだ。それに息子の庭瀬清彦が死んだのは4ヶ月もまえである。おれは庭瀬不二子との初対面を懐いだしていた。

＊

4年勤めた興信所をやめた。笹山興信所の待遇に問題がなかったわけじゃない。でも仕事は穏やかなのものばかりだった。べつに危ない案件もない。スリルとサスペンスにはいちばん遠い場所だった。べつに厭になってやめたわけじゃない。それはまたべつの問題からだ。はじめて庭瀬不二子に会ったのは半年まえの相談室だった。かの女は息子の代理だと云った。60過ぎの老婦人で小柄なひとだった。心労でやつれた躰をかばうようにして相談室に入って来た。

「息子には嫁がおりましたが、10年もまえに子供を連れて家もでまして、それ以来会えておりません。一方的に離婚届をだされ、行方知れずです。わたしも息子も孫の顔だけはとおもっております。探して頂きたいのです」

「養育費はどうなっていますか？」

（意味のある質問にはどうしてか、おれにはおもえない）とおもった。

「10年まえ、息子を孫に会わせる条件として一括払いしましたが、当時としても法外な金額だったとおもいます」

（それでも金があるということだ）とおもった。

「息子さんが来られないはどういった理由ですか？」

「清彦は、もう4年ものあいだ癌で苦しんでいます。時間がないんです」（闘病するだけの金はあるってわけだ）とおもった。けっきょく、この案件は前妻の要求を呑むことで片づいたものの、庭瀬氏はまたも金をふんだくられることとなった。まあ、死に際だったし、それもしょうがないという気にはなる。しかし、いまだに共同親権が叶わないこの国の悲劇といったところだろう。それくらい前妻の要求はえげつないものだったし、庭瀬氏が負担した依頼料や弁護士費用を考えると、病の身で会えない息子のことを考えるのは躰を切られるように痛かったにちがいなかった。おれが笹山を辞めたのはそれからすぐあとだ。ある夜、所長が帰りの運転をおれに頼んだ。いつもならひとりでさっさと帰ってしまうのに。

「庭瀬さんの件、ようやく片づきますね」

おれにはもうどうでもいいようにおもえた。所長はうしろに撫でつけた髪を触りながら、ＰＣ画面を見ていた。《被告人側の証人が後半途中に死去》と書かれてあった。所長は画面を見つめながら云った。

「あの元嫁、そうとうふんだくったね」

「金を積まなきゃ子供に会えないなんて、まったく不憫ですよ」

おれはおもったとおりに云った。うそなんか吐く必要もない。

「まあ、おれは親にならずに老いてくだけだからね、うらやましいところもあるさ」

おれはなんだか気分がわるくなった。

「所長はセンチメンタルなんですよ。こっちの世代はもっと枯れてる」

所長も口を尖らせた。

「よくいうね。きみはいまでも昔の初恋が忘れられないんじゃなかったっけ？」

所長秘書の泉敦子が身支度をしながらいう。好い匂いのする、好い女ではあった。ほとんど無表情でなにを考えているのかがわからないのを除けば気になるところはなかった。束ねた髪を揺らしながら書類を片づけている。

「もう時間ですよ」

かの女はいつも時間にきびしかった。そして歩くのが早かった。おれが階下へ行きかけたとき、所長がふり向いた。不気味に頬笑んでいた。心の準備をおれはした。

「ちょっと待ってよ。きょう野崎くん、きょう車でしょ？　乗せてってくれよ」

おれは一瞬辞がつまった。

「……いやなの？」

おれたちは敦子につづいて地階へ降りた。かの女は駅へ。おれたちは駐車場へ。車に入ったとたん、所長は莨に火をつけた。こっちが禁煙だと告げるまえに。なんとも抜け目ない男だった。おれはエンジンをかけて発進した。

「さっきもいったようにおれはうらやましいわけよ。病気とはいえ、子宝があってね。しかもようやく会えた」

どうしてこうもあんな案件にこだわっているのかがわからず、気味がわるくなった。おれはそれをふり払おうとして会話をつづけた。

「それは感傷ですよ。誰だってたまにはそんな気分にもなりますよ」

所長は黙って烟を嘔いた。
「それがちがうんだなあ」
「え？」
鋭い目つきでフロントガラスを見つめながらかれは語りだした。
「考えてもみろよ、おれたちだってだれかの子供だぜ？ それが大人になったのにじぶんたちの種をあとに残すこともできないんだ。父や母が成し遂げたことをなにもしてやれないんだよ。鰥夫暮らしでさ、じぶんだけで好いなんて思い上がりさ」
おれは苛立ちを憶えた。
「で、なにがいいたいんですか？」
「おれたちも努力が必要だってことさ」
おれは片手をふって、所長の嘔いた烟を払った。
「一緒にしないでくださいよ。それに所長には敦子さんがいるじゃないですか？」
所長とかの女とは長い愛人生活がつづいていた。所長に家族らしい家族はいないのだが、どうしたものか敦子とも一緒にはなりきれない、なにかがあるようだった。でも、敦子だってそれなりの美人で、べつにそばにいるのなら倖せだろうと、おれはぼんりや考えていたところだった。所長は莨を消して携帯灰皿に入れた。
「勘違いするな。かの女とはプラトニックだ。手をだしちゃいない。それに子種についちゃ、手遅れだ」
気まずくなった。話をそらそうと地図を見た。なんだか無意味な幾何学模様のようにそのＧＰＳのナビが見えた。

「――染井墓地のほうでしたね？」

「ああ」

気のない返答に次の辞を待った。

「考えてくれないか、野崎。敦子のことだ。一緒になって欲しい」

まったくどうかしているとおもった。でも、かれの表情には濁ったものはなく、いままででいちばん素直に見えた。でも、それがなんとも癪に障った。おれは少し声のトーンをあげて喋った。

「いったいなにをいってるんですか？」

一瞬、所長は黙ったが、表情を硬く冷たくして答えた。

「遺言だよ。おれも癌なんだ。いつまでも働けない。きみがかの女を支えてくれ」

おれはおもわず尋ねた。

「彼女の意思は？」（それを知ったとしてどうにもならないのだが）とおもった。

「もう託した、彼女もその気だよ」（勝手に決めやがって）とおもった。

おれは黙り込んだ。敦子は好い女だ。しかし同僚としてつき合うことと男女とではちがう。おれはかの女の女としての顔を知らない。それを知りたいともおもっていない。このままどうやってやりおおせるか、見当もつかなかった。所長はじっとおれを見た。そしてうつむきながら零した。

「きみだってじぶんの事を手遅れだっておもってるかも知れない。でも、きみのこともきみらのことも、おれは巧くつな

げるつもりだ。だから安心してくれ」

おれは車を停めた。もう我慢の限界だった。

「降りてください、――所長」

その夜は深夜から雨だった。おれはひとりの帰途をどうしたものか、ちかばの定食屋でやり過ごし、朝になって帰った。とうぜんのこと、その日の仕事を休むためにだ。電話はぜんぶ無視をした。熱り冷めたころ、辞表をだした。敦子はなにも云わなかった。所長からはひとこと、「おれは待っている」とのことだった。もちろん、そんなことはおれに関係ない。あれからなんどか電話や手紙があったが、おれは応えなかった。死を待つ男にとんだ仕打ちをしたとはおもう。けれども、おれにできることはない。

＊

そんな顛末を引き起こした人物、その身内にまたもかかわるのは躊躇ったが、できるかぎり仕事を撰びたくなかった。広告費、事務所の借り賃で、もう赤字だったからだ。おれは打つべき策をまちがえたのか。人生に無駄玉を打っている場合ではない。おれは相棒から事案の詳細を聞いた。そして依頼人との面談を予定に入れた。軽く話をした。医者と宗教家がやっているという非公式のコミューンに少年は攫われたとあの女が云っていた。清彦の前妻である、奥村杏実だ。そうは云っても警察が介入できないところに探偵が介入できるわけもない。だが、やるかしなかった。おれには食い扶持が要る。午後に

なって面談の時間になった。事務所に現れたのは杏実と夫らしい若い男だった。かの女はおれが笹山の元部下だとわかって、えらく気まずそうにしていた。コミューンの場所は鶴見町相良台、接触できなかったらしい。電話やメールでも事実無根の一点張り、訴訟もちらつかせていたらしい。

「まえの夫が死んでから真一はひどく病んでしまって……」

杏実がいった。無理もないだろう。せっかく会えた父がたった1ヶ月では。

「精神科との繋がりはいつごろから？」

「ほんの2ヶ月まえなんです。そのときは短期入院というかたちをとらせました。ところが家へ帰ったとたん、わたしに暴力を振るうようになってしまい、正直どうしていいか、わかりませんでした」

「書き置きがあったと聞いてますが？」

それを聞いて杏実は鞄から小さな紙片をだした。《内藤先生のところへいく。探す必要はない――真一》とあった。

「警察にもこれを見せました。そしたら自発的な家出で、そのうち帰るだろうと云われました」

「警察からその内藤医師に連絡は？」

「それが教えてくれないんです」

正直、この女の身勝手さには頭に来たが、どうしようもない。これは仕事だ。少年について内藤医師らが親へ報告するよう協力はするといった。

「助けてはくれないんですか？」

「法律に触れるようなことはできませんよ」
「なにをいってるんですか？　これじゃ誘拐じゃないですか？　犯罪ですよ、それをだれも止めないなんて」
醜く捲し立てる杏実をよそに夫のほうはなにも云わない。そもそも種ちがい子供に関心が薄いのかも知れない。
「落ち着いてください。まずは真一くんの安否だけでも確かめましょう」
「わかりましたよ」
面談時間が過ぎてしまった。できることはやるといっておいたが、どこまで可能か。たぶんいまの時点で、おれのところにいったのはバレているだろうし、相棒か、ほかに素性の知られていない人物を潜入させるかを考えた。適任という点ではどれも欠ける。医者に宗教家、――個人事務所で抱えるには大きすぎた。そこでおれは笹山興信所にかけてみることにした。敦子の個人用電話にかけてみる。
「もしもし、泉ですが」
「おれだ、野崎だよ」
「いまごろ何の用件です？」
「手伝って欲しい案件があるんだ」
「ずいぶん都合がいいんですね？」
事情を話した。――わたしにできることはないと云われてしまった。しかし、そのあとだ、――「所長のことで話があるんです。会えますか？」といった。夜7時に約束をとりつけて電話を切った。敦子のことを好きだと云える確信はなかった。

だからといってかの女を傷つけたくはないし、心労もかけたくない。お互いの関係をどうするか、それはふたりともたぶんわかっていないのだとおもった。おれはアールグレイを淹れてしばらく時間を潰した。電話が鳴った。

「こちら自立支援施設『つばさ』の古村と申します。奥村真一さんの件で、きょうお話があったと聞いてるんですが」

コミューンの正体は施設なのか。それにしてもだれから話が洩れたんだ？

「だれから聞いたんです？」

「奥村杏実さんご本人です」

やはりあの女は信用できないとおもった。依頼内容を喋って歩いているのか。

「それで？」

「真一さんはもうじき帰る――手を引いてもらいたいんです」

「お幾らで？」

「常識的なラインですよ」

「ではそのまえに奥村さんに確認をとりましょう」

そう云ったとたん、電話は切れてしまった。それから杏実に電話をかけたがでない。そのまま時間を置いてかけ直してみたが、やはりでない。なんだか不穏だ。簡単なものでも喰おうとおもった。コンビニで蒸し鶏のサンドとブラックコーヒーを買った。事務所で喰って身支度をすると、戸締まりをしてでた。高原通りでタクシーを拾い、敦子の待つ喫茶店へむかった。車内でもなんどか依頼人に電話をかけたものの、でなかった。しかし、たったこれだけのことで警察に電話しても埒が

あかない。とりあえずは敦子との話を片づけるしかなかった。タクシーを降りて、姫井通りを渡って、店に入った。客はだれもいない。超自然的な感覚が襲う。おれにはもうできることがないのかも知れない。そんなことを考えながら、適当な席に坐って、敦子を待った。やがて店員らしい若い女がやって来た。

「ご注文は？」

「アイスティー、以上で」

注文して、ただただ待った。窓のむこうではひとびとが奇妙な顔で去っていく。まるで仮面を剥がされたような顔だ。そのなかに敦子の姿があった。かの女が入って来て、おれのむかいに坐った。翡翠色のセータに黒いスカートを穿いている。短めの髪を揺らしながら云った。

「交換条件よ。あなたはわたしと一緒になるの。だったら手を貸すわ」

「なにをいってるんだ？　笹山さんに脅されてるのか？」

「あなたって鈍感なのね、そんなにも」

かの女は指を組んで、その上に顎を載せた。

「鈍感？」

「そう、他人の覚悟がわかってないのよ」

そんな話をしたいわけじゃなかった。事件を解決したい。そのために敦子の存在が必要だった。かの女に潜入させて、内情を知りたかった。

「もし、おれが同意すれば手伝ってくれるか？」
「もちろんよ」
「笹山さんはどうしてる？」
少しかの女は黙った。云いあぐねているようだったが、口をひらいた。
「ときどき譫妄状態に入るわ。2度の手術のあとだもの」
「そうか……」
湿っぽくなってしまった。
「ところで依頼だけど……」
「その少年を家まで連れ戻すのね」
「そうなるだろうね」
「とりあえず、その内藤医師のクリニックを受診してみる……」
「わるいね」
敦子はさっと顔をあげた。
「約束は守ってね」
おれたちは別れた。アイスティーは来なかった。おれはかの女に発信器を渡した。今後の動きはこっちで読む。そのまま自宅に帰った。そのときは気づかなかった。待ち伏せだった。いきなり後頭部に打撃を受けておれは気を失った。気づいた

ときには病院の拘禁室にいた。全身を縛られ、注射を打たれたあとだった。飲む拘束衣というものを聞いたことがあるが、あれに近い。とにかく感覚も思考も鈍麻して使いものにならない。入ってきた医者がおれにいう。

「手荒なまねをしてすまない、あんたはなにも知らないみたいだ。――だがしばらくここにいてもらう。コミューンの件が片づき次第、解放してやろう。そうそう、敦子さんだってね、なかなか好い女性だ。もっと云えばわたし好みだ。さっき受診に来られた。いまはべつの室で眠っている。わるいようにはしない。しかし、残念ながら真一くんは返せない。それはかれにとってもかれのご両親にとってもよろしくない。だってかれは……」

そのとき強烈な女の悲鳴がした。おれはなにも感じなかった。もしかしたら敦子かも知れない。

「とにかくかれを返すわけにはいかない」

そういうと医者はでていった。重い扉が閉じられておれはひとりきり、灯りの強い室で、監視カメラに見守れながら時間が過ぎるのを待った。敦子には会えなかった。なにかよくないことが起こっているのは理解するが、躰も心も動かない。流動食のようなものを喰わされ、それ以外は格子窓を眺めるしかない。3日が過ぎて、おれはだされることになった。

「泉さんはどこだ?」

医者は顔をほころばせた。

「かの女はさきにでた。安心してくれ」

「ほんとか?」

「ほんとうだ。――そうそうあのあと笹山という男が発信器を頼りにやって来たよ」

「所長が？」

「部下おもいの善い男じゃないか。危険だからまだなかだ」

「かれは癌なんだ、早くだしてくれ」

おれは所長を巻き込んでしまったのを心底後悔した。このままかれが死んでしまったら詫びようもない。もちろん、敦子に合わせる顔もない。

「われわれの系列の病院にまわしてやろう」

「あんたら、いったい何者なんだ？」

意味のない質問だった。

「わたしか？――ただの医者だ」

「あんたが内藤医師か？」

これもそう。

「残念、かれはべつ行動だ」

目隠しをされて車に乗った。1時間は走ったか、降ろされたのは事務所のちかくだった。医者がいった。――余計な詮索はやめたほうがいい。――きみの人生にかかわる。――車が過ぎ去って目隠しを外した。ふざけやがって！――おれは慌てて敦子に電話した。電源を切ってやがる。不安が高まって倒れそうだった。おれはタクシーで自宅に帰った。こんどはなにもない。炭酸水を1本飲んでベッドに倒れた。もう動けそうにない。夜になって敦子の発信器を追跡した。まちがいなく、

相良台にいる。おれは薬でぼやけた頭で、またしてもタクシーに乗った。もうどうなってもかまわない。事件から手を引いてもいい。敦子のことだけでも救えたらいい。だがほんとうにかの女を大事におもえているのかがわからなくなっていた。駐車場へいき、今度はじぶんの車でかけた。この事件が始まってからのことをずっと考えていた。リード線に集る虫のような心で考えつづけた。なんとも心細かったのだ。いまはだれも頼る相手がいない。でかけるまえに相棒にもかけてみたがでなかった。だれもかれもが不在の世界。その途中で笹山所長へかけることも考えたが病人にこの話は重すぎる。不謹慎だとおもってよした。あの男はショックで死んでしまうかも知れない。そうなるとやはり敦子に顔向けができない。おれは目的地までずっと走りつづけた。しかし、まだどこかで薬が効いているらしく、感覚が鈍い。そのとき、ブロンドの女が車窓を通り過ぎた。

＊

窓のむこうは朝だった。エル・トンプソンはまだ温もりの残るベッドをあとにした。始末した男はこれで2人めだ。もうなにを躊躇うこともない。踵を鳴らしてヒールを履き、表通りのカフェまで迷いなく進む。いちばんお気に入りのスカートを穿いて腰を振った。窓際の席でいちゃつく男女がかの女を見あげる。男はもうエルに夢中だ。だって、かの女がいちばんだからだ。白いサマー・ジャケットを着て歩くかの女がなによりも美しかったからだ。だれにも知られないようにかの女を閉じ込めたくなる。所有したくなる。そんな歪な欲望さえも、ささやかなものに見えてしまうくらいにかの女のブロンドは

好戦的な輝きを持っていた。ジェイクとマーシーはカウンターから身を乗りだしている。かれらはつまらない常連の一部だ。店内に入って来たかの女を迎えるのはオーナーのクエンティーン。かの女はゆっくりと席を撰び、そして坐った。静まりかえった店にラジオの音声だけがむなしく流れている。ウェイトレスがやって来る。

「ご注文は？」

「コーヒーとチョコレート・マフィンをお願い」

エルは店の男を見渡した。車を持っている男、金のある男を捜した。

「この席、空いてる？」

見あげると男がいた。わるくない男。わたしにお金をくれて、死体になってくれる男。エルは頬笑んだ。男も表情を崩した。やつもウェイトレスを呼び、バニラコークを注文した。ああ、なんて倖せなんだろう。もう男たちに瞞されることはないのだ。所有されることもないのだとエルはおもった。もはや、じぶんが自由で、そして穢されることのない象徴のようだとおもった。次はこの男から航空旅券を引きだそう、そうおもってエルはハンドバッグのなかから鏡を取りだした。

「どっから来たの？」

「ツインシティーズよ」

「学生？」

「そうでもないの。――いま休学中でね。資格を取ろうとおもってるの」

「へえ、偉いね」

「だれか、ニューヨークに伝のあるひとがいたらいいんだけど」

「おれ、あるよ」

男の顔がパッと明るくなった。この瞬間が快感だった。女を利用しようと企む男をいまエルは捕らえたのだ。蟻地獄のように静かな罠がかの女の心のなかで芽生えた。もはや逃げ道はない。ふたりは食事を終えると、すぐに店をでた。そして男の車で、かれの家にいった。ニューヨークにいったら、どんな人生が待っているだろう。エルは胸を高鳴らせていた。そして今回の獲物からはどれほどの収穫があるのかを、男の仕草や、服の質から読み取ろうとしていた。

＊

けっきょくすぐにコミューンへ行くのは諦めて、1度事務所に帰った。敦子からメールが来ていた。それは真一少年が書いたとされる、日記のようなものが添付されてあった。

ぼくは父さんに会って失望した。あのひとはけっきょくじぶんの遺伝子を確かめたかっただけだからだ。でも、いまさら母さんのことも好きになれない。あのひとはじぶんの都合しか頭にないひとだからだ。奥村のオジさんがいちばん不幸のように見える。だってかれは母さんに利用さ

れているに過ぎないから。でも、ぼくもいままでいろんな口実で、オジさんを利用してきた。内藤先生はぼくを助けるといったのに、ぼくを裏切った。だから、あのひとを殺すためにぼくは斧を磨いでる。

こんな内容ではなにもわからない。おれは少し休むことにして長椅子に横たわった。またも夏の中西部を夢見た。おれと学生たち。「探偵小説での殺人は日常と虚無との三角体系に位置する。これはチャンドラーがハッシュ・ハミルトンへ送った書簡にもある通りで、かれはいう――《われわれの虚無を止揚する効果的装置として殺人は推理小説のなかで輝く。それはあなたがわたしの作品を一瞥し、ニヤリと笑ってみせるようなものだ》とね。これできみらにもわかっただろう?」。またもあの少女がいう、「それって先生の倫理的破綻を隠したいだけですよね?」って。「先生はたぶんいたずらに学生をふりまわして、かげで笑っているんでしょう」って。かの女の口がうるさい。おれはその口をキスで塞いでやる。ほかのふたりが割って入る。そしておれを撲りつけてしまう。それでもおれは少女に執着する。敦子なんかよりもずっと好い娘だ。焦げ臭い臭いがする。おれは眼を醒まして立ちあがった。空焚きのコーヒーマシンが啼いていた。

「やれやれ」(村上春樹のマネをこうまで、露骨にやれる男はこの世にふたりといまい)っておもった。蜷局(とぐろ)を巻いた気鬱さがおれのなかで熱い。とりあえず、コミューンとやらにいってみようとおもった。事務所に鍵をかけて、駐車場からじぶんの車をだした。だれがなにを演じているのかがわからない。奥山杏実は何者か、少年は何者か、内藤という医師はどうか、

病院と自立支援施設はどうか、そしておれ自身は？――と考えてもう意味がないことに気づく。このままコミューンに突っ込むべきか。用意しておいた爆竹を袋からだして上着のポケットにしまった。

コミューンに着いたときには深夜だった。敦子のことは好きだったが、ここまで来るのはあまりに危険で、迂闊なことだった。おれは電話で警察にかけた。いろいろと事情を話したものの信じる者はだれもない。そのとき、施設から悲鳴がした。敦子だとおもった。なぜだかはわからない。おれは爆竹に火をつけてフェンスのむこうに投げた。火花と烟があがって、さらなる悲鳴がした。やがて興奮したやつらがフェンスを登ってこちらにやって来る。おれは物陰に隠れた。入り口から看護人たちが現れる。屈強な男たちだ。かれらと一緒に敦子も現れた。どうしたことだろう。かの女が、かの女らしく見えない。なんだかちがう生きもののようにこちらを見ている。

「でてきなさい！」とかの女が叫んだ。

おれは動かない。施設内の見張り塔からライトが照らされる。それでも動かない。

「でてきなさい！」

またもかの女が叫ぶ。（かんたんに云いやがって）とおもった。おれは茂みのなかを進み、サーチライトを除けた。辺りが静かになるのを待つ。みながみな興奮状態だ。おれは諦めて敦子のところへ駈け寄った。

「敦子さん！」

しかし、かの女の眼のなかにおれはいない。存在がない。おれは肩を殴打され、バランスを崩した。骨が音を発てる。そのまま男たちがおれをなかへと運び入れる。泣き笑いにも似た声がほうぼうでしている。次は足を殴打された。そのまま中

庭に投げだされ、声もでない。敦子は笑った。あの少女のように笑った。ディキンス・ハーの『血に飢えたブロンド』について聞くかの女そのものだ。ディキンス・ハーは'55年にデビューし、'59年に『血に飢えたブロンド』を書いている。黒人青年を次々と襲う白人女の話は当時物議を醸したが、作品のレベル、売り上げともに議論の水準になく、歴史に掻き消された小説だ。おれはかの女に語ったものだ、「この作品のヒロインはエリク・エーカーの戯曲からの影響が見られる」って。「男性を支配しようとする女性が結果的に男性社会によって裁かれるさまがそっくりの構図だ」って。もちろん、こんなことは云ってない。ありもしないことだ。だのに混乱したおれの脳はそんな戯言をずっと嘔いている。どうしたものか、それがとても懐かしい。

「敦子さん！　おれだ！」

かの女はなおもおれを黙殺する。かの女はおれとほんとうに一緒になりたいのか。それとも殺したいのか。そのとき、斧を持った少年がおれのまえに立った。写真見るより、幼い顔だ。奥村真一だ。

「祭りを始めなさい！」

敦子が叫ぶ。群れをなす有象無象がおれを取り囲んだ。うしろから羽交い締めにされ、腕に注射を打たれた。強い熱源を体内に持ったかのような錯覚がする。真一少年が斧を持つ。おれは斧を奪う。そしてそのままだれかの腕にふり下ろした。血飛沫があがる。悲鳴が歓喜に変わる。敦子は笑って、おれの唇を奪った。血に飢えているのはかの女だったのか。おれは口をはなして斧をふりまわした。笑いを見た瞬間、かの女がだれなのか、もうどうでもよくなっていた。おれは興奮していた。そのまま出口へと突進して、車に乗った。発進させた。ライトのなかで踊り狂うゴーゴー族みたいなやつらを除けて走

った。中央公園をくだったところで、突然警察に停められた。血に染まった斧を見られてしまった。おれは降りて警官をふたりとも殺した。どうやってやったのか、いまではわからない。まさしく超自然的な出来事だった。

＊

モーリン・ジャクソンの証言によって、連続殺人が明るみになり、エルが逮捕されたのは日曜日の朝だった。よく晴れたそらを夏鳥が騒ぐなか、シックス・モーテルのドアを警官が訪れた。エルは抵抗しなかった。すべてが運命であるかのようにふるまい、そして静かに頬笑んだ。かの女の写真が公開されると、男たちは口笛を鳴らしたものだ。あれほどすばらしい女が、黒人殺しの犯人だとは！　白人の男にとっては格好の話題だった。「ブロンドの悪魔」はその日のうちに映画界にも飛び火した。かの女をモデルに映画をつくろうという卑しい野心家たちで、ハリウッドはいっぱいだったからである。

「わたしはわたしの所業に悔いはないわ」

エルはそういって宣誓書にサインした。ミネソタの両親はじぶんの娘が悪魔に取り憑かれていたと新聞記者に語った。かの女を知っているもの、全員がかの女が別人に変わったと云った。もちろん死者以外はそれを信じた。エルを表紙に売り上げをあげる雑誌や、ポスターが流行った。かの女は消費物として時代を飾ることになった。エルが拘置所へ移され、一般の面会も赦されると、マスメディアが押し寄せた。かの女は丁寧に対応した。そして故郷の両親にむかって、じぶんはじぶんであり、悪魔憑きではないと答えた。そんななか、黒人活動家は「かの女を死刑するべきだ」と訴えたが、相手にされなか

った。世間はかれらに冷ややかだった。公民権運動を疎ましくおもう輩の一部は活動家たちを攻撃したりもした。けっきょく映画制作も押し切られ、おぞましい題名のもとに多数が公開された。そのなかでも異色だったのはモーリンの視点で描かれた、『悪の瞳』だ。映画の冒頭とラストにモーリン・ジャクソン本人が登場する、セミ・ドキュメンタリー映画なのである。モーリンはエルとの最後の会話について話している。「わたしたち、友だちよね?」と云ったエルに対して、モーリンは「ちがう。もともとが他人よ」と突き返したと語った。しかし、心のなかではモーリンもやはりエルになりたい少女たちのひとりに過ぎなかった。ほかの娘たちとおなじように殺人さえしなければ、どれだけひとを瞞しても気にかけないエルこそが願望そのものだったからだ。

「わたしってもうお終いね」

エルはいつものように頬笑んだ。それ以来モーリンは裁判にも来なかった。エルは第一級殺人で起訴され、詐欺罪で追起訴されたものの、若い年齢、女性であること、相手が風体のわるい黒人たちであったこと、膨大な嘆願書が提出されたことで、大幅に減刑され、懲役15年の実刑となった。当然のこと、白人社会では安堵され、黒人社会では逆鱗に触れた。小規模の衝突があちらこちらであったものの、すぐに鎮圧された。エルは刑務所でも目立った。ほかの女囚たちから眼をつけられるのはあたりまえだった。黒人受刑者と隔離されていたのは幸いだった。だが刑務官たちによってエルは強姦された。そして妊娠し、さらには保釈という結末がついた。かの女がどこにいるのか、どんな暮らしをしてるのかがわからない。新しいなまえと、新しい身分証で、新しい暮らしをしていることだろう。われわれはひとりの人間に対してですら、これほどまでに取り零してしまう。かの女の犯罪がどうして起こったか、どう裁かれるべきだったか、社会がどう動くべきだったのかも

わからないままにかの女を消費物として利用し尽くした。エルはもはや一個人ではない。われわれみんながエルなのだ。われわれがかの女を救済できなかったように、われわれもまたわれわれを救済できない。神話化されたブロンドの象徴に靡く、数え切れない欲望もろとも、われわれもまた地獄へ落ちるべきのだ。さようなら、エル・トンプソン。

＊

おれはこれ以上事態が悪化しないように斧の指紋を拭いて河に投げ棄てた。朝になってアパートに帰った。草臥れた臭いのする室のなかで、燕麦の粥を喰って横になった。蒐集したポルノが死体のように置いてある。もはや破滅だった。ニュースを見る勇気はない。浅い眠りをくり返して午には事務所にむかった。もはや目的がない。事務所にもどると、鍵が開いていた。長椅子に滝田が眠っている。室じゅうが荒らされ、ぐちゃぐちゃだ。おれは滝田を叩き起こした。

「おい、滝田、てめえか！」

「なんだよ、知らねえよ！」

滝田が起き上がった。

「いったい、なにが遭ったんだ？」

「それはこっちが聞きてえよ」

「おまえが来たときはこうだったのか？」

やつは肯いた。そして申し訳なさそうに肩をすくめた。

「鍵だって開けっぱなしだったんだよ。おまえ、怨まれてるのとちがうか？」

「まあな、この稼業だしな」

「そういえば伝言預かってるぜ」

「だれから？」

「おまえの相棒、それと奥村ってひと。――相棒は笹山に連絡しろって云ってる。んで、奥村は連絡くれって云ってた」

なかなかお利口なくそやろうだ。おれはすぐに電話をとった。まずは笹山所長だ。携帯電話にかけたものの、繋がらない。敦子から聞いた病院へかける。するとどうやら内藤の仲間に捕まってからは行方不明のようだった。いったい、なんのための伝言なんだ。次に奥山杏実に電話をかける。こちらは繋がった。

「野崎さん、あなたいったいどこにいたんですか？」

「『つばさ』という施設へ。真一くんの面会に……」（ほんとうのことは云わないほうがいい）とおもった。

「会えたんですか？」

「窓越しに見ただけです」（できるだけ穏便に済ませたい）とおもった。

「それでいつまでかかるんですか？」

「まだわかりません。できるだけ早くとはおもうのですが……」（それができれば苦労しない）とおもった。

電話口では杏実がキイキイとうるさかった。あとは定型文をくり返して切ってしまった。

「おまえ、探偵やめてギター弾けよ」

滝田が云った。おれは以前音楽家だったのを懐いだした。大して巧くもないギタリストだった。探偵2年めまでは週末にふたりで演奏していた。しかし時は流れ、おれは夢から醒めたというわけだ。いまさらやつのひでえドラムに合わせる気にもなれない。昔話に花を添える必要はなかった。おれは財布から金を抜いて、やつに渡した。

「ここは危険だ。どっか行ったほうがいい」

「なに云ってんだよ?」

「おまえもいい加減、大人になれよ。それとも新しいギター弾きを探せ」

「イキナリなんだよ? おれが邪魔だっていうのかよ」

「ああ、邪魔だとも」

しばらく憤然としながら黙っていた滝田だったが、ポケットに手を突っ込むと、背をむけて歩き去っていった。そのままひとこと、――「おまえのギター、好きだったんだけどなあ」と云い残して。おれは首をふりながら椅子にかけた。今回の事件はわからない。もうどうでもいい。だれでもいいから切り取って棄ててくれ。――そんなおもいに駈られていると呼び鈴がなった。でてみると笹山所長だった。息も絶え絶えといった感じだった。

「野崎くん、きみにはほんとうに済まない」

病で痩せこけたかれの姿は見ていてつらかった。いまにも崩れそうな躰でここまで来たのはまるで奇跡のようだった。おれは横になるのを奨めた。かれをここまで痛めつけてしまったものを憎む気分になったが、やはりかれの動きには懐疑的だ。

「きみがやってる案件、内藤という医師が搦んでるそうだね？」
「え？」
「惚けなくていいよ、敦子から聞いてるから。あの男とおれはむかしの友人同士でね。一時やつの助言役でもあったんだ。しかし、例のコミューンを始めてから連絡が途絶えた。それで最近になっても調べてたんだが中国搦みの内職がある」
おれは心なしか声をすぼめた。
「――人身売買？」
所長は大きく肯いた。
「そうとも。でも、ほんとうの拠点がわからない。ともかく臓器のプラントがあるはずだ。そこを叩く必要がある」
桁ちがいの答えにおれは慄いた。とうてい手に負える話ではなくなったからだ。
「でも、それは探偵の仕事ではないでしょう？」（逃げだしたい）っておもった。
所長は首をふった。
「きみの探してる少年、かれに証言させるだけでいいんだ」
「でも、……」（コミューンに最接近する方法なんてあるのか）っておもった。
「きみはおれの弟子のようなものだ。だから動いてくれ。おれはそろそろ病院へもどるよ」
そう云って所長はこっちの返事も聞かずに躰を起こして去ってしまった。取り残されたおれは手札のない状態で立たされた。しかし、ないに等しい力をだして階下へ降りた。そして車をだそうとしたときだ。電話が鳴った。知らない番号からだ。

「はじめまして、医師の内藤です」
「ああ、あんたか」
「さきほどあなたが『つばさ』に来られたという報せがありまして……」
「そうだ、ぜんぶおれがやった。――警察にもいっておいてくれ……」
電話口で乾いた笑い声がした。
「ご冗談でしょう？　泉さんのことはどうするんです？」
「かの女はもう埒外だ、ひきとってくれ」
「あなた、後悔しますよ」
「ああ、そうかもな」
おれは電話を切った。これからどうしようというのか。車に乗っていく宛がない。気づくと相棒から留守電が入っていた。
――「きょうはどうだった？　ランチは喰ったかい？　おれはいま手首を切ったよ」（なんだ、これはいったい？）っておれはおもった。呆然しておれは事務所にもどった。やけに暖かい空気が流れている。事務所の電話が鳴った。敦子からだった。
「あなたにはがっかりしたわ」（ああ、そうだろうとも）とおもった。
辺りが騒がしくなった。階下から黒い烟が立ち上り、窓のむこうが見えない。おれは窓をあけた。地階から火の手が迫って来る。やがてこのフロアも燃えさかって、おれはこの結末の意味について語ろうとした。でも、だれに？　いまや、秋。ここは真夜中のポーチでも、アメリカ中西部でもない。ディキンス・ハーの作品よりも、この野崎榮による語りを紹介するべ

きなのか。いまのところ、それを聞いてくれる若者たちがいない。

＊

病室のなかは暗かった。消灯時間のようだ。廊下を歩く跫音が聞える。それらは入って来た。カーテンを開け、おれを見下ろす。知らない男と敦子だった。男がペンライトでおれの顔を照らしている。頬の痩けた長身の男だ。おれが眼で合図を送ると、気づいたようで挨拶をして来た。

「よく気がついたね。わたしが内藤です」

「え？」

おれは起き上がろうとした。全身に痛みが走る。

「寐てらしてけっこう。笹山が告白したらしいですね」

「なにを？」

おれは惚けてみせた。

「つまり人買いですよ」

内藤は口を歪めて笑った。やつの面子を潰したくなっておれは云った。

「あんたもディキンス・ハーの登場人物に過ぎないんじゃないか？」（そんなことはあるはずない）っておもった。内藤は

一瞬面喰らったが、すぐにもとの笑みに帰って、おれの足を撫でた。

「まあね。——作者がだれであれ、勝つのはこのわたしだ。真一くんはもう内情を知っているし、帰せない。あとはこの泉さんと懇ろにやるんだね」（こいつだけは赦せねえ）とおもった。

内藤はそう云うと、うしろをむいて歩き去る。敦子は感情のない眼差しでしばらくおれを見ていた。おれはかの女の腕を掴んだ。かの女は振り払った。小さな声で「やめて」とだけ云い、顔を背けた。おれはいきなり寂しくなった。これまでに感じたことのないほど悲しくなった。なにもかもが届かない彼方へいってしまったとおもった。そうおもえば涙もでて、洟も垂れて来る。瞼の裏が熱くなって来た。おれはいったい、なにをしてるんだ？ だれかの手駒のように操られて、こんなところで探偵なんかやっている。滝田とふたりで音楽だけをやっていればよかったのに。

「敦子さん、おれ、探偵辞めよっかな？」

疲れ切っておれはそう云った。かの女はハッとしてこちらを見た。

「莫迦じゃないの？ いまさら手を引くの？」

「でも、万策尽きたよ、もう」

かの女はなにやら決意したように返した。

「3日後、送別会をやるって。——内藤から聞いた」

おれたちはそこで真一くんを助けることを誓い合った。おれは眠り落ちた。躰の痛みがまだ疼く。夢のなかでブロンドの女と出会った。なまえはエル。かの女は男たちに我慢ならない。じぶんを見棄てて、好き勝手に消費したとわめく。おれに

はどうすることもできない。かの女は理容師が使う、鋭利な鋏で襲いかかる。映画館のスクリーンを横切る鋏のクローズ・アップ。やがて途切れた視界の端で、かの女が泣いている。血に飢えた悪魔とはほど遠い。悲しい少女のようなかの女の眼に涙がたっぷりと浮かび、流れ落ちる。おれはそれを拾いあげてしまおうと考える。それは高く売れるからだ。かの女が悲鳴する。おれは実家の裏庭で父の暴虐に耐えている。激しい罵声、飛んで来る角材、おれは父を殺そうと誓う。やつの足に釘を打ちつける。父の悲鳴がおれの悲鳴のように聞える。嗜虐的な愉しみのなかで、おれは気づく。殺してしまっては金が手に入らないと。おれはやつから金の在処を嘔かせようとする。でも、相手はどうにもならない。

眼が醒めて、おれはじぶんの躰を確かめた。ちゃんと動けるかどうか。火傷は大したことじゃない。電話もある。とりあえず、敦子に服を手配してもらった。

「大丈夫？　無理してない？」

かの女はおれの躰を見て、そういった。あちこち火傷の痕だらけだ。

「軽傷だよ、心配ない」

おれは云って服を着た。衣擦れが痛かった。敦子はおれの肩を抱いて、そっと額に口づけをした。それが本心のものか、笹山所長への義理立てなのかはわからなかったが、すべてを肯定されたようで心地よかった。送別会の日、敦子はなかで、おれは門扉に立って、待機していた。騒がしい声が戸外まで響いている。小さな窓が空いて、そこからハンカチが落ちた。敦子の合図だ。おれは走った。正門から入って、食堂室にむかった。扉のむこうには、内藤と、真一少年、敦子、笹山所長、そして滝田が待っていた。そろい踏みした5人にぶっついておれは辞を失った。どうしてこんなところに滝田が。

「おれも待ってたんだよ」
やつがいった。
「ほらほら、ご馳走が冷めちゃうよ」
オードブルが並んだテーブルに精神病者たちが並ぶ。その背景は真っ青な滝の画で、日本画だった。
「野崎さん、さあ席について」
敦子が云った。おれはとりあえずとばかりに坐って、5人を見較べた。なにかいうべき科白があるはずなのだが見あたらない。みんなかすかに笑みを浮かべ、所長はまるで癌なんかではないように見える。そのとき、紫色の烟がぷぅーっとカーテンの裾から噴きだして、照明が眩しくなった。いや、それはエルの幻覚だ。おれのじゃない。
「おじさん、ぼくを助けてくれるんですよね？」
真一少年が云った。なぜだか、とても嬉しそうだ。
「きみはおれの弟子だから、あとのところはうまくやれるでしょ？」
所長が云った。なぜだか、とても安心している。
「おまえのギター、また聞きたかったなあ」
滝田はどこか寂しそうだ。
「わるいけど野崎さん、わたしはあなたを愛せない。好きだけど愛せないの。どうか赦して欲しい。そしてこんな場所であなたとお別れするのがどれほどつらいか、わかって欲しい。エルが云ったようにわたしも消費されるのにうんざりしてる

のよ。男と男の関係のなかに存って、女がどれほどつらいか。エルはこうも云ったわ。《わたしにできるのはニグロへの復讐だけじゃない、それよりももっと大きなものや価値観に対しての攻撃よ》って。あなたにはきっとこの意味がわかるとおもうの。だってあなたはずっとディキンス・ハーとともに旅をしてたから。だからもうじぶんを閉じ込める必要はないの」

敦子が長広舌をふるった。まわりのやつらは黙々とカツレツだの、牡蠣フライだのを喰っている。おれも黙って喰い始めた。まずはサラダをとって、スープに口をつけた。トングで必要なものをとって、じぶんの皿に盛る。カツレツには岩塩を、牡蠣フライには醤油をかけて喰った。赫い烟や、蒼い烟が漂うなか、おれは喰った。最後に内藤がまえにでて、おれに一礼した。長い脚を持て余した躰で、おれの顔を覗き込む。

「いいですか、野崎さん。ここからが肝心なんです。あなたがエルを求める気持ちはよくわかる。裏庭のポーチで一緒だった少女のことが忘れられないのも。しかしですよ、事実はせっかちなんですな。あなたはあまりに多くを求め過ぎた。探偵としての立身、事業計画、女性との交遊、猥褻物の蒐集、過去の夢――ぜんぶ、切りがない。もう終わりでしょ？　終わりにしましょうよ。いつまでそんなことをやってるんですか？」

おれは料理長らしき男にむかって大きな声で云う。

「あの、タルタルソースがもうないんですけど」（まあ、べつにいいけどね……）っておもった。料理長らしき男は、無言で新しい器を持ってきた。うやうやしくおれの皿の横に置く。なかは空っぽだった。いや、よく見ると白く胡粉のようなものがへばりついている。おれはそれをフォークですくって舐めた。文字の味がする。

「おい、これ」

文句を云おうとして顔をあげると、だれも動いていなかった。内藤は長い脚を持て余して、空中の埃のように静止している。敦子は口を開きかけて、その形のまま固まっている。真一少年も、笹山所長も、滝田も、まるで蝋人形のようにおれを見つめたままで瞬きひとつしない。ただ滝田の持っているスティックの先から、砂がこぼれ落ちるのが見えた。音が消えている。カツレツを噛む音も、換気扇の音も、敦子の長広舌も、すべてが遮断されている。ただひとつ、背後の日本画からだけ音がした。青い滝の画だ。ごうごう、ごうごうごうと水が落ちる音がする。おれはふり返った。描かれた水飛沫が動いている。平坦な板絵から水が溢れだし、テーブルクロスを濡らし、床へと滴り落ちてゆく。

「冷たいな」

足元に水が押し寄せて来る。それはおれの足首を濡らし、やがて膝まで浸かった。だれも逃げようとしない。おれだけが、左手にフォークを握りしめたまま、その水位を見つめている。水は青くない。顔彩のように黒い。おれはタルタルソースの味を懐いだそうとした。酸味と、卵の甘みと、ピクルスの食感。しかし、懐いだせない。口のなかにあるのは、やはり乾いた文字の感触だけだ。ディキンス・ハー。おれは友人の名を呼ぼうとした。しかし声帯が震えない。滝の音が大きくなる。鼓膜を圧迫するほどの轟音。それとも、これは観客が帰ったあとの映画館で回る、フィルムのリールが空転する音だろうか。おれはスプーンを落とした。水音はしなかった。おれはタルタルソースが欲しかった。

訳者あとがき

かつて少女期に黒人男性から犯され、周囲から疎外の扱いをされたエルが、やがて男性性や地域に牙を剝くというこの物語が半世紀以上経って脚光を浴びたのは二〇二四年に映画『そのブロンドは赦さない』として、この世にふたたび送り出されたからだ。原作に漂う黒人蔑視的なムードを排除するべく、徹底したストーリーの改作が施された。時代は現代になり、エルは白人コミュニティ内で最初から疎外される人物として描かれ、男性社会と家父長主義的な世界から脱却し、必ずしも相手の男性を殺すわけではないという気まぐれなキャラクターに変更され、登場する黒人の人物も押し並べて理性的で、ごくごく限られた場合にしか、主人公に強く当たらない。そしてエルは終身刑となるのである。

本書はディキンス・ハーの小説『血に飢えたブロンド（原題／A Bloodthirsty Blonde, 1959）』の全訳である。翻訳にあたってのテキストは一九五九年にアメリカの HABERLINES 社による初版を低本とした。最新映画とこの原作との乖離の仕方は時代の望む幻想をそれぞれべつの人間が書き取ったという印象で、どちらも素晴らしいのだが、一点、モーリンの扱いについては少し疑問が残った。彼女がエルに憧れながら、しかし犯罪は肯定しないとの態度はまちがっていないが、詐欺行為までもを公で非難するモーリンには違和感がつきまとった。一時の青春で犯罪すらも美学のように映る瞬間があってもいいはずであると、原作を訳しながらおもった。今回の翻訳に係わってくださった人々にはただ感謝しかありません。篤く、お礼を申し上げます。

高階政重

泥の王冠

＊

ラム・レーズンのチョコーレイトや、バーボン・ウイスキーにおもいをめぐらしていた。さっきまでの会話は憶えていない。隣で莨を吸っている若村という白髪の男がふいにおれを小突いた。――「中尾くん、それって宿命的に考え過ぎだよ」って。なんのことだか、わからない。病院の喫煙室は烟で濛々としていた。――「なんですか、宿命って？」（聞き返してもムダなような……）とおもいながら云った。若村は吸いさしの1本を灰皿に擦りながら話す。

「つまりさ、きみは作家の弟子で、系譜のある存在なんだろ？　でも、だからって先々代のようにならなくちゃなんて考える必要なんかないのさ。べつになまえだけでも残ればっておもえばいい。媒体で目立つことだけが詩人ではないだろう？」

なにもわかっちゃいないのだ。どれほどの辱め、どれほどの痛苦がおれを動かして来たのかをいまいち説明することはできないし、それをこの男が理解するともおもえない。ただじぶんのやっていることが、やろうとしていることがまちがっていないのを明らかにしたかった。

「おれは無名のまま終わりたくない」

烟をよけて声をだした。

「それはおれもおなじだったよ、でもいまはちがう。地方の劇団員として、それなりに愉しい。東京には疲れた」

「愉しかったら、どうしてここにいるんですか？」

病院はアルコール症の専門だ。若村はことばを失い、おれの横顔をじっと見た。そしていった、――「どうだ、きみも劇団に入らないか？」。それでも生活ができるとはおもえない。もうずっとむかし、『犯罪友の会』という小劇団の面接にいったことを懐いだした。表情の乏しいおれむかって団長氏は「きみはいじめにあったことがあるのか？」と云った。「いじめに遭った子はみな表情が乏しい」とも。おれは劇団のなまえから勝手にミステリでもやっているのかとおもったがちがっていて、入団を辞退した。それにチケットをさばけないからだ。

「おれはいいです。文学のほうが気が楽だから」

ひとりでいられる表現のほうが性に合っていた。それ以上、若村の視線もむなしく、ひとり喫煙室をでると、おれは娯楽室へいった。再入院――つまりでもどり男が差し込みアンプでエレキギターを弾いている。おれもギターを持ってくればなっておもった。いっこうに巧くならないギターだったが、気晴らしにはなりそうだった。

ある晩、患者のひとりが暴れだした。眼を剝いてほかの患者に挑みかかった。看護人たちが手早くかれを片づけた。地下牢にむかって連行していった。嵐のあとの静けさをみなが見つめる。おれはサーモンフライを喰いながら、じぶんが去勢された牛のように、もはやだれにも挑みかかったりはしないのを実感した。むかし、父を撲ったように。おれという男のなかにはもはや激しさはなかった。過去、じぶんの怒りでじぶんが燃えあがっていたときもあった。なにもかもが他者の拒絶というかたちで決着し、そして放置された。おれはおれによって追放されたカリギュラだった。

ほかの患者たちが、和気藹々としているのがいやだった。おれはやつらとはちがうって心のなかでおもいつづけた。そうおもえばじぶんだけが真実のなかにいられるような気がしたからだ。退院もまぢかになった頃、若村は院内飲酒で地下牢に

入れられるところだった。おれたちは眼を合わせなかった。アウトフォーカスする視界のなかで、かれがなにかいう。おれは答えない。数千の蚋（ぶよ）が飛び回る中庭を脱け、バス乗り場へと足を進めた。心のなかは新天地がすぐ眼のまえに迫るようだった。いつか、すべてを懐いだすだろう。このままに。到着したバスに乗り込むと、なにもかもが解決したような気分にさせられた。病院はいやな場所だった。最初は安心する。でも、次第にうっとうしい。飼われているようで気分が塞ぐ。それがなくなったいま、また酒が呑みたくなった。冷えたバーボンをちびりとやりながら未来を幻視したい。

アルコールにまつわる、あらゆる災禍は姿を変えて誘惑する。まるでうつくしい女のようにそれは再訪するのだ。おれの膵臓を溶かしてしまう女たちがこの世界にはかぎりなく髪をなびかせていた。

＊

病院と駅とを巡回するバスにゆられ、おれは『ブラック・ボーイ』という小説を読んでいた。黒人作家の自伝だ。読むこと、そして書くことの自由さに惹かれた男の物語。しかし、もうとっくにその本にも倦いてしまっていた。自己分析、自己裁定、自己限定の塊りに厭気が差してしまっていた。病院でさんざんやらされた体験発表と断酒への誓い。そんなものはくそ喰らえである。

バスを降ろされたおれは自由という名の駅にいた。そこにはあらゆるものがある。アルコールも例外ではない。おれはポケットの小銭を集めて清酒を買い、和泉中央から西成方面の電車に乗った。さっきまでおれにまとわりついていた緊張感が

薄れた。ひとびとの視線も、じぶんの欲望も、どうだってよくなる。現実を中和するためにひとは酒を呑むわけだが、その効果は限定的だ。金が尽きるか、躰が潰れるか、将又その両方が科せられる。マニ教における苦汁をおれは味わっている。西成にもどるころにはそれなりに酒が馴染んでいた。いつもの観衆妄想が面倒になって来る。おれは過去からやって来る他人の顔をひとつひとつ払いのけながら萩ノ茶屋まで歩く。神戸まで帰る気にはなれなかった。しかし、いまさらドヤに泊まって無頼派を気どる気にはなれない。さきざきで酒を買いながら新神戸をめざすしかなかった。病院で仕込まれた酒についてのさまざまなレクチャーが頭を走る。『自由こそ治療だ!』という表題の本を懐いだす。新今宮、阪急梅田、阪急三宮、市営地下鉄新神戸に至るまで、いったいどれほどの悪臭をまき散らして来たのかもわからない。3ヶ月のぶりのアパートはなにも変わっちゃいなかった。薄く積もった埃だけが時間の経過を示すだけで、あとはそのままである。便所でいちど嘔いてからハイボール片手に軽く掃除した。それから福祉事務所に電話して、きょう退院したことを告げた。それから定市に私信を送った。「きょうから自由の身になった」だと。

おれは無名バンドを見るためにライブハウスへなんども行った。そいつら目当ての女たちにも用があった。3ヶ月ぶりのシャバ。女たちはおれの頭のなかにはなんの興味も示さなかった。常連の男が云った、――「中尾さん、あんたまたそうやって、頭のなかの傑作の話ばっかりしてるの?」。よけいなことだった。おれのギター、おれの作曲、おれの歌詞がどれほどのものか、わかっていないんだ。その男は、定市はさらに云った、――「おれたち、半端者はそれらしくしてるしかねえんだよなあ」。おれは愛想笑いをくり返した。だんだんと心が冷えて来るのがわかる。

つたない宅録の音源が、もう4年も放置されていた。だれもでもいい、一緒にやれる音楽家はいないかとくりだしてみた

が、そんなものはいなかった。定市だってミュージシャンづらをしているだけで、バンドだって組んでいない。たまに背負っているギグバッグにはなにが入っているのか、わかったものではない。女たちとはなにもなかった。おれは夢を見ようとしている。むかしの夢だ。

「定市、おれは半端者になるつもりはないね」

「待ってよ、おれたち一緒に堕ちようよ」

「それこそ待ってくれ」

おれは小便に立った。さすが3ヶ月の禁酒だ。尿の色は透明だった。尿酸の値が下がっている。もどってビールを追加する頃には舞台にバンドがあがっていた。ガレージ・パンクが始まった。

「中尾さんって女目当てよねえ」

知らない女が云った。

「え?——そんなことないよ」

「だって演者になろうとしないじゃない?」

「え?」

「怖いの?」

「出演料払って未熟さを観られるのが厭なんだ」

女は嘲った。

「だからよ、あなたの音楽にだれも興味を持たないのは！」

おれは口を噤んだ。そしてグラスのなかのものをすべて呑み込んでしまった。定市は笑っておれの肩を叩いた。

「だからよ、やっぱりあんたはおれの仲間さ」

おれは肩をすくめた。

「だったらおまえのギターを聴かせてくれよ」

やつは顔をしかめた。

「おれだって怖いさ……」

それきりおれたちは黙って次の酒を呑んだ。ライブはつづいた。客は騒いだ。おれたちはだれよりも静かなリスナーだった。何者でもないリスナー、もちろん顔もなまえもない。店が終わったあと、コンビニまえでつづきをやった。酎ハイをちびりとやりながら定市が云った、——あんたの音楽、きらいじゃない。でも諦めたほうがいい。——やつは罐を呑み乾した。おれは残った酒を確かめた。

＊

区役所の廊下は脂臭かった。黄ばんだ壁のむこうに生け贄が並んでいる。おれは迷わず扉のむこうへ入っていった。窓口で用件を伝え、案内された位置に坐る。ケースワーカーの布瀬女史がおれの収入申告書を受け取った。B型作業所の工賃で、

¥1万3千也。作業なんてでたらめなものでおれは在宅で作文を送りつけていた。布瀬は改めて口をひらいた。

「中尾さん、もう退院してひと月経ったけれど、どうですか？」

「どうって？」（どうもこうもない）とおもった。

「お酒、やまってますか？」

「ええ……」（きょうも呑んでから来たんだけどな……）とおもった。

「今後、病院での検診結果を提出してもらいたいんですが」（やっかいなことになっちまったな）とおもった。行政はなにもかも正しい。おれという堕落者をどういたぶってやればいいか、十全に心得ている。

「はい」

「提出がされない場合、指導の対象になることもありますから、気をつけてください」

かの女が立ちあがった。おれも立ちあがる。帰りがけの1杯が欲しくなった。口が渇く。喉から呼び声がする。幸いきょうは精神保健福祉には用事がなかった。

「中尾さん、5階の窓口へ行ってください」（なにいってんだ？）とおもった。5階は精神保健福祉の窓口がある。おれは肯いて室をでた。階段で5階まであがる。またも黄ばんだ壁に囲まれ、厭な予感がした。案内人に用件を云って、長椅子で待った。やがておれを呼ぶ声がして、初老の男が対応した。おれを病院へ送り込んだ張本人だった。表情を硬くして挑む。机について会話を始めた。

「中尾さんね、退院してどうです？」

「どうって？」（どうもこうもない）とおもった。

「お酒、やまってますか？」

「ええ……」（きょうも呑んでから来たんだけどな……）とおもった。

「中尾さんね、聞きましたよ、入院中に2度の飲酒があったって」

「そうですか」

「あなた、じぶんから入院したいって云いましたよね？　それをどうしてなんですか？」

「反省してますよ」

宮部とかいう、その初老はため息を吐いた。そして分厚いファイルを手許に寄せ、それをひらきながらおれの病歴をチェックした。――「これまでに急性膵炎が3回、肝炎が1回、これは重症ですよ。病院はホテルじゃないんですからね」。そんなことはわかっている。そのあいだも、机の角に置かれたペットボトルの水が気になっていた。水なのに、なぜか喉が鳴った。酒をやめるのはただの対処であって、根治ではない。おれがなぜ酒に引き寄せられるのかがわからなければ解決しようがない。そのあとはずっとヘルパーサービスの利用について押し問答をした。かれは入れるべきと云い、おれは入れないと譲らなかった。相手をうんざりさせることにかけて、おれは上手だった。無事に話が終わって、階下へいくと、まただれかがおれを呼び止めた。ワークサポートの担当者だった。かの女は笑った。

「中尾さん、お久しぶりじゃない？」

「ええ」

「障碍求人の話、もう決まりました？」

「いいえ」

「また求人票が必要でしたら来てくださいね」

かの女が去って、おれは建物をでようとした。ところが知らないあいだに地下に来てしまったようで、出口が見つからなかった。てきとうなドアをあけて、なかへ入った。絡まったダクトが天井を走っている。どうやら水道施設に迷い込んだらしい。またドアをあけた。自動車がゆっくりむかって来る。そして通り過ぎる。冷や汗がでた。だれかがおれを追いかけているようにおもう。どうにか出口にむかった。スロープをあがると、見憶えのある通りだった。おれは地下駐車場に侵入していたのだ。汗をぬぐって酒が売ってある場所を探した。

＊

おれの電話は最近大人しい。鼈が行き届いている。それでもたまに吼えるときがあって、おれは重い腰をあげることになる。たとえばそれが父親からだったら、なんとも気分がわるい。

「もしもし、――」

「わしだ」

おれはぞっとした。

「なんのようだよ？」
「仕事やらんか？」
「なんの？」
「そろそろ椎茸の栽培しようとおもってな。手伝って欲しい。金も少しやるから」
荒れ果てた実家の光景がまざまざと懐いだされた。
「云ったろ、もう実家にはいかないって」
「行かないってどうして？」
「厭なんだよ、陰気でさ。それに師匠にも親父とかかわるなって云われてる。だからいい」
「いいわけないだろ、働け」
「ひとりでやりな」
電話を切った。そいつはふたたび大人しくなった。どうして父はおれにかかわろうとするのか。おれのほうじゃ、とっくに切ってしまっている。中尾に伝わるわるい酒をなぜ呑みつづけるのか。祖父もアル中だった。酒乱だった。おれも酔って父を撲った。あれから長い年月が過ぎた。黒い虫がそこらを這っている。すばしっこい。捕まえることもできない。たくさんのまちがいとともに盃を重ねた。スイッチを消し忘れたラジオのようになにかが喋りつづけている。もう夜だったし、さっさと眠剤と安定剤を嚥んで寝ることにした。あしたは土曜日。なにもない。ヒルナミンを一緒に嚥下して、あしたは一日中寝ていることにした。

朝になっても、昼になっても寐た。夕方になってようやく起きた。できることはない。ギターを触る気にもなれない。即席ラーメンを喰ってから、リカーマウンテンでウィルキンソンのウォッカを買った。どうせ次に眠るのは未明だ。おれにはどうすることもできない。澱のような感情の滓を湛えるグラス、そいつを相手に声のない会話をした。定市から電話があったものの、でなかった。おれはじぶんの辞に泥酔した頭で、その頭のなかのラジオをゆさぶった。

＊

ベイビー、きみの心はラジオ
ぼくの頭のなかには受信機がある
ベイビー、ぼくはきみの波長に合わせてる
その内容がわかるよ
（ねえ、いま）

送信機
おお、いいものが受信できた
ねえ、ラジオの頭よ

まったく新しい世界のサウンドだ
（ねえ、いま）

おれの指を見て、震えてる
指先からつま先まで
いま、きみの信号を受信中
騒音の土地を離れるんだ

送信機
おお、なにかいいやつを受信中
おい、ラジオの頭よ
真新しい世界のサウンド
ラジオの頭よ
真新しい世界のサウンド

トーキング・ヘッズ『レディオヘッド』

音楽が終わっておれは横になった。心を荒ぶ過去というかぜを感じながら蒲団のなかへ潜った。なにやらあたらしい知見がないかと頭をひねった。蛇口をひねるようにひねった。酒臭い息がただ洩れただけだった。深夜族、ここに眠る。昼になって起きた。呼び鈴が鳴った。ネットで買ったレコードが届いた。レコードは開封もせず、ラックに収めた。おれのなかの教師たちが云った、そろそろ酒をやめて、メシを喰えと。でも、ウォッカはまだ残っていた。50℃のそれは冷凍庫で眠っている。おれはとりだして迎え酒をすることにした。

だれもおれを咎めない。だんだんとあたりが暗くなる。自制の利かない欲求のなかで次第になにもかもわからないくなる。好きだった女たちをおもったり、政治的な言説をふりまわしてみたりして、じぶんがなにか、儚い存在かのようにふるまった。そんなときだ、もてで大きな音がした。ガラスのわれる、大きな音。そして悲鳴。おれは立ち上がって、窓の下を見た。ここからじゃ、わからない。地階へ降りた。女が倒れている。酒壜がわれている。零れた酒が坂に沿って流れている。もったいない。おれは女の肩をゆすった。

「大丈夫ですか？」（酒臭い女だ）とおもった。

「――大丈夫」

ところがそれきり応答がない。おれは仕方なく警察を呼んだ。じぶんも酒で酔ってるから極まりがわるい。やがて来た警察はおれと女を車に押し込んだ。

「あんたら、そうとう酔ってるね。大丈夫じゃないだろう？」

おれは苦笑した。

「笑いごとじゃないんだよ。車に轢かれたらどうする?」

おれは黙った。女は寝息を立てている。黒くてみじかい髪、黒いレザージャケット、黒い幅広のズボン、銀色の靴。おれはじっくりとかの女のからだをなぞった。車は葺合署で停車した。警官がふたりでかの女を支えながら署内に入る。おれもあとからついて行った。かの女は別室に連れられた。おれのほうはべつの警官が対応した。ふたりで長椅子にかけて事情聴取された。

「――ということは、きみが降りていったときにはもうかの女は倒れていたんだね?」

「ええ」(なにを疑っているのだろう)とおもった。

「きみもかの女も酔ってる。――なにかあったんじゃないの?」

「なにもないですよ。――おれ、もう帰るんで」

おれは腰を浮かして挨拶した。ところがそうもいかなかった。

「そう急ぐなよ。ここで酔いを覚ませばいい」

警官はおれの肩を掴んで離さなかった。

「まあまあ、かの女が眼を醒ますまで待てよ」

けっきょく、そのまま3時間も留め置かれた。かの女が眼を醒まし、おれにかけられたやましさを打ち消してくれるまで、相当の時間がかかったというわけだ。おれたちはまたパトカーに乗った。かの女がどういった事情で、倒れていたのかを知りたかったものの、警官は云わなかったし、こちらから訊くこともなかった。すっかり朝だった。おれはまた残りの酒を呑

み、さらに追加の酒を買った。月曜日だ。作業所に電話を入れて、在宅作業を開始した。最近はずっと日記を分割して提出している。支援員たちはおれの私生活についてあれこれと云う。云わせておく。

なにごともなかったかのように日が過ぎる。週末、またも定市と呑んで帰ると、女が待っていた。なにもかも完璧だというような服と化粧をしてだ。おれは気おくれした。

「このまえはごめんなさい。ずいぶん迷惑をかけてしまったようで」

「とんでもないよ」

「入っていい？」

「かまわんよ」

散らかった室にかの女を招き入れた。かの女が云った、

「グラスある？」

おれは戸棚から未使用のグラスを探してとった。かるく水で濯いでから、かの女に渡す。むこうは受け取ったグラスをテーブルに置き、鞄のなかからフルボトルのスコッチをだした。

「まずは呑みましょう」

「じゃあ、氷をだすよ」

おれはふたつのグラスに氷を入れた。かの女が酒を注いだ。

「乾杯ね」

かの女がさきに口をつけた。おれも遅れて口をつける。なかなか好い酒だった。なにか音楽をかけようとおもい、プレイヤーを立ち上げた。映画『ベティ・ブルー』のサントラをかけた。かの女は顔を顰めて立ちあがった。

「もっと刺激的なやつをかけてよ」

「すまんな」

おれは音楽をとめた。刺激的ってどういうのだろう。おれは『腹貸し女』のサントラをかけた。またも映画音楽。ジャックスの曲が始まった。「マリアンヌ」だ。イントロのドラムソロにかの女がからだを震わせる。おれはそれを見て、笑った。ふたりして踊った。ハーフロックで始まった酒が、ロックになり、あとはストレートになった。鳴っているはずの音楽がどんどん聞えなくなった。気づくとベッドのなかにいた。

「タクシーってきらいなの」

かの女が云った。

「車酔いしちゃうから」

「どこに棲んでるの？」

「近くよ。あなたもきっと気に入る」

「そういえばきみのなまえは？」

「それを知ってどうなるの？」

おれたちは起き上がって胃薬を嚥んだ。酒はほんの少し残っているだけだった。朝焼けの滲む窓辺に立って、おれは頭を

ふった。受信機は落ちて来なかった。かの女を呼び寄せるラジオ波が発信されていたはずだった。それでなきゃ、説明もつかない。おれは残りの酒をグラスに注いで一気に乾した。

「グラタン、食べに来ない？」

「いいね。でもどうして？」

「グラタンに理由は必要？」

「それもそうか……」

おれたちはかの女の室へ移った。たしかにいい室だった。ちゃんと独立した調理場があって、器具も食材もそろっている。かの女がマカロニ・グラタンを仕込んでいるあいだ、おれはリビングで白ワインをちびりちびりとやっていた。ワインはよく冷やしてあったし、胃にやさしかった。やがてオーブンの音がした。かの女が来て、一緒に呑んだ。時間が麻痺している。昼の陽射しが暖かく、おれはかの女に口づけをしたくなった。でも、しない。おれたちはまだそんな関係じゃないのはわかっていた。しばらくしてグラタンがあがった。かの女が調理場へいく。やがて運ばれてきた料理におれはうっとりした。グラタンなんか、もうずっと喰ったことがなかったからだ。

さっそくフォークを突き刺したとき、呼び鈴が鳴った。かの女がでる。男の声がした。だからといって隠れる気もない。おれはそのままチーズとホウレン草とジャガイモを口に運んだ。足音が近づく。なんともない顔でおれは喰いつづける。男が視界に入って来る。背広を着た中年だった。

「おれのぶんはあるか？」

「もちろんよ」

女が料理を運んで来た。

「黒胡椒もとってくれ」

「じぶんでとんなさいよ」

男は胡椒壜をとって椅子に坐った。グラタンに胡椒をかける。そしておれには一瞥もなく、食べ始めた。そしてワインを注いだ。

「ブルゴーニュ産の好いワインだろ?——といってもワインの蘊蓄なんざ知らんがね」

男がいきなりおれに云った。

「おれも生憎ワインには詳しくない」

おれはかれに云った。

「スモークチーズ、まだあった?」

かれは女にいう。

「切らしてるのよ」

「まあ、いいや」

かれはまたワインを注いだ。おれも注いだ。壜の中身はむなしくなって来た。平凡で穏やかな食卓の情景がつづいた。おれはなんだか大物になったつもりで椅子にかけている。女も食べ始めた。おれは添えられたパンをとって、鴨のペーストを

塗った。そいつを頬張りながら次の酒を期待した。なぜなら白ワインはもうからっぽだからだ。男が立ち上がった。そして冷蔵庫へむかう。もどって来た、その手には赤ワインがあった。

「あんた、酒が欲しいんだろ?」

「グラタンには赤が好い」

おれはまたもグラスを充たした。男もそうした。女もだ。おれたちはいっぽんのワインで同盟を結んだ。グラタンの皿を片つけながら女が男に云った。

「わたしたち、きのうからずっと呑んでるのよ」

女がおれを見て笑った。

「そうだとおもったよ。えらく呑むのが早い」

おれも笑った。

「おれたちゃ、アル中だよ」

男も笑った。

「あんた、好い眼をしてるね。純粋な眼だ。まるで罪を知らない眼だ」

「かつがれちゃ困るよ。おれほど罪穢れた人間はいない」

女が云った。

「恥ずかしい会話だね」

全員が次第に草臥れて来た。赤ワインの苦味がだんだん舌の上から消えてゆく。おれは便所を借りて少しばかりえずいた。嘔きはしないが、いくらか苦しみがあった。女と男はベッドへ倒れている。おれはソファにかけた。3つの死体のようにおれたちは長く眠った。気づくと日曜の午後だった。テレビの音がする。競馬中継だった。女はいない。男だけがテレビのまえで胡坐をかいていた。酒はもうない。男もすっかり素面のようで、コップのなかの液体をときどき口にはするが、それがアルコールでないのはすぐに感づいた。

「かの女は？」

ふりむきもしないで男が云った。

「買いだしだ」

おれは訊いてみた。

「あんた、仕事は？」

「答えたら笑うだろ」

「笑える仕事なのか？」

「ひとによるがね」

そこで話は終わってしまった。男の電話が鳴った。かれは着信を受けて話しだした。仕事の相手らしかった。話しながら男は立ち上がり、上着に手を延ばす。

「泉さん、そっちの情況はどうです？　動きありました？」

酔っぱらいの顔はどっかに消えていた。鋭い目つきで話をしている。

「いま向かいますよ。とにかく注意してくださいね」

電話を切って、ポケットに入れると、おれのほうをむいた。口の端をゆがめて自嘲するようにひらく。

「中尾さんだっけ?——もう帰れば?」

すっとぼけた声でそう云った。

「え?」

「きょうはかの女も遅番なんだ。それで帰りも朝になる。おれはかまわないが、かの女がいやがるんだ」

「そうだね、帰るよ」

おれは立ちあがった。上着をとって羽織った。からだが知らないあいだに冷え切っていた。

「おれのなまえは野崎、探偵だ」

おれは黙って頷く。

「笑わないのか?」

「その類の人間ではないからね」

代わりに野崎が笑った。ふたりして室をでて、地階へ降りた。それぞれの道をそれぞれの速さで歩き去っていった。なにもかもが白昼夢におもえてならず、道を振り返った。しかし、もはや野崎は見えなくなっていた。おれはしばらく呆然とかれの幻を追いかけようと立ち止まっていた。それだって数秒間のことに過ぎず、おれはまた酒が欲しくて適当な店にむかっ

た。女のなまえを空想しながら。

＊

呑みながら歩いていると、おれの電話が鳴った。定市からだった。日曜だし、遊んでもらいたいのかも知れない。でてみるとやたら切迫した息づかいが聞えた。

「しばらくかくまって欲しい」

そんなことはできなかった。

「かんべんしてくれよ」

「どうしてもか？」

「おれの室は狭すぎる」

それきり電話は切れてしまった。なにがどうしたのかもわからないままだ。おれは室に帰ろうとした。するとアパートのまえにはパトカーが停まっている。おれはそのまま入っていった。おれの室のまえで3人の警官が待機していた。おれはおかしくなりそうだった。酒のせいもあるかも知れない。しかし、そんなことはどうだっていい。

「あの、……」

おれは警官に声をかけた。

「あんた、中尾藜さん？」
「ええ」
「さっき定市麟二ってひとから電話なかった？」
やつがなにかやらかしたんだと合点した。
「はい、さっき〈かくまってくれ〉っていう電話が……」
「ここじゃ、迷惑だろうから車内で話を聞こうか」
「え？」
警官は急に無礼になった。
「ここじゃ、迷惑なんだよ」
「わかりました」
地階へ行って車に押し込まれた。無線機の声がやかましい。警官のひとりがマイクをとって喋りだした。それがまるで地獄の審判の声のように聞えた。おれは呑みすぎたことを後悔し始めていた。「こちら葺合4号、逃亡中の定市麟二に関係する人物に接触中。氏名・中尾藜、35歳、職業不詳。5年まえに傷害事案で検挙。どうぞぉー」だと。
「いままでどこにいた？」
「知り合いのマンションですが」
「どんな知り合い？」

「いや、知り合ったばっかで」
「それじゃ、知り合いとは云わないじゃないの？」
「いいえ、ここで出会って……」
「まさか、このまえの女？」
「ええ……」
「なにしたの？」
言葉がでなかった。だから、ありのままにさせた。
「グラタンを一緒に食べました」
「ンなこと、聞いてねえよ。その女と定市は関係あんの？」
「ないです」
「証明できるの？」
「かの女に聞けばわかるとおもいますが」
「で、その女は？」
「え？」
「女の住所だよ」
「でも、はっきりとは知りません」

「ほんとに知り合いなの？」
「ええ……フラワーロード沿いの、喫茶店のちかくで7階でした……」
警官はふんぞり返って云った。
「それじゃあ、なんもわかんねえよ。最初から云って」
「最初？」
「そう、最初だよ、最初。定市の電話のまえから云えよ」
おれはしかたなくかの女と出会った夜から話した。相手はなおも詰問する。
「話が通じねえのかな？　それじゃ、どーして定市が電話するんだよ？」
「わかりませんよ」
「それじゃ、すまねえんだ。このままだと、犯人隠匿にもなんぞ」
おれは耐えきれなくて云った。
「定市がなにをやったんですか？」
車内に冷たい沈黙が起こった。だれもなにも云わない。眼も合わせない。殺しか、タタキか知らないがおれには関係がない。運転席の警官がまた無線をとった。
「こちら葺合4号、ただいま関係者に聴取中。情況の照合をお願いします。どうぞぉー」
しばらく無言がつづいた。無線機が喋った。

「こちら警邏2号、定市らしき男を拘束、本署まで連行中です」
隣の警官がおれのからだにふれた。
「酒はほどほどにしな」
ドアが空いた。でていけということだった。おれは降りて、かれを見た。だれもおれなんか眼中になかった。車は発進して、おれだけ取り残された。定市がどうなったのかもわからない。なにをやったのかも。おれは室に帰って、鞄のなかのアイリッシュ・ウィスキーをだした。アルコールに導かれて、ここまで行き着いてしまった。

＊

ライブハウスにはしばらく行かなかった。定市について聞かれるかも知れないとおもったからだ。いつもの在宅作業をして、時間を潰した。それでも退屈が高じてでかけた。会計士の眞田という男がおれのことを待っていた。髭のあとの濃い、長髪の男だった。しかし頭頂部は薄く、なんだか不潔な感じのする男だった。開口一番、かれは云った。
「定市麟二のことで責任をとってもらいたい」
「は？」
「理解が追いつかないようだが、聞いて欲しい。かれはきみの名を使って商売をしていた。この店の信頼を堕とすようなね。そこできみだ、定市とは友人関係だってだれもが云う。きみならかれの代わりになってくれそうだ」

「やつはやつ、おれはおれですよ」
「それは詭弁だ。この店にハムスを持ち込んだけじめをつけるべきだ」
「ハムス？」
「そう、かれの持ち込んだ麻薬だ」
「それ、おれに関係あるの？」
「ないとは云わせない」
会計士はうしろ髪をなびかせて、なにやらカクテルを呑んでいた。おれも隣に立ってカクテルを注文した。そして呑んだ。いままで感じたことのない、熱いものが喉を流れた。これがハムスなのか？　どうにもわからない。酒ではないのはたしかのようだが、まだ確証が持てない。おれはてきとうに流すことにした。
「じゃあ、おれはこれからスタージョンと名乗るよ」
おれはあきらかにふざけている。
「ではわたしはエリソンか？　冗談はやめたまえ」
おれの腹に固いブルーフケースが当てられた。酒のちからでなんでもできるような気がしていた。まずはそのケースを叩き落とし、やつの腹に一発だけ入れた。やつが倒れかかる。壁際まで攻めて、その首に手をつけた。暴力はきらいだ。
「会計士なら身分証をだせよ」
かれのポケットからカード入れを巻き上げた。各種クレジットカードとロータリークラブの会員証があった。財布のなか

には身分証もあった。眞田という名は偽名だ。本名は伊豆谷雄一で、東灘在住、名刺には不動産業者の肩書があった。

「云え、なんのためにおれたちを狙う？」

「おれは、おれは頼まれたけだ」

「だれに？」

「知らない！」

伊豆谷はそう云って店を駈け抜けた。おれはほかの客に妙な眼で見られながらも、店長に声をかけていた。やつはハムスも眞田も伊豆谷も知らなかった。そして定市のことも知らないと云った。それきり、こちらの問いかけには反応せず、楽屋へと通じる階段をあがって行った。おれは女たちにも話を訊いた。だれも定市を知らないといった。おれはバンドの演奏が始まってから店をでた。待ち伏せを警戒したつもりだったが、どうやら無駄だったらしい。だれもいない通りを室まで歩く。所在もなく、歩き、酒も買わずにベッドに伏した。酩酊感はとうに消えていて、上腹部が痛かった。そろそろ酒も限界らしい。おれは数日のあいだ酒を断つことにして暮らした。そのあいだ、だれもおれに接触しなかった。それが倖せなのか、次の波乱の予兆なのかはどうでもいい。ともかく、早いところ定市に会う必要があるのはたしからしかった。壊れた時計がいつまでもぐるぐる回っていた。それを止める気力も、もはやない。

＊

1週間ものあいだ、おれは酒を呑まなかった。ひさびさの断酒だった。ふと野崎のことが頭に浮ぶ。かれならなにか調べてくれるかも知れない。しかし探偵を依頼するほどの金なんかなかった。それに今月はもうオケラに近かった。夜になって呼び鈴が鳴った。でてみるとかの女だった。これでまた酒へと引きずり込まれる。そうおもった。でも、女は酒を持って来てはなかった。

「ワッフルを焼いたの。食べない？」

鞄から包みをだしておれに見せた。好い匂いがした。

「料理上手なんだな」

「ブルーベリー・ワッフルよ。紅茶もあるの」

水筒をだしてテーブルに置いた。

「ところであの野崎って男だけど……」

「かれは自由人よ」

かの女はきっぱりと云った。

「自由人？」

おれにはわからなかった。恋人でも愛人でもないのか？

「そ、自由人。だれのことも縛らない、だれにも縛られない」

「でも、探偵なんだろ？　依頼とか契約だとかで大変じゃないか？」

「かれ、ぜんぜんそんなこと気にしないのよ。なんでも好きなようにやり遂げる」
「おれにはわからないな」
「そ、わたしにもわからない。さあ、食べましょう」
おれたちはテーブルを囲んでワッフルを喰った。たしかに美味かった。ひさびさに人間的な食事をしたという感触。おれのなかのラジオが恋歌を歌うように、おれはじぶんが幸福であるという意識を少し得た。でも、少しだけだった。
「定市ってひと、あなたの知り合い？」
「え？」
「きのうね、野崎に会いに来たの。なにやらあなたのことで揉めてるらしかったけど……」
「生憎身に憶えがないよ」
それだけ云うのが精一杯だった。穏やかでないものがおれの頭上を流れている。それを払いのける方法がない。せめておもって窓をあけた。少しだけあけた。定市はいったい、なにをやらかしたんだろう。麻薬の話は信じられない。あの贋会計士の云っていたことはすべてでたらめだろう。だからと云ってやくざがらみのなにかともおもえない。そもそも野崎のことをどこで知ったのかもわからない。おれは紅茶を飲んで気分を変えようとした。苦いものが口のなかに滞留している。
「ちょっと野崎と話したいんだけど、かれの事務所は？」
「北野通の第一八神ビルだけど」
すぐ近所だった。歩いてすぐだ。

「わかったよ」
「会ってどうすんの？」
「定市ってやつと、どんな話があったか確かめたいんだ」
「なら電話でもいいじゃん」
「かけてくれるか？」
「うん……」
かの女がじぶんの電話をとってかけ始めた。呼び出し音がかすかに聞える。それは長くつづいた。
「繋がらないの。ごめんなさい」
おれは黙って床に眼を落とした。おれたちはまたワッフルにもどった。喰い終わってかの女は去っていった。胸を抉るような沈黙がやって来て、おれはベッドに転がった。また酒が欲しくなった。夕暮れどき、リカーマウンテンへでかけた。フランス産のウォッカを買って室にもどる。定市が待っていた。やつには住所を教えたこともない。
「どういうわけだ？」
「まあ、伝手を頼ってな」
「面倒ごとはいらない。――帰れよ」
「まあまあ、おれはもう大丈夫だ」
「なら来ることもあるまい」

「おれとおまえの仲じゃないか」
「あの会計士とは話が着いたのか？」
「まあ、そういうことだ」
おれはしかたなくやつを入れた。
「おまえの室、テレビがないんだなあ」
「帰ってもいいんだぜ？」
「まあまあまあ……」
定市はスツールに坐って、ＰＣデスクのおれを眺めていた。おれは包みから酒をだしてじぶんのグラスに注いだ。やつはもの欲しそうな顔でこちらを見つづける。おれはやつに一杯たりとも注ぐ義務はない。
「それでおれになにか用か？」
「そうだったな。――野崎っておまえの知り合いなのか？」
「いちど会ったきりだ。べつに詮索するほどの関係でもない」
「ならよかった」
「どうよかったんだ？」
「いや、……」
「野崎といったい、どんな話をしたわけだ？」

「いや、……」

「会計士の眞田、いや不動産業の伊豆谷は何者だ？」

「知らない、おれはなにも知らない」

「やつは云ったぜ、麻薬を捌いたのがおまえだってな」

定市は立ちあがった。

「おい、待てよ！」

「待てないね。おれには通報する義務がある」

定市はまた坐っておれを見た。こいつを使ってちょいと遊んでやることもできそうだとおもったが、やめにした。下手にからかって虎の尾を踏むわけにも行かない。

「話せよ。でも時間をとらせるな」

定市は一瞬口ごもった。でも、あとはたやすいものだった。

「おれは伊豆谷に頼まれてブツを運んだだけなんだ。あそこの店に悪評が発てば安く買いたたけるって云われて。報酬は前払いだった。おれにはバンドが必要だったから、迷わず返事をしたんだ。ところが運んだとたん、おれはわるいやつらに追われた。それでおれは野崎に泣きついたわけだ……」

「でも、それじゃあ、野崎とおれの関係について知る余地がないな」

「ばらしたのは野崎だ」

「会話の流れを云えよ」

定市はそれきり黙ってしまった。信じられることをこいつはなにも喋らない。それがわかってやつを追いだすことにした。

おれは玄関へ行って扉をあけた秋の夜風がさむざむしかった。

「お帰りはこちらだ」

「待ってくれ」

「帰れ」

「待て、ほんとうのことを話す！」

必死の形相でやつは云った。うそじゃないようだが、おれは聞かなかった。やつの襟首を掴んでそのまま引き倒した。1度うそをつくやつはなんどでも吐くからだ。やつも観念したようで夜のなかへ消えて行った。これで一安心。おれはウォッカのつづきをやった。またいつか、かの女がやって来るのを願って乾杯した。ヘドロのような雲の塊りが空を覆い、やがて雨が降りだした。なんでもいいや、おれの心を動かすなにかがあればいい。かの女の黒いスカートが脳髄に閃いた。その唇にキスをするのはおれじゃないかとおもっていた。やがて眠りに着いた。そして呼び鈴が鳴った。警官だった。今度はふたり組。片一方は私服の刑事だ。

「任意同行願います」

私服が云った。

「どうしてです？」

「来てみればわかりますので」
おれは上着を来て、地階へ降りた。以前のようにパトカーに乗って、今度は生田署まで運ばれた。長い廊下、薄汚れた壁を通りすぎると遺体安置所に入った。
「身元確認、お願いします」
刑事が頭を下げた。
死体袋のジッパーを下げる。おれは息を呑んだ。定市の顔がある。
「定市麟二さんでまちがいないですか？」
おれは嘔きそうになった。
「ええ……」
「きのうの夜、あなたのアパート付近で目撃されてます。あなたの室に来ましたよね？」
刑事は顔をちかづけて云う。
「はい」
「どんな話をされましたか？」
「いや、酔っていたのでよくは憶えてません」
「そうですか、残念ですね」
あたらしい獲物を見つけたような眼でおれを見下ろし、そして取調室へと送り込んだ。長い時間がかかった。意味のない

押し問答をつづけた。おれは根を上げて伊豆谷とのことを話してしまった。おれにはなんの落ち度もないとおもう。でも、そのまま殺人の容疑までかかっては、それこそ意味がない。

「上出来ですよ、中尾さん。でも、あなたはおかしい」

「なにかです？」

「かれがなぜあなたに会いに行ったか、探らないで帰したことです」

「だって、やつの話は信用できなかった。以前からそうだった」

「まあ、好いでしょう。あなたがやったわけじゃないのはわかってる」

刑事は黙って莨を吸った。そして嘔いた煙を片手で掻き消しながらでていった。あとは制服警官が対応した。

「帰りは歩きだけどいいよね？」

おれはなにも答えなかった。生田署をでて、ゆっくり家路に就いた。アパートの室では女が待っていた。鍵を忘れていたのだ。おれはかの女に歩み寄り、そして抱きしめた。かの女は抵抗しなかった。

「どうしたの？　中尾さん」

「知り合いの葬式だったんだ」

「知り合い？」

「定市だよ」

「サダイチ？」

「知ってるんだろ？」

かの女は首をふった。だったら前回の会話はなんだったんだ？　おれはなにもかもを知りたくなった。おれはポケットをまさぐった。指先に固いものが当たる。伊豆谷の名刺だった。おれはかの女を放して電話をとった。

「もしもし、岩瀬不動産ですか？」

「ええ」

「伊豆谷さん、お願いします」

「おなまえは？」

「中尾と申します」

「しばらくお待ちください」

呼び出し音が鳴る。それは長かった。対策を考えていたのかも知れない。

「伊豆谷ですが。どのような用件でしょうか？」

「ひさしぶりですね。伊豆谷さん――それとも眞田さんですか」

相手の息を呑む音が聞えた。やつは声色を変えた。

「なんの用だね？」

おれは話す。じぶんでもなにをいっているのかが怪しい。

「定市が死ぬまえに伝言を残した相手がいる。知りたくはないか？」

「いくらだ？」
さっそく金の話がでて安堵した。
「500」
「せいぜい、300だな」
おれは頷いた。
「まあ、いいだろう」
「で、相手は？」
「野崎榮、探偵業者だ。事務所は北野通の八神ビルにある」
「じゃあ、おれたちは午後5時に乗り込む。あとはわかってるな？」
「殺したりするなよ？」
「おれはプロだ」
もしも、やつがほんとうにプロだったら、そもそも会計士を名乗ったり、名刺を奪われることもなかったろうとおもった。
やつが野崎に返り討ちに遭うのを期待した。それがせめてもの、定市へのたむけのつもりだったからだ。おれは電話を切った。そしてかの女の室へ宴の場を移した。

＊

クリーム・リキュールのアイスや、マリブ・ミルクにおもいをめぐらしていた。さっきまでの会話は憶えていない。隣で笑っているアザミという黒髪の女がふいにおれを小突いた。――「中尾さん、それって宿命的に考え過ぎよ」って。なんのことだか、わからない。室のカーテンはかぜで悠々としていた。――「なんだよ、宿命って?」(聞き返してもムダなような……)とおもいながら云った。女は呑みかけのグラスを卓上に置く。

「つまり中尾さんにとって演じるということが自然体なのよ。べつにあなたの系譜から受け継いだものじゃないのよ。だから舞台に立つのも歌を唄うのもごくごく自然なことなのよ。なにかもを宿命的に考えてしまうから、却って息苦しくなるのよ」って云う。おれにはなんだかわからなかった。ここまでどうにか、やって来て、じぶんを責める気分にもなれない。酒はまだある。命はまだある。ラムを牛乳でわって呑んだ。時間は5時だ。ほんとうなら野崎の事務所が襲撃されている頃だった。べつにおれのせいでもない。成り行きだ、仕方ない。おれはラジオを探した。かの女の室にはない。おれは眼を閉じた。だれもいない場所へむかって思考した。だれも届かない場所にむかってからだを横たえた。爆発、炎上する窓。落下するだれかを受け止める腕がない。おれはしばらくスイッチを切った。

「どうしたの、野崎さん」

玄関で物音がする。

「きみは無事か?」

「どういうこと?」

足音がする。おれに近づいて来る。おれは眼を閉じたままだ。

「おい、ここはもう危ない」

「どういうこと？」

「おれの事務所がやられた。もうじきやつらが来る」

「やつら？」

おれは惚けたふりをした。野崎は服を着替えた。そして旅行鞄のなかをクローゼットからだして床に置いた。いざというときのために用心していたんだろう。おれはかれの渡る場所がどれほど危険かを悟った。だが、言葉にはならない。

「きみも早く逃げたほうがいい」

「どうしたんだよ？」

おれは気にかけるふりをした。まだ酔いが残っている。

「やつらはきみのことも知ってる。じきにここへ来るかも知れない」

「そのやつらってなんだよ？」

「いまは云えない」

頭のなかで壊れたラジオが云った、――その場から逃げろって。でも、おれは酒のほうが大事だった。残りのマリブ・ミルクを呑み乾した。野崎はあきれた顔でおれを見る。そしてリキュールの壜をおれの胸に叩きつけた。

「下に車を停めた。――さっさと乗れ！」

おれたち3人は慌てて階下へ降りた。銀色のスバルに乗ってスタートを切った。おれは酒を呑み、窓をあけた。どれが敵の車かと、後続車を見た。なにもかもが敵のようだった。けもののように走りながら、野崎は無線を弄りまわした。聞えて来るのはこんな声だった。

＊

あなたは自問するかもしれない、「あの美しい家はなんだろう?」
あなたは自問するかもしれない、「あの高速道路はどこへつづくのだろう?」
そしてあなたは自問するかもしれない、「わたしは正しいのか? まちがっているのか?」
そしてあなたはじぶんに云い聞かせるかもしれない、「なんてことをしてしまったんだ!」

トーキング・ヘッズ『ワンス・イン・ア・ライフタイム』

＊

目的のない逃亡であるのはあきらかだ。摩耶インター（阪神高速3号神戸線）から入って、阪神高速11号池田線を経由

し、吹田ＪＣＴから中国自動車道へ、そして最初のＳＡである、西宮名塩で停まった。あくまで便所休憩だ。おれは尿酸値の高い小便をした。赤みを帯びたそれがでた。そろそろ地獄の入口かも知れない。それでもまだ呑めると信じていた。酒は４本もある。ナチュラル・チーズも豊富だった。かの女の冷蔵庫からありったけの燃料を持って来ていた。それからもＳＡでたびたび休憩しながら道を西へ西へと進めみつづける。道後山を過ぎたのか。黒々とした山の影が険しかった。ここまで４時間。国道183号を突っ走った。おれはいい加減うんざりしていた。殺されるのは厭だったが、深夜のドライヴは神経を痛めた。我慢の限界だった。

「野崎さん、いったいどこまで行くんだ？」

「九州まで行く。長崎で船に乗り換える」

「気はたしかか？」

「ずいぶんと怪しいな」

「だろうね」

おれはチーズを喰って眠った。女の膝のうえでつかの間の夢を見ていたかったからだ。気づくと、窓が明るかった。車はまた休憩に入っていた。三次ＳＡというところにたどり着いていた。霧が立ち込めるなか、だれもいなかった。おれはひとりで便所に行き、車へもどった。ビーフジャーキーの袋をあけて、ひとり食べ始める。酒で流れた塩分を取り戻そうとした。やがてふたりももどって来た。着衣があきらかに乱れている。ふたりとも髪をぐしゃぐしゃにして泣きそうなつらだ。でも、おれはなにも訊かなかった。野崎は電話をとって、かけた。しばらくだれもなにも云わない。

「おれだ、泉さん。――大丈夫か？」と野崎は云った。「そうか、ならいい。今回の件にきみは無関係だもんな」と。そして通話が終わるとおれを見て云った、――「きみはほんもののアル中だな」と。それで沽券がどうなるわけでも、いまさらない。おれはげっぷを鳴らした。

「まあ、あれだ、おれも今回の件とは無関係だよな？」

野崎が首をふった。

「いいや、定市とダチなんだろ？」

「ダチってほどじゃない」

「で、おれを伊豆谷に売ったわけだ」

「誤解というものだよ、それは」

「もういい。黙っててくれ」

野崎はまた首をふった。そしてシートベルトをかけてエンジンをふかした。ぐるっと周囲を確かめてからアクセルを踏む。なんの迷いもない男のやり口だ。車はそのまま山口県まで進んだ。そして下松ＳＡでまた休憩をとった。おれたちは疲れ切っていた。高飛びの夢のも捨てて、車のなかにいた。それでもおれはひまつぶしに宝籤を買った。これからの人生にまだ当てがあるようにふるまおうとした。最後のリキュールを片手にあたりをぶらついた。車にもどると、野崎が云った、――「ここで逃げてもいいぜ。おれたちもテキトーな海岸で砂遊びでもしてるからよ」と云った。

「さみしいこと云うなよ」とおれは返した。

つよい陽射しのなかを海水浴場まで来た。だれも行先なんか決めなかった。できることはほかにない。野崎が降り、女が降り、おれが降りた。砂浜へと下る道をゆっくり歩む。待っているものはだれもない。ただ、あとから着いて来たんだ。伊豆谷とその仲間がおれたちを追いかけていた。もはや抵抗なんてしなかった。

「野崎さん、書類あるんでしょ？」

「ああ、持ってるよ」

「寄越しなよ」

野崎は旅行鞄から書類をとって伊豆谷に渡した。やつがニヤリとする。長い髪を持て余して、書類に眼を通す。なにかもがばっちりという顔で、野崎を見返した。

「着いて来な」

伊豆谷はそう云って去りながら、一瞬おれのほうを見て云った、――「あんた、好い眼をしてるな。罪穢れのない眼だ」と。いつだったか、おなじ科白をおれに云ったやつがいる。そいつがいまどうしているかをおもった。どうだっていいが。伊豆谷がおれたちの車を運転した。またも高速に入る。広島まで引き返して、高速を降りると、フェリーに接続した。おれたちに逃げ場はない。油臭い船内、おれたちは個室に連れられた。打たれた注射がなんだったのかはわからない。ただ身動きができなくなっていた。時間が遠くなっていった。室の出口が恐ろしく遠い。こいつはアルコールよりも深刻だ。そのあと野崎のことを考えた。女のことを考えた。窓のそとが暗くなり、おれは口をあけたまま、なぜかマスターベーションを試みる。いっこうに性器に反応がない。あきらめておれは眼を閉じた。そのとき、おれは初めて日常に還りたいとおもった。

じぶんの室に帰っておもうままにギターを弾きたいとおもった。つまらない役所の手続きや、支援員との会話がえらく恋しいような気分になった。このまま帰れないのではないかとおもって悔しくなった。どうしてこんなことになったのか、えらく頭に来た。

次に眼が醒めたとき、車のなかにいた。地下道へのスロープを下る。だれもみんな、なにも云わなかった。長い地下道だった。灯りひとつない暗がり。絡まったダクトが天井を走っている。やがて車はエレベータに入って、さらに地下へと運ばれた。機械の駆動音が悲しげだ。たどり着いたさきで車を降ろされた。通路を通って、ドアが開かれる。なかには異常にひろく、そして整えられた、巨大な執務室がつづく。タイプライターをまえにした男たちの集団が50人ほど固まっていた。キーを叩く音、書類の山、拡大鏡が上下する音。その中心にガラスの室があった。伊豆谷はなにも云わず、おれと野崎をガラスの室のなかへと導いた。

「しばらくおとなしくしてればいい」

「酒はないのか？」とおれは云った。われながら莫迦だった。

やつはニタつきながら云った。

「なにがいい？」

「よく冷えたウォッカだ」

「わかった、注文して置こう。長くなるからな」

伊豆谷が女を連れて去ろうとする。

「待て、かの女は関係ないぜ」
「連帯責任だ」
「置いていけよ」
「そうはいかない」
不安そうなかの女を連れて伊豆谷はいなくなった。扉が閉じられた。タイプライターの男たちがいっせいにこちらに拡大鏡をむけた。室のなかは少し暑かった。用意された椅子に坐って酒を待った。野崎を見るとずいぶん憔悴したように見えた。
「なあ、中尾さん。あんた勘違いしてるぜ」
「なにが？」
「おれたちはピクニックにでたわけでも、ヒーローになりに来たわけでもない」
「どういう意味だ？」
「伊豆谷に殺されて死ぬんだ」
おれは訊いた。
「いったい、なぜ？」
「おれにもわからない」
かれは首をふった。そして「巻き込んでわるかった」とつぶやいた。どうしてこうなるんだ。おれは頭上の照明を見上げた。強力なライトだ。思考が断片化していく。もうわからない。眼のまえのテーブルにはコップと水の入ったピッチャーが

ある。おれはとりあえず、水を注いで飲む。時間がだんだんと鈍くなっていく。

「まあ、そう云うなよ。定市とあんたを結びつけたのはおれかも知れないんだ」

野崎は応えなかった。

「おれはなんとなくだが、あんたに好感を抱いてる、だからいくらか胸が痛いんだ」

野崎は首をふった。

「よせよ、そんな湿っぽい科白でおれは動かんぞ」

今度はおれが首をふった。照明が明るすぎて眼が眩んで来やがった。ガラスのそとの男たちは相も変わらず、タイプを打ちつづけていた。そして時折、拡大鏡ごしにおれたちを覗いた。警備員の姿をした男が四方にたち、こちらも時折、おれたちを観察した。表情はなかった。おれはつづけた。

「そうじゃないんだ、おれの過ちを認めて欲しいんだ」

おれは本気で云った。そもそも、おれは野崎を売ったんだ。それを責めてもらいたかった。そうすれば少しでも救われた気分にれると信じ切っていた。野崎はからのコップに水を注ぎながら返した。

「もう人生が終わりだというのに？」

「まだわからないよ」

「あんたは伊豆谷という男を知らんのだ」

そのとき、スーツの男がドアをあけた。2本のウォッカを持って来ていた。おれは受け取るついでにその男を撲り倒した。

「おれは便所に行きたいんだよ！」

男はなにごともなかったかのように立ち上がるとおれの胸に一撃を喰らわせた。ほんもののパンチだ。息ができなくなる。おれは喘ぎながら床に手を着いた。そしてもういちど立ち上がろうとした。今度は肩を蹴られた。床に額をぶつけ、しばらく眼のまえが真っ暗だ。男の声を背中で聞いた。

「便所なら、おまえの眼のまえだ」

室のすみに西洋便器があった。気づいてはいた。しかし、こんな屈辱は受けたくはなかった。おれはもういちど男に挑もうとしたが、そのまえにやつはドアを閉じて去っていった。おれは便器に小便をして椅子にかけた。そして酒を呑み始めた。なんてことだ、逃げだすのも無理と来ている。

「さて、あんたも呑めよ、ポーランド産のいいウォッカだ」

野崎はあきれ顔で云った。

「おれのを注げよ、中尾さん」

おれはその通りにした。かれがコップに口をつける。

「ところで、あんたはなんで探偵なんかやってるんだ？　スリルと冒険のためか？」

「そんなんじゃない。たまたま知り合った人間に探偵がいて、就職の世話をしてもらっただけだ。そのまえは音楽をやっていた。救いがたい音楽をな。……で、そのあとおれは独立して事務所を持った。そんな頃だった、あの女と知り合ったのは。おれたちはなんどもヤッた。でも結婚には興味はなかった。どちらも自由でいたかったからだ。もう3年、セックス

はしてない。あんたはあの女が好きなようだがやめときな。苦しいおもいをするだけだ」

「ああ、かの女のグラタンが恋しいよ」

おれはまた一杯注いでから云った。

「そう、そんな感傷がおれたちを苦しめるのさ」

狂ったように野崎が笑った。タイプライターの男たちが一斉に止まった。おれは気にもかけずに喋りだした。

「おれはね、アル中病棟をでてからずっと不思議だったんだ。だれもがおれに宿命めいたものを見いだす。……いや、おれ自身がなにもかもに宿命を見いだすんだ。酒にも、創作にも、孤立にも、かの女にも、この一連の事件にさえも。でも、けっきょくは宿命なんてありはしない。ただじぶんの無意味さが怖いんだ。なにかで意味づけしないと、その輪郭が保てなくなる。それが怖い。だからここまで来ても酒にすがってしまうんだよ」

野崎は顔をあげて語りだした。

「それはおれもおなじだ。じぶんが探偵を撰んだのはけっきょく意味が欲しいからだ。業余のすさびとは無縁なものを求めた結果なんだ。それがじぶんをこうやって追いつめるとも知らずにね。あんたほどじゃないかも知れないがやはり怖い。アルコールについてはおれはよくわからないが……」

そのとき、ブザーが鳴った。別室から伊豆谷が現れる。まっすぐにこちらにむかうと野崎を呼んだ。

「下手な真似はするなよ。――死に急ぐ必要なんてないんだからな」

ドアをあけ、拳銃をむける。口径の小さい自動式だ。

「わかってるよ」

野崎は立ちあがった。そしてそのまま伊豆谷に連れられて廊下の彼方へ消えてしまった。せっかくふたりとも素直に話していたところなのに。おれはひとりで酒を注いだ。もうそれは温かった。それでも口をつけた。別室から女の悲鳴が断続的に聞えて来る。おれにはどうすることもできない。かの女の痛みがおれの内奥へと入って来る。それはとても苦しかった。痛かった。おれはガラスの室に閉じ込められ、身動きがとれない。それなのにかの女の苦痛だけは直に刺さる。おれは耐えきれなくてからっぽになったグラスを床に叩きつけた。ガラスがわれ、破片が飛び散る。警備の男が駈け寄っておれを見る。おれはなにも云えずに椅子へもどり、また酒を呑む。呑むという感覚がやがて遠くなり、動作がじぶんでもはっきりわからないくなる。なにしろ、もう2時間は呑んでいるんだ。タイプライターの打鍵がやがて不規則になりはじめ、視界が定まらなくなって来た。おれはわれた鏡のように立ち上がって、水を飲んだ。酔い醒ましにもなりはしない。おれは腕時計を外して、視界からよけた。天井の照明はなおもまぶしい。ゆらめいた光りがおれのなかを彷徨っている。色とりどりの魔法のように秘められた欲望が顕わになった気分。ひとり、またひとりと消えるタイプライターの男たち。またもブザーが鳴って完全にだれもいなくなった。そして通路のむこうから銃声が一発だけ聞えた。やがて伊豆谷がひとりでおれのまえに来た。そしてドアをあける。おれのまえに坐って拳銃をむける。おれは黙ってやつを見た。やつにも表情がなかった。片手で脇腹を押さえている。息も絶え絶えに喋りだした。

「野崎くんはわるいやつじゃないよね？」

やつが云った。どう答えていいのか、わからない。

「野崎くんはわるいやつじゃないよね？」

「ああ、わるいやつじゃない」

「でも、ああいうのはよくないな」

伊豆谷の眼にはおれが見えなかった。そのままゆっくりと床に倒れ、手足を上にむかって伸ばした。それも束の間のことですぐにぐったりとする。脇腹から血が溢れだした。おもわず、洩れた悲鳴と嘔き気を飲み込むようにおれは立ちあがった。爪先でやつの死を確かめる。野崎はわるいやつじゃない。おれはおそるおそるガラスの室をでた。鍵は開いたままだ。だれもいない。別室にも、廊下のさきにもだれもいない。おれはもどって腕時計をとった。生憎日付の感覚、昼夜の感覚がわからない。おれはだれかがもどって来るのを待った。だれでもよかった。酒はもう呑まなかった。時間だけが過ぎる。腕時計をつけ直した。時間にはなんの意味もない。静かすぎる。もはやかの女の悲鳴もない。警備もいない。おれと死体だけだ。じりじりと暑くなる室内で、おれはピッチャーの水をぜんぶ飲んだ。喉がやたらに渇く。便所に立った。さっきまでだれかが一緒だった気がする。しかし、それを信じられない。ふたたび室をでた。ふたたび生きている他人を探した。だれもなかった。おれはいままでの順路をたどって車にたどり着いた。乗り込んでそのまま地上へでた。すっかり夜だった。数時間のドライヴで新神戸へもどった。車を棄てるとき、社内の指紋を拭き取った。なにもかもが彼岸の出来事のように感じられた。おれは日常へ回帰するべく、アパートへ帰った。

＊

「わたしは、普通に見えるものが実は一番奇妙であるという事実に、常に惹かれてきた」

デヴィッド・バーン

＊

今年でこの物件に棲み始めて9年になる。壁や床の汚れにくわえ、ゴキブリが残していった糞害がきびしい。不精者のじぶんとしても赦せない現実だった。あの事件から3ヶ月。警察は完全に手を引いた。しかしいずれなにかの理由で捕まるのかも知れないとおもっている。でも、いまさらこの土地を去ることもできない。おれは福祉に繋がれた飼い犬だ。どうしたものか、生きることに真剣になれない。いまでもたまにあの悲鳴が聞えるときがある。眠る時間をアルコールへ譲り渡した、多くの夜がおれのなかで息づく。それでも以前とおなじように保護費を頂き、作業所に通い、文学に打ち込んだ。

それまで書いた手記を役所にだしてもみた。けれども鼻で笑われた。おれはまた収入申告書をだしに区役所へいった。区役所の廊下は脂臭かった。黄ばんだ壁のむこうに生け贄が並んでいる。おれは迷わず扉のむこうへ入っていった。窓口で用件を伝え、案内された位置に坐る。ケースワーカーの布瀬女史がおれの収入申告書を受け取った。B型作業所の工賃で、￥1万3千也。作業なんてでたらめなものでおれは在宅で作文を送りつけていた。布瀬は改めて口をひらいた。

「中尾さん、もう退院してだいぶ月経ったけれど、どうですか？」

「どうって？」（どうもこうもない）とおもった。

「体調管理はできてますか？」

「ええ……」（きょうも呑んでから来たんだけどな……）とおもった。

「来月通院ですよね、検診結果を提出してもらいたいんですが」（やっかいなことになっちまったな）とおもった。行政はなにもかも正しい。おれという堕落者をどういたぶってやればいいか、十全に心得ている。

「はい」

「提出がされない場合、指導の対象になることもありますから、気をつけてください」

かの女が立ちあがった。おれも立ちあがる。帰りがけの1杯が欲しくなった。口が渇く。喉から呼び声がする。幸いきょうは精神保健福祉には用事がなかった。

「中尾さん、5階の窓口へ行ってください」（なにいってんだ？）とおもった。5階は精神保健福祉の窓口がある。おれは肯いて室をでた。階段で5階まであがる。またも黄ばんだ壁に囲まれ、厭な予感がした。案内人に用件を云って、長椅子で待った。やがておれを呼ぶ声がして、初老の男が対応した。おれを病院へ送り込んだ張本人だった。表情を硬くして挑む。机について会話を始めた。

「中尾さんね、どうですか？」

「どうって？」（どうもこうもない）とおもった。

「お酒、呑んでないでしょうね」

「ええ……」（きょうも呑んでから来たんだけどな……）とおもった。

「中尾さんね、下手をしたら慢性膵炎のすえに膵臓癌ですよ」

「ええ……」

「あなた、もう酒は呑めないんですよ」

「わかってますよ」

宮部とかいう、その初老はため息を吐いた。そして分厚いファイルを手許に寄せ、それをひらきながらおれの病歴をチェックした。「2年まえに労災病院へ運び込まれてますよね？ 病院はホテルではないんですよ」と云った。そんなことはわかっている。そのあいだも、机の角に置かれたペットボトルの水が気になっていた。水なのに、なぜか喉が鳴った。酒をやめるのはただの対処であって、根治ではない。おれがなぜ酒に引き寄せられるのかがわからなければ解決しようがない。そのあとはずっとヘルパーサービスの利用について押し問答をした。かれは入れるべきと云い、おれは入れないと譲らなかった。相手をうんざりさせることにかけて、おれは上手だった。無事に話が終わって、階下へいくと、まただれかがおれを呼び止めた。ワークサポートの担当者だった。かの女は笑った。

「中尾さん、お久しぶりじゃない？」

「ええ」

「障碍求人の話、もう決まりました？」

「いいえ」

「また求人票が必要でしたら来てくださいね」

かの女が去って、おれは建物をでようとした。ところが知らないあいだに地下に来てしまったようで、出口が見つからなかった。てきとうなドアをあけて、なかへ入った。絡まったダクトが天井を走っている。どうやら水道施設に迷い込んだらしい。またドアをあけた。自動車がゆっくりむかって来る。そして通り過ぎる。冷や汗がでた。だれかがおれを追いかけているようにおもう。どうにか出口にむかった。スロープをあがると、見憶えのある通りだった。おれは地下駐車場に侵入していたのだ。汗をぬぐって酒が売ってある場所を探した。

見つけた店でハイボールを買った。呑みながら考えるのはあの悲鳴だった。しかし、その悲鳴がいったいだれの悲鳴だったかが懐いだせない。ふるい紙フィルムのように映写機に引っかかって見えなくなってしまったようだ。おれはどうにかこうにか記憶を引っ張りあげた。ガラスの室が見えてきた。一緒にいた男はだれだろう。いやに紳士づらした男だったようにおもう。いったい、やつとはどうやって出会ったのかもわからない。空気の薄いガラスのなかで互いに声をかけた記憶はある。だが、その起源がわからない。自然融解する都市、あまたの在留者があまたの理由によって拒絶される理由、そんなものはおれにもわからない。

ただ湿った微情のように這いまわる感情がおれのまわりを巡る。いったい、どれほどの使者が送り込まれて来たのかを電鈴が告げる。かの女はいったい、なんだ？　おれの妄想か？　終わりのない地下迷宮のなかで悲鳴を残したのはぜんぶまやかしか。　ハイボールは薄かった。炭酸が抜けているのか、舌が鈍っているのかもわからない。呑み干しても、躰のどこにも届かない。酔いは立ち上がらず、かわりに時間だけが居座る。時計を見るが、針の意味がつかめない。何時であっても差し

支えはなかった。おれは歩き出す。どこへ行くわけでもない。ただ人の流れに混じる。都市はいつも通りだった。閉まったシャッター、光る看板、信号待ちの列。だれもおれを見ていない。だれもおれを探していない。追跡はなかった。裁きもなかった。あるのは、この状態がこのままつづくという確信だけだ。懐いだせないことが増えていく。名前、声、顔、理由。かわりに、制度の言葉だけが残る。申請、通院、指導、継続。どれも正しい。どれも安全だ。そこに異議を挟む理由を、おれはもう持っていない。室へ戻ると、灯りを点けた。ゴキブリの糞はまだそこにあった。壁の染みも増えている。9年分の生活が、正確に沈殿している。おれは上着を脱ぎ、椅子に坐った。机の上に白い紙を置いたが、なにも書かなかった。書く必要がなかった。

クリーム・リキュールのアイスや、マリブ・ミルクにおもいをめぐらしていた。さっきまでの会話は憶えていない。隣で笑っているアザミという黒髪の女がふいにおれを小突いた。――「中尾さん、それって宿命的に考え過ぎよ」って。なんのことだか、わからない。室のカーテンはかぜで悠々としていた。――「なんだよ、宿命って?」(聞き返してもムダなような……)とおもいながら云った。女は呑みかけのグラスを卓上に置く。

「つまり中尾さんにとって演じるということが自然体なのよ。べつにあなたの系譜から受け継いだものじゃないのよ。だから舞台に立つのも歌を唄うのもごくごく自然なことなのよ。なにかもを宿命的に考えてしまうから、却って息苦しくなるのよ」って云う。おれにはなんだかわからなかった。ここまでどうにか、やって来て、じぶんを責める気分にもなれない。酒はまだある。命はまだある。ラムを牛乳でわって呑んだ。時間は5時だ。ほんとうなら野崎の事務所が襲撃されている頃だった。べつにおれのせいでもない。成り行きだ、仕方ない。おれはラジオを探した。かの女の室にはない。おれは眼を閉

じた。だれもいない場所へむかって思考した。だれも届かない場所にむかってからだを横たえた。爆発、炎上する窓。落下するだれかを受け止める腕がない。おれはしばらくスイッチを切った。

すべてが迷妄と知るまでひどく時間がかかった。おれは崇高なにかだった。さっきまでの自責や他責を棄てた。そうおもって鏡を見た。いつもとなんら変わりのないじぶんが見えた。おれは偉大だ。栄光につつまれた作家だ。そんな気分だった。野崎が語らなかったものがどんなものかをおれは知らない。アザミが語ろうとしなかったものがどんなものだったかも。そして伊豆谷が知っていたはずのこともおれは知らない。おれはなにも知らなかった。でも、それでいい。今週も警察からはなんの連絡もなかった。どんな地下組織からも電話はなかった。おれは無事。それでいい。野崎も女もどうでもいい。ただかの女のマカロニ・グラタンだけは惜しい気がしている。いったい、なにが問題だったというのか。

おれは声をあげて笑った。死ぬほど笑った。でも心の澱がなくならなかった。気づけばベッドの上で呪詛を嘔いていた。たくさんの過去が顔をだした。たとえばおれに嫌がらせをした女子ふたりのこと、おれが通るたびに悲鳴をあげておれを蔑んだ。おれは30過ぎて復讐をした。そのうちのひとりをひどく罵って、最後には「一発やらせろ」と云った。かの女がおれに連絡帳を持って来てくれる唯一の存在だということは知らずにだ。おれはわるくない。おれを憎悪に駆り立てる、すべてのものが卑しく醜いだけでだ。おれはそうおもう。

ラム・レーズンのチョコーレイトや、バーボン・ウイスキーにおもいをめぐらしていた。さっきまでの会話は憶えていない。隣で莨を吸っている若村という白髪の男がふいにおれを小突いた。――「中尾くん、それって宿命的に考え過ぎだよ」って。なんのことだか、わからない。病院の喫煙室は烟で濛々としていた。――「なんですか、宿命って?」(聞き返しても

ムダなような……）とおもいながら云った。若村は吸いさしの1本を灰皿に擦りながら話す。

「つまりさ、きみは作家の弟子で、系譜のある存在なんだろ？　でも、だからって先々代のようにならなくちゃなんて考える必要なんかないのさ。べつになまえだけでも残ればっておもえばいい。媒体で目立つことだけが詩人ではないだろう？」

なにもわかっちゃいないのだ。どれほどの辱め、どれほどの痛苦がおれを動かして来たのかをいまいち説明することはできないし、それをこの男が理解するともおもえない。ただじぶんのやっていることが、やろうとしていることがまちがっていないのを明らかにしたかった。

「おれは無名のまま終わりたくない」

烟をよけて声をだした。

「それはおれもおなじだったよ、でもいまはちがう。地方の劇団員として、それなりに愉しい。東京には疲れた」

「愉しかったら、どうしてここにいるんですか？」

病院はアルコール症の専門だ。若村は辞を失い、おれの横顔をじっと見た。そしていった、――「どうだ、きみも劇団に入らないか？」。それで生活ができるとはおもえない。もうずっとむかし、『犯罪友の会』という小劇団の面接にいったことを懐いだした。表情の乏しいおれに団長氏は「きみはいじめにあったことがあるのか？」と云った。「いじめに遭った子はみな表情が乏しい」とも。おれは劇団のなまえから勝手にミステリでもやっているのかとおもったがちがっていて、入団を辞退した。それにチケットをさばけないからだ。

「おれはいいです。文学のほうが気が楽だから」

ひとりでいられる表現のほうが性に合っていた。それ以上、若村の視線もむなしく、ひとり喫煙室をでると、おれは娯楽室へいった。再入院――つまりでもどり男が差し込みアンプでエレキギターを弾いている。おれもギターを持ってくればなっておもった。いっこうに巧くならないギターだったが、気晴らしにはなりそうだった。

ある晩、患者のひとりが暴れだした。眼を剝いてほかの患者に挑みかかった。看護人たちが手早くかれを片づけた。地下牢にむかって連行していった。嵐のあとの静けさをみなが見つめる。おれはサーモンフライを喰いながら、じぶんが去勢された牛のように、もはやだれにも挑みかかったりはしないのを実感した。むかし、父を撲ったように。おれという男のなかにはもはや激しさはなかった。過去、じぶんの怒りでじぶんが燃えあがっていたときもあった。なにもかもが他者の拒絶というかたちで決着し、そして放置された。おれはおれによって追放されたカリギュラだった。

ほかの患者たちが、和気藹々としているのがいやだった。おれはやつらとはちがうって心のなかでおもいつづけた。そうおもえばじぶんだけが真実のなかにいられるような気がしたからだ。退院もまぢかになった頃、若村は院内飲酒で地下牢に入れられるところを見た。おれたちは眼を合わせなかった。アウトフォーカスする視界のなかで、かれがなにかいう。おれは答えない。

おれは扉をあげて、別室にでた。そこは巨大な執務室で、タイプライターを打鍵する男たちがいっせいに拡大鏡でおれを見た。おれは気づかないふりをして、中央にあるガラスの室にたどり着き、そのなかへ入った。おれは野崎の隣に坐って女の帰りを待った。やがて来た女に話すべき言辞を備えて待った。5時間も待った。やって来た女はおれたちに挨拶をくれた。にっこりと笑うその顔におれたちは安堵の息を吐いた。おれは云った、――「きみのマカロニ・グラタンがまた食べたい」

と。かの女は云った、――「またつくってあげる」って笑った。

次第に室は暗くなった。おれは王冠をかぶせられた。信じられないほど重かった。それでもおれは首を据え、堪えた。ガラスのむこうの男たちがおれを見守る。照明の熱で冠は泥のように溶けだした。野崎も女もなにも云わない。やがておれは不思議な全脳感とともに冠のなかへと吸い込まれてしまった。あとは漆黒の闇がつづき、おれがおれであるかさえ、わからなくなってしまったんだ。また、かの女のブルーベリー・ワッフルが食べたいとつよくおもった。それきり夢幻の世界に迷い込んだように手足をひらすら櫂のように動かしているのがおれだったわけだ。

＊

そしてあなたは自問するかもしれない、「……どうしてわたしはここに来たんだろう?」

トーキング・ヘッズ『ワンス・イン・ア・ライフタイム』

＊

あとがき

この本に収録したのはどれも新人賞に落選した作品である。うらみごとを云ってもしょうがない。留置場を出てからというもの、ろくなことがない。知人にはきらわれ、女には逃げられ、借金だけが増えた。そういうどうしようもないところで書いた。

小説はほかにも書いたが、ひとに、それも新人賞の選考委員や編集者に読まれることを想定して書いたのはこれだけである。だから落選した以上、本来なら机の抽斗にでも仕舞っておけばよかったのかも知れない。しかし抽斗に仕舞ったところで人生が好転するわけでもない。

バーナード・ショウに「自由には責任という意味がある。だからみんな自由から逃げているのだ」という言葉がある。最近になってその意味をよく考える。小説を書くことが自由だとはおもわない。むしろ不自由な人間が、不自由なりに現実へ抵抗するための手段に過ぎない。孤立には代償がある。わたしは長いあいだ、その代償を払いながら生きて来た。その支払いの記録がこの本である。

まあ、クソとマスと暴力だけしかないわたしになにか与えられるものがあるとおもうのなら、与えてくれ。

二〇二六年六月

著者

ボートゲームの舟附場／中田満帆小説集（検討用見本版）

2026年10月25日／発行予定

発行者／中田満帆

発行者／a missing person's press

住所／〒651-0092 神戸市中央区生田町1-1-13 新神戸マンション北館303号

電話/078-200-6874

メール／mitzho84@gmail.com

装丁／著者自装